

2020 年度日本語教育センター活動報告

CJLE Program & Activity Reports (2020)

目次

1. 各科目についての報告.....	2
2. 2020年度 Placement Test実施報告.....	113
3. 2020年度日本語相談室実施報告.....	116
4. 2020年度立教大学漢字検定試験実施報告.....	122
5. 2020年度日本語自主学習用図書貸し出し実施報告.....	122
6. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告.....	122
7. 日本語教育センターシンポジウム実施報告.....	123
8. 日本語教育センターニュースレター発行報告.....	123
9. 短期日本語プログラム報告	124
10. 新型コロナウイルス対応まとめ.....	124
11. センター員活動報告.....	127
12. 2020年度FD記録.....	134

2020年度日本語教育センター運営体制

2020年度日本語教育センター会議開催記録

1. 各科目についての報告

2020 年度 J0 授業記録

コース概要

J0 は、日本語の学習経験がなく、帰国後、継続して日本語を学習する予定がないものを対象としたサバイバル日本語のコースである。

担当者名：＜春学期＞金庭久美子、布村猛、神元愛美子

＜秋学期＞武田聡子、金庭久美子

授業コマ数：週 3 コマ

履修者数：春学期 1 名、秋学期 5 名

使用教材：独自教材

目標

日常生活に必要なサバイバル的日本語表現や語彙を身につける。また、ひらがな・カタカナの読み書きも身につける。

授業の方法

J0 では、日常生活でよく出会う場面や、大学生活を送る上で必要となりそうな機能を取り上げ、そこで使用される表現や語彙を学習した。

毎回の授業では、まず、ひらがな・カタカナを 10 字ずつ学習した。かなの練習が終わると、その日に学習する場면을提示し、必要な語彙を導入した。そして、重要な文型や表現をキーセンテンスとして学習し、口頭練習を行った。最後に、その日の場面の全体の会話練習や、タスクを行った。J0 で選定した場面・機能とそれぞれのキーセンテンスは以下の通りである。

場面	キーセンテンス
挨拶 自己紹介	おはようございます、こんにちは、こんばんは、ありがとうございます はじめまして/（私は）～です/～人です/専門は～です/どうぞよろしく/～さんは～ですか？/はい、いいえ/～さんは？/お仕事は？/お住まいは？/お国は？/N が好きです、好きじゃありません
場所を尋ねる	この辺に～、ありますか/～はどこですか/～に行きたいんですが…
買い物	～ありますか/いくらですか/～円です/～ください

レストラン	～、お願いします/N で
許可を得る	N でいいですか/V てもいいですか
依頼する	V てください
予定・行動について話す	～に行きます/行きましょう/V ます・ました/何をしますか・何をしましたか /V たいです
感想を言う	～はどうですか・どうでしたか/形容詞・形容詞の過去形

上記の内容以外に、数回の授業が終わるごとに、「Activity」の時間を設け、日本人学生をボランティアとして教室活動に参加してもらい、それまで学習した内容の復習と応用練習を行った。また、習字や暑中見舞い・年賀状を書くなどの日本文化を体験する時間も設けた。

学期の最後には、このコースで学習した文型や語彙を用いたスピーチを行った。

2020 年度春学期は 12 週間週 3 回行われた。また、今学期は Blackboard に自習用のクイズ（ひらがな、カタカナ、文法、語彙）を用意した。履修者が 1 名だったため、日本人との交流の場を設けることにし、日本人学生のボランティアの参加できる日を増やし、計 5 回実施した。

2020 年度秋学期は通常通り 14 週 3 回の実施であった。秋学期も春学期同様日本人ボランティアの参加できる日を増やし、計 8 回実施した。来日できない学生もおり、非常に有意義な活動を行うことができた。

結果と課題

<春学期>

1 名のみの参加であったが、最後まで精力的に取り組んだ。発音上の問題から書き取りが苦手なものもあり、発音練習を行いながら、ひらがなの練習を行った。カタカナはカタカナの語そのものを覚えることで、間違いなくディクテーションできるようになった。J0 の指導項目である文型、語彙についてはテキストに沿って実施し、Blackboard に用意したクイズ（ひらがな、カタカナ、文法、語彙）にも熱心に取り組んだ。予習を欠かさず、クラスでは応用会話を行うことができたため、会話は非常に上達した。時間にも余裕があり学習者の希望する漢字や読解もクラスで扱うことができた。また、オンラインのおかげで PC を使うようになり、タイピングの指導ができた。漢字の読み方がわかり形がおおざっぱに認識できていれば、漢字を使用することができ、結果的に手書きの活動でも漢字を使用するようになった。

従来は教室の外に出てアクティビティを行う活動であり、日本人との交流に差が見られたが、今回はあらかじめボランティアを募集し、オンラインクラスに 5 回参加してもらった。ボランティアの手加減のない話し方の質問にも物怖じせず、聞き返しを上手に使用して、質問の意味がわかるまでやりとりをしており、非常に有意義な活動だったと思う。ボランティアも交流に積極的であった。人数が少ない場合はボランティアの手を借りるのがよいと

思う。

課題としては、オンライン時の文字の導入と確認である。筆順については指導することができたが、本人の書いた字形を直すのが難しかった。次回はお手本をなぞるなどの方法を薦めたい。また、確認のためのひらがな、カタカナのまとめテストでは、これまで紙のテスト用紙に手書きで五十音を埋めるテストを実施していたが、オンラインの場合、同様のテストを不正行為なく実施する方法が思いつかなかった。今回はたまたま 1 名でまじめな学生だったので実施できたが、次回は手書きで五十音を埋めるテストについては五十音表ではなく、ディクテーションを増やす、選択クイズを行うなどした方がよいだろう。

<秋学期>

9 月の開講時は 5 名全員が自国におり、日本時間 10 時 45 分開始の授業に対し、夜中の 2:45~4:45 開始の授業となった。時差もかなりあり心配されたが、週 3 回遅刻することもなく、全員がきちんと出席し、課題もこなしてまじめに取り組んだ。11 月には 2 名の来日があったが、残り 3 名は 1 月の渡航日が決まっていたものの、12 月末の外国人入国規制により最後まで来日することができなかった。全員大学院生の社会人経験者ということもあって、時間の自己管理が徹底していたのだと思う。

オンラインという性質上、ネットワークの不具合でうまく授業を受けられないことがあり、気の毒であったが、本人の自習の努力で授業内容に遅れることなく、ついてくることができた。

今学期は通常より多く、全 8 回日本人ボランティアに参加してもらったが、自分の国では接することがあまりない日本人との交流のおかげで、生きた日本語を学ぶことができたと思う。また春学期の学生が日本語のタイプ入力ができるようになったことから、秋学期からの新たな試みとして、日本語タイプ入力の仕方を指導し、42 回中 20 回目の授業より、文法の確認や作文の際にチャットや Word にタイプ入力をさせた。そのおかげで日本語の文を書くことへの関心が高まったと思われる。

今回の学生たちのうち 3 名は読み書きのスピードが速く確実にマスターしたと思われる。また、通常の対面での授業と変わりなく実施することができ、今学期の受講生 5 人の成果を見て、オンラインでも日本語を向上させることは可能であることが証明されたと思う。集合で実施するより個別に集中して活動に参加できる面がありよかったと思う。

今後の課題としては、文字の産出の確認である。春学期同様、ディクテーションの結果は、紙やボードに書いて画面に映して見せてもらったが、字形の修正に苦勞した。また、教室でのテストとは異なるので何かを見て書いたとしても画面越しには確認できない。引き続き文字のテスト方法については検討していきたい。

2020 年度 J1 授業記録

コース概要

J1 は、日本語を学習したことはないが、ひらがな・カタカナは既習である学生、及び日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない学生を対象とし、週 5 日の授業を通して、日本語での基礎的な表現を学習する初級のコースである。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：＜春学期＞富倉教子（文法 1）、三浦綾乃（文法 2）、三浦綾乃（聴解会話）、
任ジェヒ（読解・作文）、任ジェヒ（総合スキル）
＜秋学期＞任ジェヒ（文法 1）、山内薫（文法 2）、東平福美（聴解会話）、
高嶋幸太（読解・作文）、神元愛美子（総合スキル）

授業コマ数：週 5 コマ（文法 1、文法 2、聴解会話、読解・作文、総合スキル）

履修者数：春学期 5 名、秋学期 3 名

使用教材：独自教材

目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるようにすることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ標記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習することとし、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法 1：名詞文、形容詞文、動詞文それぞれの最も基本的な文型、及び助詞、動詞、形容詞の基本的な活用について理解し、それらを日常生活の場面で使えるようになること。

文法 2：文法 1 で習った文型や語彙を使って、正確な短作文ができるようになること。

聴解・会話：文法 1 で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解・作文：文法 1 で習った文型が使われている文章を読み、習った文型や語彙を使って 400～600 字程度の作文を書けるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

文型リスト

J1 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
プレレッスン	• Exchanging greetings • Learning some survival expressions • Learning the writing system of Japanese language

	• Learning basic numbers • Learning basic Japanese sentence pattern(Noun sentence) • Learning basic words(Date、 Time expressions)
1	• Noun sentence ～は～です • Demonstrative pronoun こ・そ・あ・ど • Noun modification(kinking nouns) ～の • Particle “also、 too” ～も • Particle(question marker) ～か • Interrogatives なに・だれ・どこ • Pronominal “one” ～の • ”please give me ---“ ～をください • Counterword ① ～円、個、才、ひとつ • Sentence ending particles ～よ、ね
2	• Polite speech and casual speech • い／な Adjectives as predicate ～は Adj.です。 • Use 2 or 3 adjectives to describe topic て-form of adjective and sentence connectives ～が、それに、でも • い／な Adjectives as noun modifiers • Interrogatives どんな、どう
3	• Topic-subject construction with adjective predicates ～は～が Adj.です。 • Adverbs indicating ‘degree’ • Explaining reasons ので、から
4	• Verb groups、 dictionary form of verbs • Polite and casual verb sentences • Particle を(Object marker) • ～は～を V sentences • Particle で(Location marker) • Particle で(Instrument marker) • Particle に／で(Destination/direction marker) • Mimetic words ① Eating、 drinking
5	• Giving and receiving something ① • ～は Space/area/pass を V(motion verbs) • て form of verbs • Making requests ～てください／～ないでください • の : Noun equivalent marker

	• V て、V て、V。 • Asking permission/Giving permission/prohibition ～でもいい／～てはいけない • Mimetic words ② Watching、seeing、speaking
6	• ～は Object に V sentence • Topic は V(Intransitive verbs) • Particle に(Time marker) • ～から～まで • Duration on time ～間 • Approximate time/approximate quantity ごろ、ぐらい • Time expressions まえに、あとで、これから • ～と思う • ～だろう／だろうと思う • Mimetic words ③ Condition of the body
7	• Sentence of existence and locatives いる、ある • Counter word ② ～人、枚、冊、本、匹、階 • だけ／しか • N1 か N2(or)／N1 も N2 も(both、neither) • N1 は A、N2 は B(Contrast は) • Noun と／や、Noun/adjective/verb て form、V-たり V-たり Adjective/verb し • ～かもしれない
8	• V-ている(Continuous action、state) • Verb with clothing 着る、はく、ぬぐ、かぶる、かける、する • が used to describe a condition、scene before one's eyes • ～中(during、while、through) • もう／まだ • ～ませんか、～ましょう • Questions word + か／も • ～んです ①
9	• Giving advice ～たほうがいい • Particle に(amount of frequency per time unit) • Adverbial usage of adjectives • Noun になる • Conditional ① : と • Chang of state、condition(adjective + なる)

	・ Mimetic words ④ Pain
10	・ に(final destination)／を(point of departure) ・ V-たことがある(experience) ・ Adjectives indicating one's own emotion/feeling/desire/pain ・ Third person's emotion/feeling/pain/desire ・ Conditional ② : たら ・ Even if ～ても

授業の方法

J1 は週 5 日のコースであり、文法 1、聴解会話、文法 2、総合タスク、読解・作文の順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法 1：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

文法 2：文法 1 で習った語彙や文型について、書き練習を中心とした活動を行った。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

読解・作文：隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法 1 で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って 400~600 字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロール・プレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

結果と課題

<春学期>

文法 1：今回授業参加だけでなく、クイズや宿題の提出なども全てコンピューター操作となり、学生も教師も多少の混乱をきたしていたところから始まったが、徐々にそのスタイルにも慣れ、最後まで無事に学期を終了することができた。また海外から早朝であるにもかかわらず休むことなく参加してきた学生がおり、通常とは違った環境、状況下においても、授業に積極的に参加し日本語を学ぶ学生達の姿勢が見られた。また少人数であったこともあってか、比較的個々の学生に対応しやすく、学生も質問をするなど、授業に参加しやすかったようにも思われた。日本語の内容としては、新しい情報を理解し、定着するのに個人差があり、全体的に時間がかかるようであったが、学期中盤あたりから、学生も少しずつ日本語に慣れてきたのか、進むペースが早くな

ってきたように感じた。今後もオンラインであった場合、全員の集中をどれだけ長く保たれるのか、また通常の授業スタイルを好む学生が多い印象の中で、どうやってオンラインならではの良さ生かしていくのか（または不便さを少なくするか）が、今後の課題であると思われる。

文法 2：クラスでは、まず文法の宿題の答えを確認してから、課の復習をし、さらに理解を深めるために書くことを中心に練習を行った。学期の初めはワークシートを配布して書く練習を行っていたが、提出されたものからでは学生の理解度がわかりにくく、フィードバックがその場でできないこともあったため、学期の中盤からは Zoom チャット機能を用いて書く練習を行った。学生が書いた文を教師が PPT のスライドに張り付け全体に共有することで、他の学生がどのような文を書いたかが分かり、助詞・活用・ごいのミスを互いにチェックでき、習った文法の意味や用法を改めて考えるきっかけになったので良かったと思う。J1 は一課の学習項目が多いため、文法 1 で習ったことが消化できないまま授業に臨む学生が、学期の終盤になるにつれて目立ってきた。語彙の定着にも個人差がだいぶ生じており、ついてくるのが難しい学生へのフォローをオンライン授業で行うのは難しかったため、そういった学生への対応は今後考えていかなければならないと思う。また、今学期はオンラインテスト対策もかねてタイピングで書く練習を行ったが、手書きもまだ不安な J1 の学生に日本語でのタイピングを教えるのは少々大変であった。しかし学期の終盤にはある程度の速さでひらがな・カタカナが打てるようになっており、成長を感じた。一方で、今後学生が日本語を勉強し続けることを考えると、何度か手書きで文を書く練習をして、字形などをチェックしてあげるべきだったと反省している。

聴解会話：このクラスでは、文法クラスで習った文法項目を使った聴解・会話練習を行うことでその文法の定着を図った。聴解練習では、長めの会話を聞いて答える練習も行ったが、まだ文法項目の基本的なポイントが理解しきれていない学生が多かったため、ごく短いやり取りを聞いて答える練習を多めに行った。会話練習では、習った文法が使われる場面を想定し、ロール・プレイやインタビュー形式の練習を Zoom のブレイクアウトセッション機能を用いて行った。学期の終わりには、日本語ボランティアの学生を呼んで会話活動もした。今学期はオンライン授業ということもあり、学生のネット環境によっては聴解練習がスムーズにできなかったり、ペアやグループで会話練習をしているとき、教師はクラス全体を見ることはできず、それぞれのグループを行ったり来たりしながら学生の様子を見なければならなかったりと、オンライン授業ならではの難しさを感じた。今学期はターゲットの文法をメインにした基礎的な練習をすることが大半を占めたが、今後は基礎的な練習と実際の生活における運用を想定した応用練習のバランスを考えていきたい。

読解・作文：今回のクラスは 5 名と少人数であったため、Zoom のホワイトボード機能やチャット機能などを活用することによって、対面授業と同様に、教師と学生間または学

生間のインターアクションを通じた授業展開が可能であった。しかし一方で、オンライン授業ならではの課題もあった。読解授業においては、携帯から授業に参加している学生の場合、画面共有ができず、本文のどの箇所について質問をしているかが正確に伝わらないといった課題があった。また、PDF で教材を配布していたため、ルビが小さくて読めないといった J1 ならではの課題もあった。作文においては、日本語のタイピングに関して学生がストレスを感じるといった課題があった。特に促音などは、どのキーを押す必要があるかについて一つひとつ丁寧に確認する必要があるがあった。日本語による文書作成をしたことがない学生を対象に「打つ」ことを取り入れた作文授業を実施することは、多くの課題を解決する必要があると感じた。そして、「書く」ための学習だけではなく、「打つ」ための学習も非常に重要であると改めて感じた。この点は、今後の課題としたい。

総合スキル：今学期はコロナの影響や授業形態の変化により、日本人学生とコミュニケーションをとる機会が非常に限られていたため、日本人学生との会話の場を通常よりも多く設けるように心掛けた。一部の学生は授業後にもボランティアの日本人学生に日本語の質問をするなど、教室内の交流の場を教室外にまで展開していたようである。また、オンライン授業だったため、新座キャンパスにいる学生も池袋キャンパスの授業にボランティアとして参加できたことは、オンラインならではの利点だと感じた。このように日本人学生との交流の機会を提供することで、今学期も通常の対面授業と同じ授業活動（スピーチ、ロール・プレイなど）を行うことができたが、課題もあった。それは、インターネット環境によるものである。総合スキルでは、PPT を用いたスピーチの場、質疑応答の場が多く設けられていたが、インターネット環境の不安定により授業に支障が起きる場合が多々あった。また、海外から参加する学生や帰国のため空港から参加する学生など、イレギュラーな状況が続き、グループ活動のスケジュールに再調整が必要な場合も多々あった。状況の変化に影響されず、全受講生に平等な学びの機会を提供するためには、どのような工夫が必要かを考えることを今後の課題としたい。

＜秋学期＞

文法 1：今回のクラスは 3 名と少人数であり、全員非常に明るく、学習意欲が高い学生だったため、新しい学習項目についての質問や学生同士のフィードバックが活発に行われる双方向型授業が展開できた。また、春学期で一度オンライン授業を経験した学生が多かったため、Blackboard を活用した課題の提出やクイズの受験など、問題なく実施できた。しかし一方で、オンラインならではの課題も見られた。クイズやテストにおける誤った表記についてである。例えば、学生が（「あらって」と書くべきところを）「あらて」と書いたり、（「かいた」と書くべきところを）「かいった」と書いたりした場合、タイピングの不慣れによる誤りなのか、て形やた形に対する理解不足による誤用なのかを判断するのが難しいことが時々あった。このような表記の誤りは

手書きにおいても見られるものではあるが、「打つ」ための学習が J1 の学生に求められている現状に基づいて、指導方法の再考を行う必要があると感じた。また、一部の J1 の学生にとって日本語の文字を覚え、活用し、さらに打たなければならないというのは心的負荷が強かったようである。J1 の学生を対象にオンライン授業を実施する場合は、文法項目に対する理解だけでなく、学生が日本語を「打つ」ことに慣れているか否かについても丁寧に確認をし、適切に対応していく必要があると改めて感じた。

文法 2：学期当初より活気があり、学習意欲の高いクラスであった。また、自分のことや生活を進んで話す学生が多く、学生と教員のやりとりのみならず、学生がお互いに質問をしたり意見を出し合ったりするなど、学生間の活発なやりとりが見られた。授業では、週の前半で学んだ文法や語彙の理解度及び運用力を確認しながら進め、学生からの質問に応じて、理解度が低い文法項目を中心に練習や活動を行った。学生の中には、学習意欲は高いものの、他の学生の日本語力についていけないことを悩んでいる学生もあり、授業時間中あるいはメールなどの個別対応で励ましを行った。オンラインでは、このように日本語学習に悩みをもつ学生に対して十分にケアができていくか把握しにくく、どのような時期に、どのようにケアをすればよいのかが今後の課題である。

聴解会話：学生は皆明るく非常に勉強熱心で、毎回文法の復習からはじめ、会話、聴解と言う順で授業がスムーズに行えた。会話では、まずは習った文法を意識して使うことを心がけて、できるだけ学生の日常に関連している事柄を話すよう促した。聴解でも、習った文法を中心に一言一句注意深く聞き取れるように練習した。また、聞き取れなかったものに関してはわかるまで聞けるように丁寧に繰り返して確認した。今後の課題としては、今学期は文法に忠実になりすぎたため、日本人の日常会話における言いさしなどに触れる時間がなかったため、その点をもう少し聴解会話の授業で取り入れていきたい。

読解・作文：読解では、お互いに理解確認をするピア・リーディングを取り入れるなどをして進めていったが、よく話し合いながら内容を吟味することができていたように感じる。また、作文では学んだ文法を積極的に取り入れようとする姿勢が見られ、学習項目の定着化を促すことができていたのではないかと感じる。今後の課題としては、オンラインにおけるきめ細かい理解チェックやフィードバックなどだと思う。同じ空間におらず、見えない部分もあるため、提出物や発言などに対して漏れなく対応することが重要だと感じた。

総合スキル：このクラスでは文法項目を使用する総合的なタスクを中心に、スピーチや日本人学生との会話練習やインタビュー調査も行った。また、文法の導入と練習も行うこともあった。このクラスは学生同士の仲がよく、毎回楽しく熱心に活動していた。しかし、学期開始当初は、苦手意識があり、自信が持てない学生がいた。ミスを恐れて

積極的になれずにいたので、まずはリラックスした楽しい雰囲気作りを徹底した。授業前半で気軽なおしゃべりの時間を長めにとることにより学生同士の距離が縮まり、その学生の発言が多くなった。また、話したいことを日本語で伝える練習になり、限られた語彙と文型でもどうにか伝えようとするようになった。その他の活動でも常に積極的な姿勢は続き、複数の日本人相手でも日本語で話そうと頑張る姿勢が見られた。他の学生も話せることが増え、最終的に J1 レベルの日本語で多くのことができるようになったと思う。課題は文法の正確性だ。これは次のレベルの課題としたい。

2020 年度 J1S 授業記録

コース概要

J1S は、日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない、あるいは文法項目が既習であっても、運用能力が不足していると思われる学生を対象とした、初級のコースである。週 3 日という少ない授業時間の中で、既習の文法項目も含め、運用能力を高めることを目的としており、週 5 日の J1 コースよりも、ややレベル的に上の学生を対象としている。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：＜春学期＞高嶋幸太、森井あずさ、藤田恵 ＜秋学期＞開講せず

授業コマ数：週 3 コマ（文法、読解・作文）

履修者数：春学期 2 名、秋学期 開講せず

使用教材：独自教材

目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるよう、運用能力を高めることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ表記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習し、4 技能を総合的に伸ばすことを目標とした。

文型リスト

J1S で扱った文法項目は J1 と同様であるので、省略する。

授業の方法

＜春学期＞

2020 年度春学期の J1S は、全てオンラインで行い、週 3 コマを 12 週、計 36 コマで行った。各課を 3 コマで学習するというペースで進め、文法を 2 コマ、読解と作文を隔週で 1 コマずつとした。また、一部の課では、読解と作文を 1 コマで行った。

文法、聴解・会話：文法と語彙のテキストに沿いながら、既習項目の確認とパターンプラクティスを行った。さらに、習った文型について、聴解、会話、短作文等の運用練習を行った。その際、文型の単独での使用だけでなく、複数の文型を組み合わせた練習にも重点を置いた。

読解・作文：隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って 400~600 字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

<春学期>

春学期の J1S は、特外生 2 名のクラスであった。2 名とも日本語の学習意欲が高く、積極的にクラス活動に取り組んだ。出席率、宿題の提出率に問題がなく、非常にスムーズにクラス運営をすることができた。文法クラスでは、各課の新規項目を中心に練習し、会話と聴解の練習も取り入れるようにした。作文クラスでは、モデル文を読み、それを参考にして、各課のトピックに合った作文が書けるようにした。読解クラスでは、短文と長文を扱い、内容理解の問題に取り組んだ。その結果、いずれの科目も J1S が掲げる目標を達成することができ、運用力も身についた。オンライン授業では、教師側から見ると、授業時間内に自主的に問題に取り組むような時間を取り入れたほうが、学生の負担が少ないように感じる場面があり、今学期も実際に取り入れることがあった。また、対面授業のように教室の中で学生同士が教え合って解決するという機会を作ることが難しかったため、質問がしやすい雰囲気となるように心がけた。オンライン授業においても、クラスメートとの交流や教え合いを活発に行えるように、次学期は工夫して進めていきたい。

2020 年度 J2 授業記録

コース概要

J2 は、非常に基本的な日本語（動詞や形容詞の基本活用、語彙 500）を身につけているものを対象とする。週 5 日、毎日スキル別（文法 1、文法 2、聴解会話、読解作文、総合スキル）に授業が展開されているが、基本的には文法 1 で習う文法項目、語彙、表現を軸に他のスキルは展開されている。

担当者名：<春学期> 富倉教子（文法 1）、三浦綾乃（文法 2）、森井あずさ（聴解会話）、
数野恵理（読解作文）、神元愛美子（総合スキル）
<秋学期> 藤田恵（文法 1）、山内薫（文法 2）、森井あずさ（聴解会話）、
神元愛美子（読解作文）、神元愛美子（総合スキル）

授業コマ数：週 5 コマ（文法 1、文法 2、聴解会話、読解作文、総合スキル）

履修者数：春学期 5 名、秋学期 3 名

使用教材：独自教材

目標

接続詞や接続助詞を用いた複文の作成を含む、J1 よりやや進んだ日本語能力を身につけ、日常生活に必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようにすることである。語彙数については 1000 を目標に増やす。

文法 1：さまざまな接続詞や接続助詞、文末表現、時間の表現などを理解し、それらを日常生活の中で使えるようになることが目標である。初級文法の理解と口頭練習を行うことにより、アカデミック場面、日常生活場面で簡単な日本語によるコミュニケーションができるようになることを目指す。

文法 2：さまざまな接続詞や接続助詞、文末表現、時間の表現などを理解し、それらを組み合わせる基本的な複文が正確に作れるようになることを目標とする。初級文法を使った短い文を作成することで、語彙の活用、接続、助詞等の定着を目指す。

聴解会話：文法 1 で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになることが目標である。日本語を数多く聞いたり、話したりすることにより、アカデミック場面、日常生活場面での簡単なコミュニケーションができるようになることを目指す。

読解作文：文法 2 で習った文型や語彙を使って、簡単な作文が書けるようになること、及び、簡単な日本語の文章が読めるようになることを目標とする。

総合スキル：文法 2 で習った文型や語彙を正確に運用できるようになることと、未習の語彙や文型があっても対応が出来るスキルを身につけることを目標とする。また、実際のコミュニケーション場面で必要とされる瞬発力を身につけ、コミュニケーション能力を高めることを目指す。

文型リスト

J2 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	1. Review (J1 sentence patterns) 2. Speaker's Volition: I think I will ～ Volitional form と思う 3. Speaker's Intention : I intend to ～ ～つもりだ 4. ～んです② 5. Mimetic words ⑤ Laughing、Crying、Anger
2	1. Can; indicating one's ability ～ことができる・可能形 2. Verb/Adjective すぎる : Overdo～/Too～

	3. て form for indicating reason why one cannot do V 理由の「～て」 4. Anything、 Anyone、 Anytime、 Anywhere、 Any Noun 何でも・誰でも・いつでも・どこでも・どんな N 5. Particle で: indicating required cost、 required time 値段・時間内の「で」 6. のに: Although、 Even though *Review のに、が／けど、ても 7. Mimetic words ⑥ Feelings
3	1. V-方 How to V 2. V ながら V : Doing two things simultaneously 3. Have something with/on、 possession、 own ～がある 4. Obligation: Must / Have to ～なくてはいけない／なくてはならない 5. Concession: Not have to / It is all right if it's not ～ ～なくともいい 6. By (time) : までに / Until (time) まで 7. Mimetic words ⑦ Weather
4	1. When～: ～とき～ 2. Noun が要る・役に立つ 3. Comparative constructions 比較 AはBより・Aのほうが・Aほど・～のなかで一番 4. Adverbs often used in a daily conversation せっかく ちゃんと 一応
5	1. Try doing something and see: ～てみる 2. Giving and Receiving Something さしあげる・いただく・くださる 3. Noun modifiers 名詞修飾 4. Mimetic words ⑧ Nature
6	1. Intransitive Verbs and Transitive Verbs 自動詞・他動詞 2. V て ある 3. Intransitive V ている vs Transitive V である 4. Mimetic words⑨ : Sleeping 5. Compound Verbs ① Vはじめる・Vおわる・Vやむ・Vつづける
7	1. V て おく 2. ～が V みえる・きこえる・する 3. Giving and Receiving (favors、 some acts) ～てあげる・もらう・くれる 4. Want someone to do some action: V てほしい・もらいたい・いただきたい 5. ～が・けど (けれども) 6. Imitative words : Caught a Cold ?
8	1. あいだ VS あいだに 2. Purpose in coming and going ～に行く・来る・帰る

	3. い-adjectives derived from verbs Vにくい／Vやすい 4. Expressing Purpose: ために・ように 5. Review: Various expressions for purpose 6. Compound Verbs ② Vあう・Vかける
9	1. 伝聞 Hearsay、Conveying information getting from another person、media ～そうだ・ということだ・とのことだ 2. Vてしまう 3. Review: Vている、Vである、Vてみる、Vおく、Vてしまう 4. [Question words] か / ～かどうか 5. V1 ないで V2 without doing V1、do V2 6. Imitative words : Hitting、 Breaking 7. Compound Verbs ③ Vなおよす・Vかえす
10	1. 推量の表現 ① Expressing Speaker's Guess、 Conjecture ① そうだ 2. Decisions: ～ことにする・～ことになる 3. Rules: ～ことにしている / Customs: ～ことになっている 4. 比喩の表現 Expressing Resemblance、 Figurative expressions ～よう だ・ みただ 5. V-て いく・くる do V and come/go 6. Imitative words : Animals、 Birds

授業の方法

読解作文（月）、文法 1（火）、聴解会話（水）、文法 2（木）、総合タスク（金）の順番に授業が行われた。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法 1：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした口頭練習を行った。毎回授業のはじめに、新出語彙を暗記しているかどうかを確認する「語彙クイズ I」を行った。また、新出語彙の理解度を確認するために「語彙シート I」を宿題にした。

文法 2：文法のテキストに沿いながら、短作文を書く練習を行った。毎回授業のはじめに、新出語彙を正しく活用、運用できるかどうかを確認する「語彙クイズ 2」を行った。また、新出文法の理解度を確認するために「文法シート」を宿題にした。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目を、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。また、毎回、各課の代表的な文型を使った文章のディクテーションを実施した。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。また、新出語彙の運用の正確さを確認するた

めに「語彙シートⅡ」を宿題にした。

読解作文：読解では、様々なジャンルの文章を読んでから、そのトピックについて簡単なディスカッションを行った。さらに、授業で扱ったものとは違うジャンルの読み物を宿題にした。作文では、文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、600～800 字程度の作文を書く練習を行った。また、隔週で漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：既習文法、語彙を使って四技能を総合的に使用するタスク、ロール・プレイ、スピーチ等を行った。また、日本人学生にボランティアとして参加してもらい復習と応用練習を行った。毎回授業のはじめには、新出文法を理解しているかどうかを確認する「文法クイズ」を行った。

結果と課題

＜春学期＞

文法 1：今回オンライン授業という、通常とは違った環境、状況であったにもかかわらず、学生が積極的に授業に参加し、学ぶその熱意を学期の最初から最後まで感じられた。学生の関心がツール如何にかかわらず、日本語を学ぶということに集中していたように感じられる。日本語の内容的にも、大半の学生は理解が早く、また新しい情報を応用していくその力を感じられた。

課題としては、決まった時間内に、決まった内容・数の文法を導入していくという限定はあるが、学生の能力をより多く引き出せるような内容のものを提示していけたらと考えている。例えば今回のようなクラスであれば、もう少し学生主体に展開する授業展開であっても良かったように思われる。一方少人数の中に様々な個性の学生が集まるので、全体の調和も考慮しながら、それぞれが納得いくような授業展開を、またオンラインであればそれに合わせて考えていきたい。

文法 2：全体的に出席率がよく、意欲的に日本語を学習している学生が多かった。今学期はクラス内で宿題の答え合わせを行った。宿題をする上で分からなかった文法や言葉についての質問が学生から多く出たため、課全体の文法や語彙を復習するいい時間になったと思う。書く練習は、今学期はオンラインテストの練習もかねて手書きではなくタイピングで練習を行った。初めはワークシートを配布し、書いて提出してもらっていたが、学生がどこでつまづいているのか分かりにくく、またフィードバックに時間がかかったため、学期の途中からは Zoom のチャットに自分が書いた文を投稿してもらい、それを教師が PPT のスライドに貼り付けて全体に共有してフィードバックを行った。フィードバックする際に学生同士の交流が持てたことはよかったが、タイピングのスピードにはかなり個人差があったため、時間のコントロールが難しかった。また、つまづいている学生への個別のフォローをどのように行っていくのか、今後さらに考えていく必要があると思う。

聴解会話：初めてのオンライン授業ということで、なかなか思い通りの授業ができなかった

が、教師も学生も少しずつ慣れてきて、最後の方では対面の時とあまり変わらない授業ができたかと思う。Zoom の「ブレイクアウトルーム」機能を使って、2-3 人で会話の時間を持てたことがとてもよかったと思う。ディクテーションなどもチャット機能を使ってタイピングで答えを書いてもらったので、タイピングの技能も向上するいい機会になった。聴解も無料開放している教材を使って有意義な練習ができたと思う。学期が進むにしたがって、疲れが出てきたのか、指名された時、学生同士で会話をする時以外は画面と音声をオフにしてしまう学生が多くなった。やはりクラスの間はある程度画面をオンにして参加できたらよかったと思う。

読解作文：今学期はオンライン授業となったが、Zoom で通常学期とほぼ同様の活動を行うことができた。読解はマイクをオンにして順番に声に出しながら読み、内容を確認した。作文は、モデル文を確認した後で、ブレイクアウトルームで2-3 人グループで準備の活動(Q&A)をしてから書き始めた。今回普段と違ったのは、通常学期は原稿用紙に手書きで書くのではなく、タイプして Blackboard に提出したという点である。1 回目は手書きの学生もいたが、2 回目の作文からは全員タイプして提出した。フィードバックも通常のように行い、作文の書き直しもさせることができた。意欲的な学生が多く、習った文型を積極的に使って作文を書こうとする姿勢が見られた。オンライン授業でない対面授業に戻った場合にも、今回のようにタイピングを取り入れるかどうかは検討していきたい。

総合スキル：このクラスは日本語の運用能力の向上を目標とし、既習項目を使用した4 技能を使用したタスク、ロール・プレイ、スピーチ、日本人学生と実際に話す活動、日本人学生へのアンケート活動を実施した。学生たちは熱心に楽しみながら活動に参加していた。特に日本人学生との交流は好評で、学生たちがチャレンジする姿が見られた。J1 では日本人学生が言っていることを理解できず、伝えることも限られていたが、J2 では会話が続くようになり、話せることも増え、学生自身も自分の成長を実感できていた。

今学期は初のオンライン授業だったので授業運営についての課題が残った。オンラインでは学生同士の交流が限られ、教室で活動した総合スキルよりインタラクションが減ってしまった。タスクもオフライン（例えばホテルのフロント）での会話や活動を前提としたものが多かったので、オンラインクラスではオンラインを前提とした会話や活動も取り入れていきたい。

<秋学期>

文法 1：秋学期の J2 クラスは3 名であった。少人数ではあったが、継続生、新規生の両方がいたため、まずは同じスタートがきれるように、J1 項目の復習の時間を学期の初めに長めにとるようにした。その結果、動詞、形容詞の語形等がしっかり身についた状態で、J2 項目を学ぶことができ、文法導入の時間は J2 項目のみに焦点を当て、時間をかけることができた。また、文法 1 の時間に文法項目の導入を時間どおりに終

えることができたため、他の曜日ではそれぞれのスキルを使った応用練習ができ、学生の理解も深まったものと思われる。一方で、一部ではあるが欠席が続いてしまった学生がいたため、文法導入の時間を受けないまま、他のスキルの応用練習に入ってしまうことがあった。このような学生は当該課の理解が進まず、他の学生から後れをとることがあった。引き続き、履修学生には欠席が続かないように指導し、また、後れをとるような学生がいた場合のフォローの方法も検討していきたい。

文法 2：全体的に授業活動に積極的に、また落ち着いて取り組むことができるクラスであった。人数が少ないことから全体的に発話量が増え、練習時間を十分に確保することができた。授業では、週の前半で学んだ文法や語彙の理解度及び運用力を確認しながら進めた。学生からは質問が活発に出て、理解ができていない個所に応じて、練習や活動を行った。また短文作成の際には、各学生が自分の生活や関心に引き付け、オリジナリティの高いユニークな文を作成することができていた。欠席が続いた学生もいたが、出席時には積極的に発言し、熱心に学習に取り組む姿がみられた。一方で、宿題の提出においては、幾度も声掛けしたものの、学期末まで提出率が低い状態が続いた。オンライン授業において、どのように授業の出席や宿題の提出といった学習に関わる動機づけを促せるのかが今後の課題である。

聴解会話：3人のクラスだったが、全員かなりモチベーションが高く、大変やりやすいクラスだった。文法理解なども比較的良好、その上で習った文型などを使って会話の練習をしたので効率的な練習ができたように思う。会話に比べると聴解が少し難しいようだった。オンライン授業で、他の学生や日本人学生とのやり取りなども制限される状況であったので、自然なスピードの会話を聞く機会が例年に比べて少なかったのではないと思う。聴解もだんだん慣れてきて、わからないときも再度聞くとわかるようになっていった。今後とも、習ったことを忘れずに、日本語を使ってほしいと思う。

読解作文：読解では、早い段階から初見の教材の内容を理解することができていた。そのため、学生からの質問に時間をかけ、疑問を解決することができた。質問は構造を抑えきれなかった長い文章や語彙や漢字ついてのものが多かった。学生のモチベーションが高く、宿題の他に自習用課題を出すこともあった。読解は一学期を通して力がつけられたように思う。

作文では、モデル文を読み、構成を確認し、前半を書くところまでクラスで行った。作文を仕上げるのが宿題で、学生が宿題を提出しない場合、教師が確認することなく終わってしまった。単純な句読点のミスや口語の使用が最後まで直らなかった学生もおり、残念である。その一方で毎回宿題をきちんと提出した学生は力をつけた。ただ、構成と接続詞等、一つのことを意識すると学習した文型を使用することに意識が向かなくなる場合もあったので注意したい。

総合スキル：春学期と同様に学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロール・プレイ、スピーチ等を行った。また、日本人学生に参加してもらいスピーチと会話練習も行った。他に文法の導入練習を扱うこともあった。

モチベーションの高い学生たちで大変熱心に活動に取り組んでいた。様々な活動を通して、ピアから学べていたことも大変よかった。活動でなにか作成するときはオンライン上の共有ファイルでシェアしていたので、対面授業より他者が作成したものにも目を通す機会が多かった。また、授業が進むにつれ、お互いにコメントすることが多くなった。授業後半で実施した日本人学生とのセッションでは自然に会話を続けることができ、成長を見ることができた。

課題は授業中の「ゆとり」である。春学期の反省にインタラクションの減少があり、秋学期は少人数で学生のレベルも高かったので常に考え、活動することを求めた。これをよしとする学生がいる一方で、一人で考え消化する時間を欲する学生もいた。少人数オンラインクラス特有の問題も考慮していきたい。

2020 年度 J2S 授業記録

コースの概要

J2S は、J2 と同様に初級半ばの学生を対象としたコースである。但し、J2 が週 5 日で行う内容を週 3 日で進めるクラスのため、J2 よりは若干日本語能力が上のレベルの学生を対象としている。J2 のようにスキル別に授業が展開されるのではなく、文法項目を導入した日に口頭練習、短文作成、聴解会話といった四技能の練習もしていく。

担当者名：＜春学期＞開めぐみ、布村猛、藤田恵 ＜秋学期＞開講せず

授業コマ数：週 3 コマ（文法、聴解会話、読解作文）

履修者数：春学期 5 名、秋学期 開講せず

使用教材：独自教材

目標

接続語や接続助詞を用いた複文の作成を含む J1 よりやや進んだ日本語能力を身につけ、日常生活に必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようにすること、語彙数を 1000 に増やすことを目指す。また、J2 で習う文法項目を理解すると同時に、実際のコミュニケーション場面を意識し、運用能力の向上をはかることも目指す。

授業の方法

＜春学期＞

2020 年度の春学期は、全てオンラインで行い、3 コマ×12 週、計 36 コマで行った。語彙リストの語彙やテキストの文法の予習を前提とし、授業では、それらを日常生活で使える

ようにするための練習を行った。具体的には、文法テキストの各課を 2 回のクラスで学習するペースで進めた。まず、1 回目のクラスでは、パターンプラクティスを中心とした口頭練習を行い、2 回目には聴解練習、会話練習、短文作成などを行った。読解と作文は、隔週で行い、毎週、読解または作文を一課ずつ進めた。また、適宜、授業では扱わなかったジャンルの読み物を宿題とした。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

＜春学期＞

春学期の J2S は、特外生 5 名のクラスで、全員先学期から本学で日本語を学ぶ継続の学生であった。春学期は、オンライン授業となり、教師側も初めて経験することが多かったが、クラス運営はスムーズに行うことができた。特に、オンライン授業に伴い導入した Blackboard でのクイズとテストは、授業時間の確保と採点の効率の点からもよかったと思う。クラスでは、一部の学生を除き、基礎的な文法と語彙が理解できておらず、授業の中では基本的な練習を繰り返す必要があり、応用練習を取り入れる時間が十分に取れなかった。また、S クラスは、学習進度が速いことから、自律学習が強く求められるが、学生にその重要さが伝わらず、予復習が不十分なまま授業に来る学生が多かった。そのため、学習項目が定着しないまま、次の課に進んでしまうこともあった。今学期は、学生にとって理想的な学習環境とは言い難く、このような中でもクラス全員が最後まで授業に出席し、活動に参加したことは評価できる。一方で、S クラスの進度についていくには、自律学習が必須であるため、このような環境の中でも学生が予復習をきちんと進められるように指導の方法を考えていきたい。

2020 年度 J3 授業記録

コース概要

J3 は日本語の基礎を習得している者（1,00 語程度の語彙及び初級前半の文法等）、日常生活の基本的活動（買い物や依頼など）が日本語でできる者を対象とした初級後半のコースである。週 5 日授業が展開され、スキル別（文法、聴解会話、読解、作文、総合スキル）に学習を行う。

担当者名：＜春学期＞任ジェヒ（文法）、東平福美（聴解会話）、沢野美由紀（読解）、
長谷川孝子（作文）、長谷川孝子（総合スキル）
＜秋学期＞任ジェヒ（文法）、東平福美（聴解会話）、長谷川孝子（読解）、
任ジェヒ（作文）、高嶋幸太（総合スキル）

授業コマ数：週 5 コマ（文法、聴解会話、読解、作文、総合スキル）

履修者数：春学期 2 名、秋学期 2 名

使用教材：独自教材

目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになること。

聴解会話：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解：未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙や文型の知識を応用して文章の内容を理解する力を身につけること。

作文：文法で学習した文型や語彙を使って簡単な作文が書けるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

文型リスト

J3 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	Sentence patterns you should know for this level
2	1. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、 Conjecture ② ようだ・みたいだ 2. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、 Conjecture ③ らしい 3. Time Expression ところ 4. Time Expression ばかり 5. ～がえり 6. Review : Time Expressions 7. そうだ、ようだ、みたいだ expressions often used in a daily conversation
3	1. 条件 Conditional ③ ば 2. ～ずつ 3. V-ていく／くる Change 4. Change of one's behavior 5. Change of one's ability 6. Review : Expressions for talking about some change 7. Adverbs indicating various changes 8. Adverbs often used in daily conversations ③ やっぱり・実は
4	1. 条件 Conditional ④ なら 2. V-ようと思う／V-ようにする 3. V-ようにしたができなかった、V-ようにしてもできない 4. Fraction 三十分の一、五十分の一

	5. Review : 条件 Conditional
5	1. 推量の表現 Expressing Speaker's Guesses、 Conjecture ④ はずだ 2. Review : Various expression for Speaker's Guess、 Conjecture 3. ～の多く 4. ～以外、以内、以上、以下 5. Compound Particles ① ～について、～にもとづいて 6. Adverbs often used in daily conversation ④ 確か・とくに
6	1. 受身 Passive Verbs 2. Direct Passive Sentences 直接受身 3. Indirect Passive Sentences 間接受身 4. 受身形 (Passive Sentences) and てもらう Sentence 5. Compound Particle ② ～によって 6. Sentence ending particles 終助詞
7	1. Giving an Instruction ～なさい・ないでください・てはいけない 2. Imperative form Command、 Prohibition 命令形、命令、禁止 3. Indirect Imperative : ～ように 言う／伝える／頼む 4. Review : Expression for Cause、 Reason 5. Compound Particle ③ ～のかわりに、～にくらべて
8	1. 使役 : Causative Sentences 2. Causative Verbs VS V-てもらう／くれる 3. ～のは～です (emphasizing)
9	1. 使役受身 Causative Passive Sentences 2. Causative V-てもらう／くれる／あげる 3. 使役受身 VS 使役-て もらう／くれる／あげる 4. ～ことに one's feeling、 emotion 5. Noun のこと VS Noun
10	1. Review : 受身、使役、使役受身、V-てもらう／くれる／あげる 使役-てもらう／くれる／あげる 2. Introduction to 敬語 (Honorific、 humble expressions)

授業の方法

J3 は週 5 日のコースであり、文法、聴解会話、読解、作文、総合スキルの順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法 : 文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

読解：様々な長さやジャンルの文章を読み、自分の意見を述べ合う練習を行った。

作文：文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、800～1200 字程度の作文を書く練習を行った。また、隔週で漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロール・プレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

結果と課題

＜春学期＞

文法：春学期の J3 クラスは、2 名と少人数であった。2 名とも新しい学習項目を一つひとつ確実に理解し、整理しようとする意欲が高い学生だったため、学生と教師間のやり取りを重視し、Zoom のホワイトボードやチャット機能を積極的に活用した。教師も学生も口頭だけでなく、チャット機能を用いてやり取りを行うことで、動詞の活用や漢字などを目で確かめることができ、誤用があった場合はその原因を一緒に考えたりすることができた。しかし一方で、オンライン授業ならではの課題も見られた。今学期は紙媒体のテキストや宿題などを全て PDF 化にし、期限付きで Blackboard を介して配布していた。しかし、J3 は週 5 回で授業が行われ、各クラスで行われるクイズや宿題の種類が異なる。オンライン授業を始めて経験する学生にとっては、大量のファイルを管理したり、クイズが実施される Blackboard の場所を覚えたりすることが難しかったようである。ファイル管理などによって日本語の学習に支障が生じないように、より効率的な配布方法について更に検討を行っていく必要がある。これを次学期の課題としたい。

聴解会話：今学期は少人数でかつオンライン授業だったので、教室内での無駄話などがなくなり、教科書の文法項目に従って比較的テンポ良くかつ一つ一つ丁寧に教えることができたと感じていた。また、真面目な学生たちで、毎回の宿題も一度も忘れることなく、語彙クイズもきちんと受験し、授業にもほぼ全て参加していた。しかし、蓋を開けると聴解の期末試験の結果はあまり良い結果ではなかった。その要因の一つとして今学期扱った聴解教材が挙げられる。通常の対面授業では主に『みんなの日本語』を使用していたが、今学期は一部オンラインで無償配布していた『初級日本語 げんき 2【第 2 版】』と『まるごと 日本のことばと文化』を主に使用した。その結果、カジュアルな会話を聞く分量が増えてしまったように思う。また、オンラインでの会話指導では、教師自身も通常の会話よりも常にゆっくりはっきりと話すことを意識してしまい、学生が聞き取りやすい日本語を話してしまっていた。授業内での無駄話が減ってしまったことも自由な発話の機会が減ったという点は否めない。よって、今後の課

題としては、聴解教材をカジュアルな会話ではなくできるだけ JLPT の聴解の試験内容に近づけること、そして、もっと自由な会話を活発にさせる活動を取り入れる必要があると考える。

読解：2 名ともまじめで学習意欲がある学生で、読解の宿題もほぼ事前に提出されていた。授業では、質問を確認した後、時間を決めて文を読んでもらう形で進めた。オンライン授業のため、画面上で資料や教材の細かい点を指し示したり、書いて説明したりできたのは良かったが、積極的に質問をするタイプの学生でもなかったのも、こちらの説明がどこまで理解できていたのか、わからないことも度々あった。宿題などを見ると、文の大意は 2 人ともつかめていたと思われるが、答えが適切に抜き出せず、質問文に合わせた答えの文を作ることが難しいようであった。そのため、口頭で答えるだけでなく、まず書いてから答えるように指示し、間違っている場合は、似たような質問文とその答えのバリエーションを示すようにした。回を重ねるごとに読む力がついていき、答え方も意識するようになったが、文末を変えて答えることはできても、語順を入れ替えた答えの文が作れるレベルになるには、もう少し時間がかかると思われる。読解は各自のストラテジーにより読み方が変わるため、今後はその点を意識して授業を行いたい。

作文：前半の授業では、作文例を参考に構成や接続詞に注目しながら作文を書くことができた。受身、使役、使役受身、授受表現が集中している後半の授業では、学生が混乱していることが多かったが、1 つずつ確実に理解しようとする意欲が高かった。何度か練習を繰り返すうちに、受身、使役、使役受身、授受表現を使いながら自分のテーマで作文を書くことができるようになった。この授業で勉強した構成や文型を正確に理解していることが分かる内容であった。限られた時間内ですべてを教えることは難しい。各学習者にとって何が一番必要なのか、今後も考えながら授業に臨みたい。

総合スキル：元々日本語の基礎がしっかりしている学習者であった。新規項目も着実に理解し、使おうとする意欲が高かった。日本人学生との会話やスピーチなどにも積極的に取り組み、楽しみながら日本語力を上げることができたと思う。授業では、会話で使われる表現や日本語特有の会話の流れなどを繰り返し練習することで、日本語での会話が上達していく様子が見られた。一週間の目標である文型や語彙が非常に多く、学習者が学習内容を消化しきれていない様子も見られたが、何度も繰り返した内容は定着していった。今後も、日本語を実際に使うことを目標に、学習者に合った練習を取り入れていきたい。

<秋学期>

文法：今学期の学生は、日本語に対する興味が非常に高い大学院生 2 名であった。そのため、新しい文法項目に対する質問や学生間のインターアクションが活発に行われ、常に明るい雰囲気の中で授業を進めることができた。学習項目を用いた例文作成や練

習問題の実施は、前学期と同様に、口頭だけでなく、Zoom のホワイトボード及びチャット機能を用いて行った。その結果、動詞や形容詞の活用などにおける誤用を目で確かめたり、類似表現を一緒に考えたりすることができた。また、今学期は前学期の課題を受け、教材や課題の PDF ファイルのより効率的な管理のため、J3 全科目の資料を文法クラスの Blackboard から配信した。その結果、前学期よりファイルの間違いによる課題の未提出やクイズの未実施の回数が減った。このように春学期の反省点を踏まえ、工夫した結果、秋学期はより効率的にオンライン授業を展開することができたと思われる。ただし、課題も残っている。それは、受身、使役、受身使役、敬語を扱う後半において十分な練習を行うことができなかったことである。学生とのインターアクションを重視したあまりに、新しい学習項目の解説に重きを置く場合もあった。今後は、学生と教師、また学生間のインターアクションを重視しつつも、学生の理解・産出を促す練習問題を十分かつ適切なタイミングで行うことができるよう、授業デザインを見直す必要がある。

聴解会話：今学期の学生は日本語で話すことが好きで、物怖じせずに積極的に話す姿勢は大変良かった。ただし、日本のアニメやドラマで使われる日本語をそのままクラス内で使用するため、カジュアルな表現が多く、文法などの正確さも欠けており、その訂正に時間を要した。習った品詞やそれらの活用を一度総復習する時間が必要だと感じた。また、聴解では、語彙の知識が豊富なので、聞き取れた主要な単語と想像力で答えを選ぶところがあり、ひっかけ問題などを苦手としていた。よって、先学期とは異なって、色々な教材の様々な会話のスタイルを聞き取らせるように工夫した。しかし、今学期は少人数のオンライン授業で、対面授業よりも一人一人の発音や言葉の正確さを注視した会話に時間を割いてしまい、あまり聴解の時間を取れなかったことは反省点である。今後はもう少し授業の時間配分を改善していきたい。

読解：今期の学習者は漢字や語彙の知識が十分だったこともあり、文章を理解するスピードが速く、問題なく読解練習を進めることができた。読解内容に関するディスカッションも楽しみながら行う余裕があった。しかし、細部の正確な読み取り、正確な日本語で答えることに問題があったため、授業で繰り返し練習を続けた。その結果、まだ課題は残るものの、学期初めと比べると、正確に文章を読み取り答えられるようになった。今後も、各学習者やそのクラスに合った指導法を考えながら、授業を進めていきたい。

作文：今学期は、オンライン授業の利点を活かした作文授業の展開を目標とした。そのため、例文と関連している画像や動画を画面共有で紹介するなど様々なコンテンツを活用した作文授業を展開した。その結果、学生からの話題提供の頻度が増え、テキスト指定のトピック以外の関連トピックについても議論をしたり、文を書いたり、文章の構成を考えたりすることができた。学生の作文課題においても、授業内で行った議論をより展開させた主張や更なる話題提供など、様々な試みがみられた。さらに、今学期

の受講生は、漢字や語彙に対する知識が非常に豊かであったため、類似表現やニュアンスの違いにまで目を向けることができた。このように、表現、構成、話題などにおいてはバリエーションがあり、興味深い作文が多くみられたが、正確さに欠けるという問題があった。動詞、形容詞などの活用において、第1週目から同じ間違いを何回も繰り返すことが多々あった。重複する誤用に対しては、学生にリストを作成させ、授業開始前に一緒に確認することで改善をはかった。て形など一部の誤用においては改善がみられたものの、効果のない項目もあった。今学期を通して、内容面と言語形式面を総合的に指導する重要性、そして作文にみられる誤用分析に基づいたより効果的な指導方法を考える必要性を感じた。この2点を今後の課題としたい。

総合スキル：ロール・プレイ、ディスカッション、インタビュー、スピーチなどのさまざまな活動を通じて練習したのだが、積極的に学んだ項目を使って言語運用しようとする姿勢が見られた。また、学生ボランティアにも来てもらい、インタラクションをしたのだが、学生同士で活発にコミュニケーションを行うことができていた。今後の課題としては、正確さの強化だと思う。習ったことを使おうと思っても、間違えることが多々あった。その際、教師による修正フィードバックをどのタイミングで、どの程度提供するかが大変重要になってくると感じた。

2020 年度 J3S 授業記録

コースの概要

J3S は、日本語の基礎を習得し、1000 語程度の語彙力を持ち、初級文型が既習であるが、それらの運用能力が不足していると思われる学生を対象としている。週3日の授業の中で、既習の文法項目を確認し、その運用練習を行い、中級へとつなげていくためのコースである。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：＜春学期＞高嶋幸太、三浦綾乃、浅野有里 ＜秋学期＞開講せず

授業コマ数：週3コマ（文法、運用練習、読解・作文）

履修者数：春学期 3名、秋学期 開講せず

使用教材：独自教材（J3 と同じもの）

目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになること。

運用練習：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解・作文：読解では、未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙や文型の知識を応用して文章の内容を理解する力を身に着けること。作文では、文法で学習した文型や語彙を使って、きちんとした構成で作文が書けるようになること。

文型リスト

J3S で扱った文法項目は J3 と同様であるため、省略する。

授業の方法

2020 年春学期は、12 週間、週 3 日で実施した。月曜日は文法導入、水曜日は聴解を含む運用練習、金曜日は読解と作文のように行った。従来、教室で紙で実施していたクイズをすべて Blackboard で 10 分で実施した。また、宿題は、授業内で実施状況を確認し、学生と一緒に答え合わせを行った。中間テストと期末テストは Blackboard で実施した。学習時間を確保するために、中間テストの前に Blackboard での文法と読解の復習クイズ、期末テストの前に Blackboard での文法と聴解の復習クイズを与えた。さらに、読解と作文の時間に、希望者に漢字教材と漢字クイズを与えた。

結果と課題

<春学期>

オンライン授業であったが、履修者 3 名ともに課題をきちんとやってきており、真面目に授業に参加していた。また、文法の授業では、積極的に疑問点などを尋ねてきており、意欲的な姿勢が見られた。今学期は文法の宿題の答えを授業の最初に確認したが、そこで学生が理解できていないところを確認でき、同時に学生からの質問も受け付けてフォローすることができたので、その後の応用練習がスムーズに行えたと思う。

オンライン授業で普段と違う形式だったため、気持ちとしてはすこしゆっくり目の進行で授業を行ったほうがよいと感じた。例えば、教材を読む時間をたっぷり取る、質問の時間をきちんと設けるなどである。聴解練習を意識的に行ったつもりだが、期末テストにその成果が思ったほど表れなかったのが残念だった。ある程度の長さがある会話の聴解練習をさらに意識して行うべきだと思った。

2020 年度 J4 授業記録

コースの概要

J4 は初級修了段階の学習者を対象とした、初級から中級への橋渡しを行うコースであり、文法・文型、聴解・会話、読解、作文の 4 クラスで構成されている。このコース全体の目標は、初級で学習した文型を確実に定着させることと、複数の文型を組み合わせで使用できるようになることである。さらに J4 では、語彙を増やし、流暢さを向上させることも併せて

目標としている。

各スキルの詳細は以下の通りである。

<J4 文法・文型>

担当者名：<春学期>平山紫帆 <秋学期>開講せず

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 3 名 秋学期 開講せず

使用教材：独自教材

目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

文型リスト

J4 で扱った文法項目は以下の通りである。

表 J4 文法で扱った文法項目

課	Part1	Part2
1	・受身 ・自発	・～は～つつある ・～は～（で／に）さえ～ ・Vさえすれば／Aさえあ（い）れば／Nさえ～ば～ ・～とすれば、～（こと）になる ・（たとえ／仮に／もし）～としても～
2	・使役 ・使役受身	・～にもまして～ ・（たとえ／仮に）～にしても～ ・いくら～にしても～
3	・尊敬語	・（Vた／A／Nの）まま、～ ・Vつつ～ ・～はVなり～
4	・謙譲語	・Vことにしている／Vことになっている ・～は～ことから～ ・～は～こととなると～ ・～は～ことなく～
5	・～ようにV ・～ようにする ・～ようになっている	・～して、（考えさ／思い知ら）せられた ・（無生物主語）が～を～させる ・～は～だけではなく、～の問題だ
6	・Vたばかり／Vばかり／Vてばかりいる ・Nばかり／Aばかり	・～からといって、～が必ずしも～わけではない ・～ずに～ ・～のか（どうか）については～

	・ Number ばかり	
7	・ ～が限られている／～を～に限っている ・ 限りがある／ない ・ V（ない） 限り／Nの限り ・ V（た） 限りでは／Nの限りでは	・ ～原因は～ことにある／～のは～からだ ・ ～と～では～が異なるので～ ・ ～や～は～のだから、たとえ～でも～ことはない ～や～は～のだから、もし～たら～
	・ Nに限って（はずがない） ・ Nに限り ・ V（ない）／Nに限る ・ Nに限らず	・ ～は～ので、～ても、どうしても～てしまう ～は～から、～のに、～と、どうしても～てしまう ・ （無生物主語）が～に～を生じさせる ・ ～たり～たりするだけでは～ ・ ～は～が～であることを利用して～
8	・ Vよう（か） ・ Vようと思う／Vようとする ・ Vようがない ・ Vようとしている ・ Vようとししない	・ ～時に、～と／ても～ ・ 私は～て、～ことに気が付いた ・ ～（こと）は～（のだ）から、もし～なら～
9	・ N（clause）というN ・ NというN／Number というNumber	・ ～すると、～は～が～は～ ・ ～する時に重要なことは、～か（どうか）ということ （よりは／ことではなく）、～か（どうか）という（点／こと）である ・ ～ものとして（しまう）

授業の方法

<春学期>

Zoom を使用し、双方向型のオンライン形式で授業を行った。毎週、次の週に使うテキストを1課ずつ配布し、それを授業までに読んできてもらった。

授業では、パワーポイントや教科書のPDFを使用しながら、文法・文型の説明と練習を行った。そして、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を宿題にした。宿題は添削し、個別にメールで返却した。

結果と課題

<春学期>

今学期の学生はわずか3名だったが、学習意欲が非常に高く、かつ、穏やかで明るい学生ばかりだったため、緊張感と和やかさのバランスが取れた、大変いい雰囲気での授業を進めることができた。

今学期はオンラインでの授業で、授業を行う上での制約もあったが、全員が事前にしっかりと教科書を読み、問題も解いてきていたので、理解できていることと理解できていないことが授業の際に明確で、効率的に授業が行えたと考えている。

しかし、授業の進め方については課題もある。オンライン授業の負担を考え、学生の状況や様子に応じて緩急をつけながら授業をするように心がけ、今学期は学習に貪欲な学生たちだったおかげで最後まで集中は途切れなかったが、オンライン授業でのメリハリのつけ方はさらに検討すべきであると思われる。秋学期の課題にしたい。

<J4 読解>

担当者名：<春学期> 武田聡子 <秋学期> 開講せず

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 4 名 秋学期 開講せず

使用教材：独自教材

目標

さまざまな分野の読解教材を数多く読み、徐々に長い文章にも対応できるようにしていく。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすとともに、初級文型や初級語彙が使用語彙にまで高まるような練習を行う。

授業の方法

<春学期>

オリジナル教材のプレレッスンから L11 まで、説明文、エッセイ、記事、物語、新聞の内容を毎週 1 課のペースで授業を進めた。L9 と L11 を除く課では、毎週、自習の読解の予習（ワークシート）を課し、授業では読解の音読、意味の確認、設問の答え合わせ、筆者の意図や要点について意見交換などを行った。L9 と L11 は速読を行い、授業中に配布し初見で読解を行った。前週に速読の読解内容の語彙を調べておくことが宿題になっていた。すべての課でクロスリーディング活動を実施し、語彙の確認だけではなく、主要な文型を確認し、時間に余裕があるときは、例文作成も行った。毎回授業の最初に、前週の授業で扱ったリーディングで練習した前週の語彙から 10 問、正しい語彙を選ぶという小テストを実施した。最後に、総まとめとしてすべてのユニットで学んだ語彙の復習と読解の復習をし、最終日は Blackboard を使って期末テストを実施した。

結果と課題

<春学期>

4 人の登録であったが、実際には 3 人の学生が熱心に授業に参加した。宿題や課題は欠かさず期日までに提出し、授業中も積極的に参加し、わからないところは質問し、反応がよいクラスだった。毎回実施する語彙テストは、ほぼ全員が満点を取るなど、復習もしっかり行っていたことがうかがえた。読解内容について話し合いや意見の交換も活発に行われ、非常に雰囲気の良い、いいクラスであった。全員が非漢字圏出身だったということもあり、漢字

はほぼ総ルビの教材を提供していた。J4 レベルなら知っておいてほしい漢字にはルビは付けないなど、もう少し漢字の読みには負荷があってもよかったのではないかという反省が残る。一方、漢字の読み方は気にせず、読解そのものの内容に集中して学ぶことができたともいえる。漢字の読み方のバランスと読解の理解力を促す 2 点の両立を今後の課題とした。

＜J4 作文＞

担当者名：＜春学期＞小林友美 ＜秋学期＞開講せず

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 2 名 秋学期 開講せず

使用教材：独自教材

目標

初級文型、初級語彙の定着及び応用力の育成を目的とする。具体的には、初級文型や語彙を使って正しい文章（単文だけではなく、複文も含めて）が産出できるようになることを目指すと同時に、400 字程度の短い文章が適切な構成で書けるようになることを目指す。

授業の方法

＜春学期＞

授業はテキストとワークシートを使用し、1 コマ 1 課のペースで進めた。PPT を使いながら、ターゲットとなる文法・文型の意味、用法を理解させた後、例文を各自で考えてもらい発表させた。指定の文型練習が終わった後で、各課の作文のテーマに沿って文章を書き、翌週の授業で提出させた。添削をし、コメントをつけたファイルを各自に返却し、次回の授業で、フィードバックを行った。また、授業の冒頭では前週に導入した文型で短文作成をするクイズを行った。

表 J4 作文の授業内容

pre-Lesson	初級文型確認の短文完成問題。
Lesson 1 定義	①留学 <u>とは</u> 、一定期間外国へ行き、その国の学校などで学ぶ <u>ことだ</u> 。 ②私が会社を辞めた <u>ことで</u> 、家族の生活が大きく変わってしまった。 ③留学は人々を人間的に成長 <u>させる</u> 。
Lesson 2 意見①	①最近、日本の大学生を見ていて <u>気づいたことがある</u> 。 ②日本の経済が悪くなった <u>のは</u> 、日本の政治家が無能だ <u>からだ</u> 。 ③両親の「成績が一番」という <u>考え方が</u> 、子供を非行に <u>走らせたのだろう</u> 。
Lesson 3 分類	① <u>私は</u> 、医者という職業を目指している人 <u>は</u> 、その目的の <u>点から 2 つのグループに分類されると思う</u> 。

	②この薬には麻薬のような成分が含まれている<u>ため</u>、服用すると眠くなる。 ③留学という貴重な経験を<u>その後の人生に役立てたい</u>と思う。
Lesson 4 比較・対照 ①	①日本とタイとは<u>どちらも米を食べる国だが</u>、日本とタイとでは、その食べ方や食べている種類が<u>大変に異なっている</u>。 ②日本とタイは<u>どちらも米を食べる国だ</u>。しかし、日本とタイは、その食べ方や食べている種類において<u>対照的である</u>。 ③東京の生活は<u>便利だが</u>ストレスが多い。<u>一方</u>、地方の生活は<u>東京ほど便利ではないが</u>、ストレスは少ない。
Lesson 5 根拠・判断 ①	①日本人は、間違った平等主義の<u>方向に進もうとしている</u>。 ②私は、日本の社会問題、たとえば「就労者の高齢化」や「若年労働力の不足」といった<u>経済的な問題</u>に取り組んでいる。 ③自分の能力や適性が<u>いかせるなら</u>、<u>転職してもいい</u>と思う。
Lesson 6 定義②	①運動を<u>せずに</u>、<u>食べてばかりいると</u>、太りますよ。 ②もしあなたが、自分さえよければ<u>いいと考えているとするなら</u>、それはとてもいけないことだ。 ③困っている人に手をさしのべ、弱者を苦しめている企業に立ち向かう<u>ことこそ</u>、<u>弁護士の役割である</u>。
Lesson 7 比較・対照 ②	①速さという点では、飛行機は<u>船とは比べものにならない</u>。 ②100%とは言えないまでも、現在では多くの国でクレジットカードが使えるようになっている。 ③現代人の生活にとって、クレジットカードは<u>必要不可欠なものである</u>。
Lesson 8 意見②	①その会社は給料がいい。<u>しかも</u>、残業がほとんどない。<u>そのため</u>、その会社で働きたい若者は多い。 ②私は、親が子どもをしつけるのは<u>当然だと思う</u>。 ③両親や先生とよく相談した<u>上で</u>、日本への留学を決めた。
Lesson 9 換言・例示	「つまり」「すなわち」「いわば」「いわゆる」
Lesson 10 根拠・判断 ②	①私は、安定した給料よりも、<u>むしろ自由な時間が多いほうが</u>いい。 ②<u>いつもは節約のために自炊しているが</u>、<u>時には外でおいしいものを食べることもある</u>。 ③一度約束した<u>以上</u>、守らなければならない。
Lesson 11 ことわざの説明	①そのニュースは、韓国を<u>はじめ</u>、アメリカやヨーロッパ諸国など、世界中に伝えられた。 ②お金がなくても、あなた<u>さえいれば</u>、私は幸せだ。 ③日本のことわざ

結果と課題

<春学期>

2名とも無遅刻無欠席であり、全ての課題を提出するなど、熱心に取り組む学生たちであった。少人数だったこともあり、宿題のフィードバックに十分に時間を取ることができた。前半は簡単な短作文であったが、回を重ねるごとに、難易度が高いテーマで、長文の作文を書くことができるようになった。一方、自分の意見を明確に表現するために、指定された表現の使い方を間違えることも多くなった。次回は、フィードバック時間の指導以外に、書き直しなどの活動を適宜導入したい。

授業では、積極的に質問や発言が出たため、各学生の理解度が把握でき、それに合わせて授業を進めることができた。一方向の授業にならないように、学生とのやりとりを重視し、授業展開をしたが、その反面、作文を書く時間の確保が難しい回もあった。そのため、オンライン授業でのタイムメントも今後の課題としたい。

<J4 聴解・会話>

担当者名： <春学期>浅野有里 <秋学期>開講せず

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 3名 秋学期 開講せず

使用教材：オリジナル教材

目標

日常生活における様々な場面での聴解と会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などを正しい日本語できちんと発表できるようにすることを目標とする。

授業の方法

<春学期>

原則として、聴解・会話・発表の3つを、毎週時間を調整しながら行った。今期はオンラインでの授業だったので、聴解はトピックについての背景知識を確認した後、全体で音声を聞きながら、GoogleFormsに答えを記入し、クラスで答え合わせを行った。また、ディクテーションは宿題とした。会話はテキストに沿って進め、会話文の内容を理解しながら、相手の話に反応ができるように練習を行った。発表は①最近の出来事（スピーチ）②アンケート調査発表、③旅行での思い出（スピーチ）を行い、②③は日本人の学生ボランティアを招いて発表会形式で行った。

結果と課題

<春学期>

受講者は3人と少なかったが、3人とも大変熱心に取り組んでおり、課題もほぼすべて期日までに提出された。特に発表の準備にはそれぞれが時間をかけ、準備万端の状態でクラスに臨んでいたため、個別にじっくりと確認と練習に時間を取るようにした。その一方でやや聴解や会話の時間の確保が難しくなってしまったこともあったので、授業内の時間配分を今後の課題としたい。また、発表では参加してくれたボランティアからの反応が大変良く、学生の自信にもつながったと思われる。授業終了時には、学生全員が今後の目標として「もっと自然に話せるようになりたい」と語っていたので、今後は初中級の会話表現と共に、リズムやポーズにも着目した授業についても考えていきたい。

2020 年度 「J5～J7 文法・文型」授業記録

コースの概要

J5～J7 の文法・文型科目は、中級前半から中級後半あるいは上級前半レベルの文法や文型を習得していけるように設計されている。それぞれのレベルとも週 1 回の授業であるため、学生が授業外にも学習できるよう、宿題を課している。

J5 のレベルにおいては、日本語能力試験 N2 レベルの文型に焦点をあて、初級の文型を応用しながら、進出の文型も着実に身につけていくことができるような教材、教室内活動を実施している。J6 のレベルにおいては、日本語能力試験 N2、N1 レベルの文型に焦点をあて、論文作成や読解等に必要とされる高度な文型を習得していくための教材、教室内活動を実施している。そして、J7 のレベルにおいては、引き続き日本語能力試験 N1 レベルの文型を導入しながら、さらに、日本語の文章を文法的に分析していく力を身につけられるような教材、教室活動を実施している。

各レベルの詳細は以下の通りである。

<J5 文法・文型>

担当者名：<春学期>a クラス：小森由里、b クラス：金庭久美子

<秋学期>a クラス：任ジェヒ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 a クラス 8 名、b クラス 8 名、秋学期 3 名

使用教材：独自教材

目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

文型リスト

J5 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	助詞相当語	文型
1	～のかわりに、～について、～によって、 ～に比べて、～に基づいて	こ・そ・あ・ど Expressions
2	～に関して、～を問わず、～に応じて	と／ば／たら／なら Expressions
3	～に反して、～に対して、～において	こと Expression1
4	～に従って、～に沿って	こと Expression2
5	～に際して、～につれて	もの Expression1
6	～にとって、～に先立って	もの Expression2
7	～に渡って、～に代わって	Time Expressions
8	～にあたって、～に伴って	わけ Expressions
9	Adverbs used in daily conversations せめて、さすが（に）、やはり（やっぱり）、どうせ、つくづく	
10	「量が多い」ことをあらわす表現、 「よく」の使い方	

授業の方法

<春学期>

(a クラス)

授業は 1 回に 1 課のペースで進めた。各課で多数の文法項目・文型を扱うため、教科書以外に、形式・意味・運用上の注意点をまとめたハンドアウトを配布し、文型の意味や用法を説明した。さらに、教科書の例文を通して文型の運用方法を理解させた。毎回、復習として学習した文型を用いた短文を作成すること、予習として次の課のわからない言葉の意味を調べることを宿題にした。短文作成の宿題は個別にフィードバックした。学期の半ばで中間テスト、学期末に期末テストを実施した。

(b クラス)

授業は Zoom を用いたオンライン授業で実施し、1 回に 1 課のペースで進め、毎回、その日に学習した文法、語彙を用いた例文づくりの宿題を課した。また、翌週授業で扱う課を読むことを予習とした。教科書の例文を用いて、文型の意味、接続、用法などについて、Q & A をしながら、確認した。その後、教科書の練習問題以外に、空欄補充の文完成問題や短文

づくりを実施した。復習問題の際には、ブレイクアウトセッションを用い、毎回ペア、グループ活動を取り入れた。オンライン化に伴い、教材の提示、宿題の提示及び回収、中間テスト、期末テスト、テスト前の練習はすべて **Blackboard** で行った。

<秋学期>

授業は毎週 1 課のペースで進めた。翌週に扱う課の予習を事前課題とし、授業では文法・文型の意味と用法、接続について、パワーポイントを用いて学生とやり取りを行いながら確認した。その後、練習問題、短文作成などの活動をペアまたはグループで行い、適切に理解できたかを確認した。活動は全て **Zoom** のブレイクアウトセッションを用い、教師はグループ間を巡回しながら質問などに対応した。グループで出た質問や疑問点などは最後に全体で共有し、再確認を行った。毎回の課題は、その日に学習した文法・文型項目を使った短文作成を行うことで、**Blackboard** に提出してもらった。フィードバックは基本的に個別に行ったが、共通して見られた誤用は全体で確認した。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

8 名が履修したが、熱心な学生ばかりであった。2 名が学期途中で帰国し、時差のために早朝に授業に出席することになったが、2 名とも真面目に出席していた。全体的に、出席率も宿題の提出率も高かった。中間テストは得点にバラつきがあったが、期末テストはほとんどの学生が中間テストよりも高得点であり、それぞれに努力したことが窺えた。学期後半には、ブレイクアウトセッションを使って、学生同士で練習問題を考えさせたり答え合わせをさせたりする時間も設けたが、毎回導入すべき文法項目が多いため、ピア活動を頻繁に取り入れることはできなかった。文法のクラスのため、どうしても教師側からの一方的な説明の時間が多くなりがちではあるが、学生の主体的な取り組みを促せるよう、今後は学生間の活動を取り入れる工夫を心がけたい。

(b クラス)

一度も実際に対面することなく授業を行うので、学生との関係をどう作るのが自分にとっての心配であったが、毎回ビデオで姿を見せてくれ、お互いの顔を見ながら授業を進めることができ、通常のクラスに劣らない環境で進めることができた。また、12 週間という通常より短い期間であったが、**Blackboard** の練習問題などでなんとか学習時間を確保することができた。コロナのような状況でも帰国せずに残って学ぼうとする学生は勉強に対する動機が非常に高いのだと思われる。すべてのクラスに毎回定時に開始し、宿題も期限までに提出し、最終的にはよい成績で **J5** 文法を終えることができた。課題としては、**Blackboard** の使用とグループ活動の方法がある。最初のうち **Blackboard** の教材提示に期限があることがわからずダウンロードしていないことがあった。また、課題の提出がわからずメールで送ってくる者もいた。秋学期は事前に **Blackboard** の利用方法について明確に伝えることで改

善できると思われる。また、グループ活動でブレイクアウトセッションにすると、各グループ活動を同時に見ることが難しい。今回の学生は本当にいい学生だったので、指示通りの活動をしていたと思うが、グループ活動でも確実に作業させる課題を考えておきたいと思った。

<秋学期>

今回のクラスは 3 名と少人数であり、全員日本語に対する興味や学習意欲が高い学生だった。日本語学を専攻とする学生も 2 名いた。そのため、教師から学生への一方向型授業ではなく、学習項目についての質問や学生同士のフィードバックが活発に行われる双方向型授業が展開できた。ドイツから参加する学生は午前 4 時の参加にも関わらず、一度も休むことなく授業に参加し、学習項目と関連するエピソードを共有するなど積極的に授業をリードしてくれた。また、春学期で一度オンライン授業を経験した学生が多かったため、Blackboard を活用した課題の提出やテストの受験なども問題なく実施できた。しかし一方で、オンラインならではの課題も見られた。新しい文法・文型項目の理解確認のため、短文作成を教室内で行うことがあったが、オンライン辞書にある例文をそのままコピーしてチャットに入力する学生がいた。このような課題の改善策としては、前文や後文を指定し、文のコンテキストを理解した上で文法・文型項目を考えさせるといった方法が考えられる。学生が日常生活の様々なコンテキストの中で、習った文法・文型を活用して適切に文を作成したり、発話したりするためには、どのような練習問題や活動が効果的なのかについて、今後さらに検討を行っていきたい。

<J6 文法・文型>

担当者名：<春学期>任ジェヒ

<秋学期>三浦綾乃

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 18 名、秋学期 2 名

使用教材：独自教材

目標

日常会話や小説などで用いられるやや高度な文法、文型の理解を目的とする。

文型リスト

J6 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型
1	「理由の表現」 ために、ばかりに、からといって／だからといって、あまり 「目的の表現」

	V んがため (に)、V-Volitional と
2	「感情・心情・評価の文型」 ～てしょうがない／～てしかたがない／～てならない、～てたまらない、～限りだ、～と いったらない (～ったらない)、～ずにはいられない／～ないではいられない、～ずには おかない／～ないではおかない、～てやまない、～極まる／～極まりない／～の極みだ、 ～の至りだ 「評価の文型」 ～だけに、～だけあって、～にしては／それにしては、～のわりに (は) ／～わりに (は) ／そのわりに (は)
3	「不快を表す文型」 ～だらけ、～まみれ、～がましい、～たらしい (～ったらしい)、～にもほどがある、～ にたえない 「非難・軽蔑を表す文型」 ～ぶる、～じみた、～っぽい、～くせに (くせして)、～なんか／～なんて、～ごとき、 ～ときたら、～にひきかえ／それにひきかえ、じゃあるまいし (ではあるまいし)、Noun +に (として) あるまじき+Noun
4	「判断を表す文型」 ～までもない／までのこともない、～には及ばない、～にはあたらない、～ほどのこと (もの) ではない、～かねる、～っこない、～にすぎない、～ないことはない、～までだ ／までのことだ、～如何だ／～如何で・によって V、～次第だ／～次第で V、 「理性的評価を表す文型」 ～に足る／値する、～に恥じない
5	「推察・推量を表す文型」 ～にほかならない／～にほかならぬ+Noun (人)、～にかたくない、～がたい、～かね ない、～恐れがある、～ないとも限らない、～まい、～と見える、～げ
6	「人や物の状態・性質を表す文型」 ～のきらいがある、～がちだ、～気味だ、～つつある、～たてだ、～かけだ、～っぱなし、 ～まま、A かたわら B、A がてら B、A かたがた B、A ついでに B
7	「人や物の状態・性質を表す文型 2」 ～向きな、～向けな、～ごろ、～盛り、～めく、～つく、～たつ、～放題、～なり、～さ、 ～み
8	「義務・当然を表す文型」 ～べきだ、～べきだった／～べきではなかった、～べく～、～べくして～、～てしかるべ きだ、～ (ない) わけにはいかない、～しかない、～ (より) ほか (は) ない／～ (より) ほか～ない、～ざるをえない、～ないではすまない／～ずにはすまない／～なしにはす まない～を余儀なくされる／余儀なくさせる

9	「その他の文型 1」 ～かいがある／～がい、～きっての、～ぐるみ、～こそ、～からこそ／～ばこそ ～んです、～てこそ、～こそすれ、～ずじまい、～たりとも～ない／～な（禁止）、～ふりをする、～たことにする／～たことになる
10	「その他の文型 2」 ～だに～ない、A くらいならむしろ B 方がい／方がましだ／～なさい、A（という）よりむしろ B、せめて～だけでも（いいから）～、～つ～つ、～つける、～こなす、～慣れる、～抜く、～通す、～切る、～尽くす、～終わる、～終わる、～やむ、～始める、～出す

授業の方法

<春学期>

授業は毎週 1 課のペースで進めた。翌週に扱う課の予習を事前課題とし、授業では文法・文型の意味と用法、接続について、パワーポイントを用いて学生とやり取りを行いながら確認した。その後、練習問題、短文作成などの活動をペアまたはグループで行い、適切に理解できたかを確認した。活動は全て Zoom のブレイクアウトセッションを用い、教師はグループ間を巡回しながら質問などに対応した。グループで出た質問や疑問点などは最後に全体で共有し、再確認を行った。毎回の課題は、その日に学習した文法・文型項目を使った短文作成を行うことで、Blackboard に提出してもらった。フィードバックは基本的に個別に行ったが、共通してみられた誤用は全体で確認した。

<秋学期>

秋学期はすべてオンラインで授業を行い、1 回に 1 課のペースで授業を進めた。予習として授業で勉強する課を読んでおくように学生に言い、授業では文型の意味・用法、接続の形、注意点、類似文型・表現との違いなどポイントを絞って確認した。テキストの例文のほかに学生の身近な話題での例文も提示し、どのような場面で使える文型なのかをよく理解できるように努めた。例文を確認した後は口頭またはチャット機能を用いて短文作成練習をした。授業の後は授業で習った文型を使った短文作成や文完成問題を宿題し、Blackboard に提出させた。宿題は毎回教師がフィードバックコメントをつけて返却した。

結果と課題

<春学期>

今学期は初めてのオンライン授業であるということもあり、学生が抱えている不安などを解消するためにも学生同士のラポール形成が重要であると考えた。そのため、Zoom のブレイクアウトセッションを活用して学生同士の学びの場を多く設けるように心掛けた。具体的には、短文作成や練習問題の実施において、必ずペアまたはグループ活動を取り入れるようにした。他の受講生に文型・文法の意味や機能を説明したり、他の受講生から説明を聞

いたりする中で、自身の理解を再確認するだけでなく、学習上の困難点を共有する良い機会になったと思われる。しかし、課題も見られた。全体での活動には積極的に参加するものの、ペアまたはグループ活動では消極的な参加態度をとる学生がいた。受講生が 18 人もおり、教師一人が複数のブレイクアウトルームを移動しなければならなかったため、学生一人ひとりの状況を把握し、適切なタイミングで適切な対応を行うことが難しかった。このような課題はオンライン授業ならではの問題であるとも感じた。オンライン授業において一人ひとりの学びが深まるようなグループ活動を行うためには、学生にどのように働きかける必要があり、教師はどのような役割を果たすべきかについて、今後更に検討を行っていききたい。

＜秋学期＞

J6 文法は 1 回の授業で扱う学習項目が多いため、ついてくるのが大変な様子も途中で見られた。しかし、授業ではよく教師の解説を聞き、短文作成練習では積極的な発言が多く見られ、熱心に学ぶ様子が見られた。2 名しかいなかったため必然的に発言回数が増えることになり、それが学生のプレッシャーになるのではないかと懸念されたが、いいアイデアの短文が作れたらコメントしたり、相手の間違いに気付いたらそれを修正したりと、学生同士のコミュニケーションも見られ授業は非常にオープンで穏やかな雰囲気に進んだ。熱心に学んでいた学生ではあったが、宿題はときどきインターネットで調べた文をそのまま書いてくることもあったため、新出文型の定着が進まないこともあった。そこで、宿題は前件や後件を指定したり、自分で考えた文を書くように明示したりするなどの対応をした。また、学生は J6 文法で習った文型と、他のレベルで習った意味・用法が似ている文型の使い分けに最後まで苦労していたようであった。新出文型の定着だけでなく、既習の類似文型と新出文型を教師がどのように関連付けて提示し、意味・用法の違いが理解できるようにするか、より効果的な指導方法を今後考えていきたい。

＜J7 文法・文型＞

担当者名：＜春学期＞井上玲子

＜秋学期＞長島明子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 21 名、秋学期 16 名

使用教材：独自教材

目標

文学作品や専門的な雑誌記事、さらには公式なスピーチなどで用いられる高度な文型を理解し、自分の会話や作文で流暢に使えるようになることを目指す。

文型リスト

J7 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型
1	①名詞＋ながら ②～ながら （逆説） ③～まま ④～つつ ⑤～つつある。
2	意向形 ①～（よ） うか～まいか ②～（よ） うが／～（よ） うと／～かろうが／～かろうと ③～（よ） うが～まいが／～（よ） うが～まいと 語彙とニュアンスの似ている表現 迂闊な、機嫌、体裁
3	「ところ」 ①～どころか／～どころではない ②～ところだった ③～ところに／～ところを ④～ところによると／～ところによれば／～ところでは ⑤～ところまで来る／～ところまで行く 語彙とニュアンスの似ている表現 苦情／不平不満／文句／クレーム／愚痴
4	「まで」 ①～まで／～までに／～までになる ②～まで／～までして／～てまで ③～までだ／～までのことだ ④～までもない とりたての助詞 こそ、も、とか
5	「時」を表す文型 1 ①～そばから ②～が早いか ③～や否や／～や 似ている意味の使い分け 空き／空（から）、あたたかも／いかにも 色々な意味を持つ動詞

6	「時」を表す文型 2 ①～か～ない（かの）うちに ②～なり ③～たとたん（に）／～た矢先に ④～た弾みに／～た拍子に まとまりで覚えたほうがいい表現 ①～ても～よりほかに～はない ②～と、～ばかりでなく、ひいては～につながる ③～ので／～ば、～ないで／～ずに 済む ④～たら、～でも／だって、～たくもなる／たくなる ⑤～だけど／だが、どんな（に）～でも、ないよりは（ずっと）まだ ⑥～は～の現れだと解釈できる／受け取れる／思う／思われる／理解できる
7	「時」を表す文型 3 ①～次第 ②～度に ③～につけ／～につけても ④～につけ～につけ ⑤～折に ⑥～際に／～節に 覚えたほうがいい表現 ①～もしない＋名詞／で／くせに ②少しでも＋意向形＋ものなら、すぐに ③～も考えようによっては ④～（である）ことは、誰の目にも明らかだ ⑤～をもてあます
8	「時」を表す文型 4 ①～かけだ／～かける／～かけの ②～しなに／～がけに ③～際／～間際 覚えたほうがいい表現 ①～に越したことはない ②～のをいいことに ③～は～を物語っている
9	複合動詞 ①～損なう／～損ねる／～損ずる ②～違える

	③～過ぎる／～過ごす ④～まくる 覚えたほうがいい表現 ①～かと思いきや ②～とあれば／～とあっては ③～を皮切りに（して）／～を皮切りとして ④～に至るまで ⑤～を限りに／～を潮に ⑥～をもって／～をもってすれば／～をもってしても
10	副詞の呼応 ①たとえ／いくら～ても / どんなに～ても ②～たら～で／～ば～で／～なら～で ③～であれ／～であろうと ④～ならいざ知らず／～ならともかく ⑤～ならまだしも／～からまだしも 覚えたほうがいい文型 ①～はおろか／～は言うまでもなく／～は言うに及ばず ②～もさることながら ③～と相まって ④～を踏まえて ⑤～始末だ

授業の方法

<春学期>

毎週1課のペースで授業を進めた。毎回、翌週扱う課を読んでくこととし、授業では、まずペアまたはグループで文型の意味、接続、用法の確認をし、練習問題をしてもらった。次に、全体で文法・文型の説明を行い、練習問題を全体で確認した。文法・文型の補足説明ではパワーポイントを使用した。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を行った。

<秋学期>

授業は1回に1課のペースで進めた。まずテキストに沿って、文型の意味、注意点、似ている文型・表現との違いなどをテキストの例文を使って説明した。5課～8課の「時を表す文型」には類似表現の文型が多く出ているので、違いを詳しく説明した。その後、学習した文型を使って、簡単な文完成の練習をした。毎回、学習項目の文型を使った短文完成問題を宿題にし、翌週全体でフィードバックした。個別フィードバックは宿題用紙の中にコメントを入れた。

結果と課題

＜春学期＞

今学期は Zoom を用いたオンライン形式の授業を実施した。特外外国人学生 4 名と大学院生 17 名の合計 21 名が履修した。学習意欲が高い学生は、毎回課した短文作成の宿題も時には遅れ提出はあったものの、一度も欠かすことはなかった。授業内においてもその課で扱う文法・文型を予習してきており、グループで積極的に話し合いながら練習問題に取り組んでいた。しかし、一方で課題もあった。学期の前半は予習をして授業に臨んでいた学生も、中盤あたりから他の履修科目の課題を優先したいとのことで、テキストの予習をせずに授業に参加することが多くなっていった。また宿題の提出率も非常に低かった。教師がブレイクアウトルームを訪問した際の呼びかけや、全体での答え合わせの時には反応はするものの、グループでの確認活動では予習をしてきていない一部の学生は、マイクをミュートにしてグループ活動に参加していないということも多々あった。毎回予習して授業に臨み、宿題も欠かすことなく提出した学生は優秀な成績を収めたが、予習や宿題をしなかった学生の成績は芳しくなく、残念な結果となった。今学期は初めてのオンライン授業であり、また約 20 名のクラスだったため、授業内でのケアが不十分だったことは否めない。オリエンテーションで授業概要を説明してはいるが、学期中も予習や宿題提出の大切さを確認すればよかったのかもしれない。オンライン形式の授業において履修学生一人一人の状況を把握することは難しいと思うが、可能な限り授業内で学生とのコミュニケーションを取るよう努力していきたい。

＜秋学期＞

出席率がよく、授業を円滑に行うことができた。宿題の短文作成では、コースの初めのころは、接続の仕方などの文法や文の内容にあまり注意を向けずに文を作ることが多く、種々の誤りが散見されたが、回が進むにつれて次第に少なくなっていった。また、学習項目だけでなく既習の文型や表現を組み合わせ工夫して文を作るようになった。一方で、既習の文法項目の誤り、特にアスペクトとテンスに関する誤りを繰り返す学生も数名いた。今後は類義表現の使い分けやアスペクトやテンスの練習なども授業の中に取り入れていきたい。

2020 年度 「J5～J7 読解」授業記録

コースの概要

J5～J7 の読解は、様々な分野の読解教材や生教材を読み、内容を正確に理解し、用語や表現を増やすとともに読むスキルを意識化する活動を取り入れて授業を展開している。

具体的に、J5、J6 では説明文、エッセイ、新聞記事、小説など様々なスタイルの文章を取り上げ、読むスキルを獲得する。また、用語や表現を増やし、要約やディスカッションを行なう。J7 では、より長い文章を読み、内容理解をした上で要約したりレジюмеを作成したりすることを目指す。各科目の詳細は次に示す通りである。

＜J5 読解＞

担当者名：＜春学期＞数野恵理 ＜秋学期＞小松満帆

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 14 名、秋学期 1 名

使用教材：独自教材

目標

様々な分野の読解教材を数多く読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。また、徐々に長い文章にも対応できるようにしていく。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすとともに様々な読むスキルを学ぶ。

授業の方法

＜春学期＞

今学期はオンラインで授業を行った。著作権に配慮し、インターネットで公開されているものや図書館のデータベースで公開されているものを新しい読み教材として使用した。Zoom を活用して、通常と同様の授業活動を行ったが、漢字のクイズは行わなかった。読み物と内容理解、意見述べるのワークシートを宿題とし Blackboard に提出させた。授業ではまずグループに分かれて音読、内容確認、ディスカッションをし、次に全員で確認した。さらに、制限時間内に同じテーマの読み物を読み、内容理解とディスカッションを繰り返した。学期末のテストは Blackboard のテスト機能を活用し、オープンブック（辞書などの利用可）でテストを実施した。

＜秋学期＞

新聞のコラム、料理レシピのウェブサイト、新書の抜粋、小説等を用いて、読解練習を行った。課題は、語彙の確認、ブレインストーミング、本文読解、音読、精読、設問への解答、という流れで進めたが、学期中 3 回、要約の練習も行った。漢字の読み方については音読時に確認し、わからない語彙については「リーディングチューター」を利用し、本文読解時に学生自身に調べてもらった。また、扱った語彙リストを出題範囲として、翌週語彙漢字クイズを行った。

結果と課題

＜春学期＞

Zoom のブレイクアウトルームを活用して通常とほぼ同様の活動を行うことができた。グループ活動の時間もかなり取ったので、学生は能動的に参加し、学生間の交流も活発だった。また、学生が一人で読み物を読む時間には、人数分のブレイクアウトルームを準備し、全員と個別に話をする事で、学生の様子を把握することができた。今学期は教材もインターネットで公開されている生教材に変えた。内容とレベルも概ね適していたが、読み物の一つは

難しくなりすぎたので、来学期はその教材を差し替えたい。また、今学期は漢字のクイズができなかったが、教材も揃ったので来学期からはまた漢字語彙クイズを行うようにしたい。

<秋学期>

今学期は履修者が1名だったことで、学生の理解度や進度に合わせて、授業を進めることができた。また、学生も教員に質問をしやすい環境であり、積極的な発言が多く見られた。教材については、堅い文章に限定せず、多様な種類を取り入れたことで、より生き生きとした日本語に触れることができ、教師との1対1でのオンライン授業という環境の中でも、学生は疲れを見せることなく、高い意欲を維持して授業に臨んでくれた。

一方で、履修者が1名ということで、ペアワークやグループワークというピア活動ができなかったことが残念である。また、つねに教師と1対1であるという環境から、学生の緊張感を緩和させるためにも、ときに個人作業を取り入れるなど、工夫が必要であった。

学期を通して感じたことは、語彙力の不足である。語彙を増やしていくことはもちろん、今後は、辞書を使って読んでいく練習に加え、わからない語彙が出てきても推測して読んでいく力を養う活動を増やしていく必要があるだろう。

<J6 読解>

担当者名：<春学期>武田聡子 <秋学期>武田聡子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期 9名、秋学期 2名

使用教材：独自教材

目標

新聞記事や小説など様々な分野の読み物を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすと共に、様々な読むスキルを学ぶ。また、文章のポイントを押さえた要約ができるようになることも目標とする。

授業の方法

<春学期>

説明文、意見文、新聞記事、小説など、さまざまな読解教材を取り上げ、読解のストラテジーを意識して読む練習を行った。毎回、読み物を読んできると、語彙調べをしてくること、を予習として課した。授業の冒頭に漢字語彙クイズを実施した。クイズ実施の方法としては、教師がクイズ用紙を画面共有し、学生は解答をチャットに書いて教師に「プライベート」で提出することとした。授業活動としては、一人で読み、全体で内容を確認することもあれば、ブレイクアウトルームを利用してペアや小グループで内容を確認したりするなど、学習者同士の交流ができる活動を取り入れた。また分担読解を実施し、自分が担当した読解内容をクラスメートに伝えるという活動を行った。学期後半では、要約の練習も数回取り入

れた。期末テストは **Blackboard** を使った読解テストを実施した。

<秋学期>

説明文、意見文、新聞記事、小説など、さまざまな読解教材を取り上げ、読解のストラテジーを意識して読む練習を行った。毎回、読み物を読んできること、語彙調べをしてくること、を予習として課した。授業の冒頭に漢字語彙クイズを実施した。クイズ実施の方法としては、教師がクイズ用紙を画面共有し、学生は解答をチャットに書いて教師に提出することとした。授業活動としては、黙読、音読、内容確認のための質疑応答、要約などを実施した。話題を広げて、ネットで関連した記事を探してもらったりもした。今学期は一人しか出席しなかったため、分担読解は二つの読み物を一つは宿題にし、もう一つは授業で扱った。読解内容を教員に伝えてもらった。期末テストは **Blackboard** を使った読解テストを実施した。

結果と課題

<春学期>

9 人の登録であったが、実質は毎回出席する 7 名の学生による授業となった。7 名全員がすべての課題を毎週提出し、授業に熱心に取り組み、積極的な姿勢で学んでいた。読解とはいえ授業中はできるだけ学習者同士の交流を重視し、トピックについて意見を求めたり、ディスカッションをしたりするなどを心掛けたが、オンラインという性質上、自ら、ミュートを外して発言するというような積極性があまり見られず、こちらから指名をして発言を促すことも多かった。また、ネットワークの問題でビデオをオンにできない学生の顔は見るできないため、活動に取り組んでいるのか、話を聞いているのかが見え不安になることもあった。声をかけても返答がない場合は、チャットでメッセージを送るなどしたが、集合での授業とは異なるオンライン授業ならではの困難さをどのように解決していくか新たな授業の形に慣れていくことが教師も学生も必要であると感じた。対面でもオンラインでも、読解の授業では読むスピードに個人差が出てしまうため、早く読み終わった学生への対応と遅い学生への対応への工夫は今回も課題として残った。

<秋学期>

2 人の登録があったが、実質は出席者 1 名の学生との個別指導授業となった。1 名の学生ではあったが、全授業出席し、宿題や課題を欠かさず提出し、授業に熱心に取り組んでいた。話し合いをするクラスメートがいないため、対教師との会話になるのは少々残念であった。じっくりと指導ができる反面、他の人の意見を聞くことができなかったのは学習を広げる意味では限界があったといわざるをえない。教師の個人的な考えを伝えることはしたが、本人への刺激は不足していたことは否めない。本人にとって、関心のある話題はそれなりに話し合いも深まるが、そうでない話題は、意見があまり出ず、その代わり調べ学習をしたりしてみたものの、どの程度効果があったかは見えにくかった。オンラインという性質上、本人いわく、回線が不安定なのでビデオをオンにすることができないと全回終始ビデオオフであったため、音声のみでの授業となった。(教員のビデオはオンであった)。

音声のみでも授業は成り立つし、学習者の上達は確認できるが、顔が見える状況でオンライン授業を受ける環境を整えることを強く勧めたい。

<J7 読解>

担当者名：<春学期>a クラス：神元愛美子、b クラス：長谷川 孝子

<秋学期>神元愛美子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 a クラス 13 名、b クラス 15 名、秋学期 7 名

使用教材：独自教材

目標

新聞記事や小説などの長文を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。長文の読解を行い、語彙を増やすと共に、様々なスタイルの文章に触れて、読みのスキルを伸ばす。また、新聞記事の要約ができるようにする。

授業の方法

<春学期>

(a クラス)

社会的、文化的背景が盛り込まれた長文のテキスト以外に、新聞記事、小説など、様々なスタイルの文章を扱った。教材は読解シートを宿題として基本的に事前に読んでくこととした。授業は zoom を使用し、オンラインで行った。オンライン授業ではペアまたはグループで内容確認とワークシートの確認を行い、全体確認をした。その後、読んだ内容についてのディスカッションを取り入れた。小説は芥川龍之介の作品を扱い、授業後に意見と感想を Blackboard の掲示板に書かせ、全体共有した。また、要約の力を培うために天声人語も並行して扱った。天声人語は 100 字前後の要約を宿題とした。要約も Blackboard の掲示板を使用、学生が他の学生の投稿を見られるようにした。時間があるときはピアチェックも行った。また、レジュメの作成も適宜実施した。

(b クラス)

新聞記事、随想、小説、論説文といった様々なジャンルの文章を扱った。毎回授業前の課題として、文章の概要が理解できるようなワークシートを課題とした。その他、新聞記事では段落の要旨やレジュメ作成などを課題とした。授業では、筆者が伝えたいポイントの確認、レジュメを見せながらグループ内での発表、随想や小説の登場人物の心情を追って想像し意見交換などを行った。また、何度か天声人語の要約練習をし、フィードバックを行った。

<秋学期>

基本的に秋学期の a クラスと同様の方法で授業を行なったが、春学期と異なる点が 3 点ある。

1. 全員漢字圏の学生だったため、教材を授業前に読むのではなく、授業内で読みディスカッションを行なった。
2. 芥川龍之介の小説と新卒採用に関する新聞記事を扱う回で日本人学生を招き意見交換を行なった。
3. 天声人語の要約は毎回ピアチェックを行い、ピアと教員から FB をもらうようにした。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

語彙や内容理解で困ることは少なかったが、漢字の読み方がわからない学生が多かったため、音読する時間をある程度設けた。扱った教材によるが内容は概ね把握できていたので、論理的に内容をまとめ、他者に説明するトレーニングと意見を伝えることに力を入れた。今学期は Blackboard の掲示板を利用したので、様々な形でアウトプットする機会が多く、意見交換ができたと好評だった。天声人語の要約も Blackboard の掲示板を使用したため、共有された要約を多く読み自身の要約に活かすことができていた。このように文をまとめ、書いて伝える力がついたが、問題はオンラインディスカッションだった。zoom を使用したオンライン授業ではアジア圏の学生が顔を出すのを嫌がり、声をかけても反応がないことが多々あった。発言に偏りが見られ、グループによってはディスカッションを始めるまでに時間がかかり理解を深めることが難しかった。オンラインディスカッションの工夫が今後の課題である。

(b クラス)

限られた時間内で、様々なジャンルの文章の概要をつかむ練習ができた。ただ、授業前の課題を必ず提出する学習者は半数程度であった。大学院生ということで十分な学習時間がないこと、文章の理解にも時間がかかる学習者が多く負担が大きかったことなどが要因だと考えられる。毎回課題をこなしている学習者はある程度力のある学習者で、要約の仕方やレジュメの書き方など授業内容を吸収している様子が見られたが、課題をしていない学習者は繰り返し伝えた内容ができていなかった。しかし、日本語学習の必要性は感じていたようで、欠席はほとんどなく最後まで出席をして授業内課題にも取り組んでいた。語彙・表現・文法や1文の正確な理解、前後の文章のつながりを考える時間、要約やディスカッションの段階的な練習などが必要だと思われたが、時間が足りなかった。今後、学習者のレベルや状況に合わせ、何をどう教えたら効果的かを考える必要がある。

<秋学期>

漢字圏の学生のための少人数クラスだったため、大きなレベル差がなく、学生たちのレベルに合わせて授業を進めることができた。オンラインでもコミュニケーションがよく取れ、ディスカッションが活発で春学期のようなオンラインディスカッションの問題はなかった。初めて実施した日本人学生参加のディスカッションも大変好評で、相手に自分の意見を

述べ、自分のことを説明し、相手の発言を理解する訓練にもなった。普段から日本人と話し合う機会がある学生もいたが、いつもとは違う新しいトピックにチャレンジすることで今までになかった引き出しを作ることができた。

今期の学生たちは論説文や新聞記事を読み、自分の意見をアウトプットことで日本語能力が伸びたと実感できたようである。ただ、小説に苦手意識があり、最後まで文学の楽しさを感じてもらうことができなかった。時間を調整して、もう少し読みやすい小説をもう1作品扱っていただくと心残りがある。

2020 年度 「J5～J7 作文」授業記録

概要

作文は、J5 は中級、J6 は中上級、J7 は上級レベルの日本語能力を身につけているものを対象としたクラスである。J5、J6 では毎週、J7 では隔週に作文課題を完成させ、構成、資料の引用など、アカデミックレベルで必要とされる作文スキルを身に付ける。

<J5 作文>

担当者名：<春学期>長島明子 <秋学期>斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 17 名、秋学期 3 名

使用教材：独自教材

目標

初中級で学習した語彙の定着、およびさらに語彙数を増やすこと、初中級で学習した文型や語彙を使ってレポートや作文を書く力をつけることを目標とする。

授業の方法

<春学期>

今学期は zoom によるオンライン授業を行った。今学期は授業回数が 2 回減って 12 回になったため、12 回のうち 2 回は 2 課ずつ進め、他は毎回 1 課のペースで進めた。学期中、7 つのテーマで 800～1000 字の作文を書いた。最初にその日の勉強のポイントや活動を ppt で説明し、授業に入った。授業ではテキストに沿って、その課のポイントの説明、テキストの練習へと進めた。練習や作文課題についてグループで話し合った。宿題の作文は原稿用紙でもタイプでもよしとした。フィードバックは、個別に対応することが多かったが、複数の学生が間違ったところについては全体で確認した。

<秋学期>

教材に沿って、作文の基本ルール、構成、要約の仕方、意見の述べ方を考えながら、800 字から 1000 字程度の作文を書いた。まず、word の原稿用紙に文字を書きこむ練習からはじ

め、その後、毎回1課ずつ進め11課まで終えた。予習として、翌週の教材を事前に読んでくことを課し、授業では各課の目標とする構成、表現などを確認し、練習に取り組んだ。その後、その日の作文を書くために必要な構成メモの作成やディスカッションを行い、作文は翌週までの宿題とした。要約など短いものはクラス内でチャットで共有し、見比べ、その場で修正することもあった。リライトは4回行った。

結果と課題

＜春学期＞

意欲的な学生が多く、宿題の提出率もよかった。グループやペアでの話し合いも積極的に参加していた。コース前半は、「序論・本論・結論」の構成で書くことに慣れていない学生も見られたが、回が進むにつれて徐々に整った構成で、学習した表現を適切に使って自分の意見を述べるができる学生が多くなった。また、文と文、段落と段落をスムーズにつなげられるようになった。要約に関しても、要約の方法をよく理解し、ポイントを押さえて制限字数内にうまく内容をまとめることができた。今後の課題は、作文の提出が遅れ気味の学生に対して、早い段階から対策を講じるようにすることである。

＜秋学期＞

学生の取り組み態度は概ね真面目で、体調不良で数回欠席した学生がいたものの、課題はほぼ問題なく提出できた。レベルは初級終了というところでは揃っていたが、その中でもかなり差があり、低めの学生は作文を書くために与えられた読み物の読解が不十分であったり、作文でも、初級文法の問題や、辞書で調べたであろう語彙が文脈の中で不自然に使われていたりすることも多かった。そのためフィードバックには時間がかかったが、その分少しずつ改善が見られた。はじめは皆800字の作文を書くことは大変そうであったが、後半には1000字を超えて書いてくることもあった。ピア活動ではクラスメートの作文について細かい指摘ができていたため、今後はフィードバックを効率よくし、その時間でピアでの活動をもっと取り入れられるようなクラス運営を検討したい。

＜J6 作文＞

担当者名：＜春学期＞aクラス：金庭久美子、bクラス：藤田恵 ＜秋学期＞三浦綾乃

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期 aクラス13名、bクラス12名、秋学期 7名

使用教材：独自教材

目標

レポートや作文の構成について学習し、毎回800字から1200字程度のレポートが書けるようにする。また、自分の意見の論拠となる資料やデータを読み取り、要約し、レポート中に正しく提示できるようにする。その際、きちんとした構成で文章が組み立てられるよう

にする。

授業の方法

<春学期> (a,b クラス)

今学期は zoom によるオンライン授業を 12 回行った。プレレッスンの後、4 つのテーマを扱い、レポートを作成することを課題とした。授業では、独自教材のテキスト及び **Master of Writing** を用い、作文や論文におけるグラフの説明方法、引用方法、及び参考文献の書き方の指導を行った。特に引用してその例を挙げる、引用して意見を述べるなどの練習を行った。授業時は Zoom のチャット機能や Google Sheet を用い、各自作った文を入力させ、その場でフィードバックを行った。さらに引用する際、特に盗用・剽窃に対する注意喚起を行った。課題として、意見文を書くための構成メモ、並びにレポートを提出させた。レポートは MS-Word で作成し、基本的に Blackboard で提出を受け付け、担当教員が添削し、クラス全体と個人に対しフィードバックを行った。学期中に 2 回のフィードバックを行った。

<秋学期>

秋学期はすべてオンラインで授業を行った。J6 作文では、プレレッスンのあとに 4 つのテーマを扱い、4 回レポートを書かせた。一つのテーマはだいたい 3 回の授業からなっており、1 回目の授業ではテーマの内容理解を深め、2 回目の授業ではレポートで使える表現やレポート作成のルールを確認し、構成メモを練った。そして 3 回目の授業は、宿題として提出したレポートのフィードバックとリライトを行った。今学期は 3 回リライトの機会を設けることができた。授業では、J6 作文のテキストのほかに、『Master of Writing』を用いながら、論文やレポートにおける引用の仕方、参考文献の書き方などを練習した。今学期は Word でレポートを書かせたが、学期後半は原稿用紙設定の場合の書き方も練習した。レポートはすべて Blackboard に提出させ、学生が提出したレポートは教師が添削しコメントをつけて返却した。共通していた間違いは授業で全体に向けてフィードバックし、個別のフィードバックは、リライトの時間にブレイクアウトセッションを用いて行った。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

オンライン授業であるため、学生が課題文を理解できているか、また、教師の指示がわかっているかがつかみにくかったが、Zoom のチャット機能を用いて、質問の答えを書くように指示したところ、どの程度理解しているのか教師側もわかるようになった。また、談話構造を用いて短い作文を書かせチャットなどに入力させたが、積極的な学生は例に倣ってたくさんの作文を入力した。こうした練習を繰り返すことにより、4 つの課題のレポートの出来は徐々によくなり、特に 4 つ目のレポートでは目標を十分に達成するものとなった。ただし一部の学生は毎回出席したものの、未提出の課題があった。

今後の課題としては、3点ある。1つ目は作文に必要な談話構造のパターンを増やし、できる人にはできるだけたくさんの例に触れる機会を与えることである。様々な例を与えることにより、いろいろな表現を選択できるようにしたい。2つ目は、読み物の設問に工夫を凝らすことである。今回、教材の読み物の変更を一部行ったが、読み物の設問がうまく作文につなげられるようにさらに検討したい。3つ目は、一部の動機づけが不十分な学生に対しやる気を起こさせることである。今回はペアワークを行うのが難しく、教師対学生の場面が多かったように思う。だれにとっても魅力的なクラスになるように、運営方法を考えていきたい。

(b クラス)

春学期は、オンラインでの授業実施となった。J6 作文クラスは、学期開始時1クラス体制で始まったが、履修者が多数であったため3週目より2クラス体制となった。b クラスは、12名の履修登録者のうち実際にクラスに参加したのは10名であり、全員、大学院の1年生であった。授業ではテキストを2回で1課のペースで進め、学期中4つのレポート作成を課した。そして、学期中に2回レポートを書き直す時間をとった。J6 作文では、レポートのトピックに合った課題文や自身で探した資料を正しく引用することを目標の一つとしており、授業では繰り返し練習を行った。その結果、学生たちは課が進むにつれ、引用の表現が身につく、引用部分に対する賛否の表明、根拠の提示、事例の比較など、徐々にそのバリエーションも増えていった。一方で、一つのレポートの中に自身が使いやすい表現を多用してしまうことがあり、1200字程度のレポートの中に同じ表現が3～4回入っていることがあった。また、適切に引用が行われているものの、レポートの中での引用部分の割合が多くなっていることもあった。これら2点については、レポートの書き直しの際にFBを行い、修正させるようにした。今後の課題は、J6 作文で学んだレポートの書き方を、自身の専門科目でのレポートにも活かせるように指導することである。学生の様子から、クラスでの学習内容はJ6 作文の課題作成のみに使用し、自身の専門科目で活用するという考えには至っていないという学生がいた。日本語科目で学んだ内容を、その中でのみ使用するのではなく、専門科目へも応用が可能であるということがイメージできるように、授業の進め方を工夫していきたい。

<秋学期>

履修登録した学生は7名いたが、最終的に授業に参加したのは残念ながら3名であった。専門科目の勉強との両立やスケジュール管理が上手くいかないことがあり、出席率がよくなかったり、課題をほとんど提出しなかったりした学生がいた。授業に参加した日は大変熱心に活動に取り組んでいたが、予習・復習が徹底されなかったため、レポートにおける日本語表現や引用の仕方、参考文献の書き方がなかなか正確に定着せず、期末テストでも間違えてしまう学生がいた。教師として予習・復習をより強く促し、授業でも練習をしつこく繰り返すべきであったと反省している。授業では書いてきた構成メモやレポートを互いに読み、コメントしあう活動も行ったが、学生から「〇〇さんのレポートはここがいいと思った」「他

の学生のレポートを読んで、もっと頑張ろうと思った」などの前向きなコメントがあり、いい刺激になった様子がうかがえた。今学期の学生はレポートのテーマについてあまり予備知識がなく、内容が薄い構成メモを書いてくることもあったが、授業内でテーマについて話し合ったり、構成メモをアドバイスに沿って練り直したりすることで、徐々に上手に書けるようになったと思う。直接顔を合わせて共に勉強できないオンライン授業だからこそ、学生同士が関わる活動を今後も意識して取り入れていきたいと思う。期末テストでは、時間がギリギリになってしまい、書きたいことが書ききれなかった学生もいたため、今後は時間を意識させながらのレポート作成指導も行いたい。

<J7 作文>

担当者名：<春学期>三浦綾乃 <秋学期>武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 9 名、秋学期 15 名

使用教材：独自教材

目標

これまでに学習した語彙や文型を使って、「作文」ではなく、大学レベルで必要とされるレポートや報告書等の長文作成を行うことを目的とする。

授業の方法

<春学期>

テキストはプレレッスンと 4 つのトピックのレッスンから構成されており、一つのトピックのレッスンを 3 回に分けて指導した。1 回目ではそのレッスンのトピックを導入し、関連する文献を読んでクラスやグループで話し合い、トピックへの理解を深めた。2 回目では自分で調べてきた資料と作ってきたレポートの構成をもとにペアまたグループで話し合いレポートの内容を練り、実際にレポートを書いた。3 回目で、書いたレポートのフィードバックとリライトを行った。一学期で学生は 4 つレポートを書き、そのうち 3 つのレポートに関してはリライトも行った。授業は Zoom で行い、グループ・ペアワークの際はブレイクアウトセッション機能を使った。テキストは授業の前に Blackboard で配布し、課題の提出・返却にも Blackboard を用いた。

<秋学期>

学期中 4 つのテーマでレポートを書き、各課 3 回の授業でレポートのテーマに沿った資料を読み、その後、意見交換、レポートの構成を考え、レポートを書き始めるという流れになっていた。参考文献を引用する練習を重ね、正しく引用部分を明記する練習を繰り返した。剽窃・盗用にならないよう、自分の意見を参考文献でどのようにサポートするかについても、注目させた。書き直しを繰り返し、一定の字数内に、正確な日本語でレポートにふさわしい

文体、語彙表現を使って文章を書くことを学期を通して学んでもらった。

結果と課題

＜春学期＞

今学期は9名の履修者がいたが、そのうち2名は途中から授業に来なくなってしまった。最後まで授業に参加していた7名は非常に熱心な学生で、予習と宿題にしっかり取り組んでから授業に参加してくれたため、文献の内容理解がスムーズに進み、レポートを書くための話し合いやディスカッションに時間を多く割くことができた。レポートのフィードバックはブレイクアウトセッションで個別に行ったが、その際、学生が書いたレポートのデータファイルを画面共有することで、レポートと資料を参照しながらその場で一緒に直すことができた。また、フィードバックは学生と教師の一対一の場であったため、他の学生の存在を気にせずに学生も教師も話せたと思う。これはオンライン授業の長所の一つだと言える。しかしながら、ピア・リーディングのような活動はオンライン授業では難しく、学生同士が書いたレポートを互いに読みあう機会を設けられなかったのが心残りである。授業では、文献を引用しながら長文のレポートや報告書を書くことを目標としており、それはおおむね達成できたと思われるが、ただ引用した文のみで構成される節を書いたり、何の脈絡もなくいきなり引用文を入れてしまったりする学生が多かった。説得力のあるレポートを書くための「効果的な引用の仕方」「節の構成の立て方」の指導にもう少し重点を置く必要があったと思う。これは今後の課題としたい。

＜秋学期＞

登録者数は15名だったが、数回来て欠席が続いた学生が4名いた。最終的には11名が最後まで出席した。授業はすべてオンラインで行われた。海外からの参加者が半分近くを占めていた。ビデオをオフにして参加する学生がほとんどで、ビデオオフがデフォルトになっていた。作文という授業の性質上、授業の間ずっとビデオを付けておく必要はないが、出席の時と授業中に意見を述べたり、学習者同士で話し合ったりする時はビデオをオンにしてもらうよう促した。課題を締め切りまでに出不入の学生が数名いたが、回を重ねるごとに、締め切りを守って提出する学生が増え、文章の質もどんどん上がっていった。期末テストでは、引用の仕方ほぼ全員が正しく引用し、引用元の明記もできるようになっていた。今後の課題としては、10人を超えると授業時間に個々に懇切丁寧にフィードバックをする時間が取れないので、フィードバックを書面にして予め読んでもらい、ポイントのみ確認して学生から質問があれば受けるなどフィードバックの方法は工夫が必要だと感じた。

2020年度「J5～J7 聴解・会話」授業記録

コースの概要

聴解・会話は、J5は初中級、J6は中級前半、J7は中級修了レベルの学習者を対象としたクラスである。週1回のクラスで、グループディスカッションやプレゼンテーション、ロー

ル・プレイ、ディベートなどを学生が行うことが多い。そのため、履修者には積極的に授業に参加することが望まれる。

<J5 聴解・会話>

担当者名：<春学期> a クラス：武田聡子、b クラス：イムジェヒ <秋学期> 小森由里

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 a クラス 9 名、b クラス 7 名、秋学期 2 名

使用教材：オリジナル教材

目標

初中級修了レベルの学生を対象としたコースであり、日常生活における様々な場面での聴解会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などをきちんと発表出来るようになることを目標とする。

授業の方法

<春学期>

(ab クラス)

授業では、スピーチ発表、聴解、聴解に関連した会話練習及びディクテーションを行った。スピーチ発表は全部で 2 回実施し、第 1 回目はグラフの説明を行い、第 2 回目は各自が興味ある時事問題について調べて発表した。各自テーマを決め、アウトラインを作成し、クラス全体で発表をした。聴解は「勧誘」「許可」の 2 つの機能を取り上げ、場面に応じたスピーチスタイルを意識し、場面に合わせて様々な表現を使い分けるように練習した。毎回の授業では、聞き取り練習、ディクテーション後にペアでロール・プレイ練習を行った。最後は複数のロールカードから 1 つの場面を選び、ミニドラマを発表した。期末テストは、立教大学のブラックボードを利用して聴解テストを実施し、オンラインミーティングを利用してフォーマル体とカジュアル体のロール・プレイの会話テストを実施した。

<秋学期>

教材の中から「勧誘」「許可」「提案」の機能を取り上げ、カジュアルな場面およびフォーマルな場面で用いられる表現を導入練習し、会話を聴き取る練習も行った。毎回授業冒頭に前回のクラスで導入した表現のディクテーションやロール・プレイをさせて、重要な表現の定着を図った。ロール・プレイをする際にはスクリプトを提出させ、正確に適切に表現が使われているか確認した。今学期はオンライン授業のため学生がキャンパスで日本人学生と接する機会がないことから、日本人学生にもクラスに参加してもらい、学生とペアになりロール・プレイの練習を行った。さらに、時事問題など興味のあるテーマを選ばせ、スピーチを 2 回させた。期末テストとしては、会話の内容を聞き取るテストとロール・プレイのテストを実施した。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

当クラスは 9 名全員がどの活動にも熱心に取り組み、個々の活動の聴解、ディクテーション、スピーチはもちろんのこと、ペアやグループで実施したミニドラマの活動も全ての学生が協力し合い、授業時間外にもスクリプトを作って提出し、発表の準備をしてくるなど授業外活動の努力が見られた。Zoom を利用したオンラインレッスンの特徴として、簡単に録画ができることから、各自のスピーチやミニドラマは録画し、それを見て振り返りをしてもらった。その結果、1 回目より 2 回目で改善されることがほとんどであった。ネットワークが安定しているものは自らビデオをオンにして顔を出してくれたおかげで、対面と同じように近くで授業ができたように感じられた。顔が出せない学生もいたが授業にきちんと参加していたことは発言から知ることができた。ネットワークが不安定で、音声が届いたり、突然退出し入りなおしたりしなければならなくなるような状況もあったが、学習者の聴解会話能力にある程度の成長が見られ、このような新しいスタイルの授業に対して試行錯誤を続けた中で、まだまだ課題は残るものの一定の成果が得られたと考えている。

(b クラス)

受講者 7 人全員、大変熱心に授業に参加しており、出席も課題への取り組み方も大変良かった。日常生活の中で日本人の友達やレストランの店員などから聞いた表現を全体共有したり、ロール・プレイの際に応用したりするなど、積極的な発言をする受講者が多かった。今学期は Zoom により実施されたが、ブレイクアウトルームを活用することでミニドラマの練習も問題なく行うことができた。授業後半に入ってから学生も Zoom の操作に慣れてきたようで、画面共有機能を活用し、ペアで修正を行いながらドラマを作成し、練習していた。ただし、グループ全体の様子をみることができなかつたため、活動が全く進んでいないグループがどのような問題に直面しており、どのように場面に対する意識化を促す必要があるかを把握することが難しかった。ロール・プレイやミニドラマの作成においては場面、人間関係、話者の気持ちなどをペアで解釈し、適切な表現を考えていくことが非常に重要である。どのグループ、どの受講者においても意味のある 100 分になるためには、グループ活動の進め方や教師の役割などを改めて必要があると思った。学生同士の学びを促す具体的な方法とオンライン授業における効果的なフィードバックの仕方を今後の課題としたい。

<秋学期>

学生数 2 名という大変小さいクラスであったが、学生たちは出席率が高く活動にも非常に熱心に取り組んでいた。初回のクラスで、2 名とも苦手な聞き取りができるようになりたいと話していたが、ディクテーションや聴解練習を通して徐々に聴解力が向上し、学生自身も最終クラスで目標が達成できたと話していた。スピーチは、学生が主体的に原稿を何度も修正し完成度の高いものとなった。学生数が少ないことから、発音やイントネーションなどの問題も個別にフィードバックすることができた。ロール・プレイに関しては、想定以上に

日本人学生の協力が効果的だった。日本人学生とペアでロール・プレイをすることで、導入した表現が練習できるだけでなく、会話の構成も自然会話に近いやり取りとなり、また会話の内容も膨らませることができた。学生も日本人学生との練習は楽しかったようである。クラスでの会話練習は表現の導入・定着に焦点を当てているが、今後は、表現だけでなく、モデル会話を提示するなどして談話構造も取り上げていきたい。

<J6 聴解・会話>

担当者名：<春学期>a クラス：小林友美、b クラス：金庭久美子 <秋学期>富倉教子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期 a クラス 16 名、b クラス 19 名、秋学期 10 名

参考教材：瀬川由美・紙谷幸子・北村貞幸『ニュースの日本語聴解 50』スリーエーネットワーク、鎌田修他『中級から上級への日本語なりきりリスニング』the Japan Times など、生教材（インターネットニュース）

目標

中級前半修了レベルの学習者を対象として、実質的な運用能力の育成を目指す。聴解では、時事問題をテーマに、正確に把握できるようになることを目標とする。会話では、相手や場面にふさわしい日本語が流暢に話せるようになることと、プレゼンテーションにおいては、アンケート調査を行い、その結果について比較しながら考察を行うことを目標とする。

授業の方法

<春学期>

(ab クラス)

授業は Zoom を用いたオンライン授業で実施し、12 回行った。12 回の授業ではディクテーションの小クイズ、ニュース、会話、プレゼンテーションを行った。毎回、会話にちなんだ話題の聞き取り練習を宿題として与えており、事前にホームディレクトリに置いた音声教材を聞いてくるように指示した。宿題の確認のため、授業開始時にディクテーションのクイズを実施した。次に、ニュースの聴解練習を行った。その際、市販教材や生のインターネットニュースを使用した。期末テストではニュースの聴解テスト（Blackboard で実施）を行った。会話では会話内容の聴解練習を行った後、聞き返しをする練習を行い、最終的には教材の会話と同じ話題でペアで発表させた。その際には日本人ボランティアにも参加してもらった。また、3 回のプレゼンテーションの練習を行った後、その成果をテストとして 1 人ずつ発表させた。

<秋学期>

授業の前半は聴解、後半は会話練習を実施。聴解はニュースを中心に聞き、大意から詳細までを聞き取る練習を行い、その後テーマについて意見交換。また毎回宿題（聴解練習一日

常会話)を配布し、当日ディクテーションを実施。さらに日常会話の聴解練習。会話練習として宿題に関連する内容でミニ発表を数回行ってもらった。学期後半からは通常の聴解練習に加え、それぞれ自由に社会的なテーマでトピックを選び発表の練習及び発表の仕方などを学び学期末に発表。また会話練習等で数回日本人ボランティア学生に参加してもらった。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

出席率、課題の提出率がよい学生が主であったが、専門科目で忙しくなったのか、欠席が続く学生が数名いたのは残念であった。聴解のニュースは、学生たちの興味に合わせてテーマを選んだこともあり、熱心に参加していた。また、ディクテーションはプライベートチャットで提出をさせたが、回を重ねるごとによく聞き取れるようになり、聴解力の向上がうかがえた。会話は、カジュアルな場面の会話と、フォーマルな表現が用いられるプレゼンテーションを行った。今学期は、オンライン授業ということもあり、学生ボランティアとの交流も目的に、日本人学生と話す機会を増やした。そのため、普段大人しい学生も、積極的に活動に参加していたようで、モチベーションの向上にも効果的だったように感じる。授業で取り扱った聞き直しや話体については、改善が見られない学生もいたため、繰り返しの練習や意識化が必要になるだろう。会話は録音し、全体でフィードバックをしたが、時間に余裕がある時は、個別にフィードバックをすることも効果的だと考える。プレゼンテーションの準備はスケジュールがタイトであったため、調査や準備が不十分な学生がいた。また、調査方法が指示と異なる学生もいたため、プレゼンテーションの例のみならず、調査方法などの例も提示するなど、活動内容や教材の充実を課題としたい。

(b クラス)

聴解の練習ではチャットを多用した。授業開始時のクイズや聴解のクイズの答えをチャットに書き入れてもらうようにした。チャットには他の人の意見に左右されず自分だけの答えを書きこむことができる。そのため、聴解の質問に対して同時に全員のデータを収集することができ、学生たちの理解度をすぐに確認することができた。またこのようなチャットでの回答方法に対して、学生たちの反応は非常によく、熱心に参加している様子がうかがえた。

一方、会話練習は困難だった。19名のクラスだったので、グループワークやペアワークを多く取り入れたいと思ったが、ブレイクアウトルームにすると母語だけで話してしまうグループや無言のグループが見られた。仲間との関係性を作るためにもある程度のおしゃべりは認めたいと思うが、無言だと全く練習にならない。学生が前向きに取り組める方法を考えたい。ただしボランティアの日本人学生が来てくれたときは非常に活発に話しており、最後の感想でもこの練習が一番よかったとのことである。このような活動は今後も継続し

たい。

授業が 12 回しかないため、プレゼンテーションの時間は十分ではなかった。今回のプレゼンテーションは独自のアンケート調査を行い、その結果を比較しながら発表するというものだった。アンケートの対象者が 50 人以上の者や 10 人程度の者がおり、完成度にばらつきが見られた。3 回しか練習時間がないことを考慮して、サンプルを見せるなどしてもう少し効率よく指導を行えばよかったと反省した。次回は教材を整えて臨みたい。

<秋学期>

履修者のうち登録だけの学生やほぼ出席していない学生などいたため、実質 6 名のクラスで遂行。聴解会話のオンラインのクラスとしては、それぞれが意見を述べたり、グループワークをしたり、クラス全体での活動といった意味でもちょうど良い人数であった。当初学習者は意見を言うのに躊躇していたところも見られたが、回を重ねるうちにだんだんと発言をするようになった。ニュースについては、大意から細部まで確認したり、また聞いたあとテーマに関する感想などを言ってもらったりすることができたが、日常会話の練習は時間の関係で、掘下げることができなかった。発表に関しては日本語力並びに発表の構成／形式にも重点を置いて行ったが、構成や形式が難しい学生も多く見られ、もし定着を考えるのであれば、今後は再考を出す、コンファレンスを行うなどの時間も取る必要があると感じた。しかし自由に行うミニ発表や最後のクラスで行った自由発表などでは日本語、内容を含め上手にかつ潑刺と発表してくれていた。また日本人学生の協力は大きかった。何回も参加してくれた学生もあり、丁寧に日本語学習者の話を聞いたり、アドバイスをしたりしてくれていたようだった。

<J7 聴解・会話>

担当者名：<春学期>a クラス：浅野有里、b クラス：イムジェヒ <秋学期>高嶋幸太

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 a クラス 3 名、b クラス 3 名、秋学期 14 名

参考教材：荻原稚佳子・伊藤とく美・齊藤真理子『日本語超級話者へのかけはし—きちんと伝える技術と表現—上級から超級へ』スリーエーネットワーク
生教材（動画など）

目標

中級修了レベルの学習者を対象とし、アカデミック場面での聴解能力および会話能力の育成と、場面にふさわしい日本語の習得を目指す。生の教材を用い、日常生活だけでなく、講義や講演などやや専門的な内容や社会問題、時事問題についても細部まで正確に把握し、流暢に意見が言えるようになることを目標とする。

授業の方法

<春学期>

原則として授業は聴解と会話の 2 部構成で進めた。聴解では、経済、社会問題を取り扱った動画を視聴する前にキーワードの確認を行い、視聴後には内容について理解できたことを全員で共有した。また、視聴したテーマについてディスカッションも行い、内容の要約と意見文の提出を課題とした。会話は、内容に即したテーマで、プレゼンテーションを 2 回行った。プレゼンテーションは ab 合同で、司会進行も学生中心に行った。なお、会話教材の進出語彙の確認問題は、ブラックボードで作成し、2 回実施した。

<秋学期>

聴解と会話の 2 部構成で進めた。聴解では経済、社会問題を取り扱った動画を視聴し、内容理解や、語彙・表現の確認をした。動画の内容は、日本の教育・塾、日本の旅行・観光業、コロナ禍の雇用、コロナ禍の教育の 4 つで、視聴後はテーマについてグループでディスカッションを行った。毎回のディスカッション後には、要約と意見をレポートとして提出することを課した。

会話では、語彙や表現などを学び、発表を課題としながら、伝わるような話し方に留意し、練習を進めていった。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

受講者 3 人は大変熱心に授業に参加しており、出席も課題への取り組み方も大変良かった。動画の内容把握は一部難しい部分もあったが、出てきた疑問は全てクラスで共有しながら進めたので、理解が深まり、意見文も一歩踏み込んだ内容が書けていた。これらの活動を通し、使用する動画の内容の良さが、授業への関心も左右することを実感した。プレゼンテーションでもテキストのテーマをもとに、各自が興味を持ったテーマについて入念にリサーチし、わかりやすく伝えようとする工夫が見られた。プレゼンテーションは ab 合同で行ったが、お互いのテーマから新たな関心が芽生えている様子が見えた。しかし、発表後にそれを話し合うような時間が取れなかったことが反省点の一つである。また、発表時には発音や表現の確認や練習が不足している面も見られたため、プレゼンテーション前の練習方法と後のディスカッションの行い方について、今後検討をしていきたい。

(b クラス)

受講者 3 人は大変熱心に授業に参加しており、出席も課題への取り組み方も大変良かった。今学期、現在世界が抱えている社会問題を反映しているテーマを扱ったため、各国の現状を踏まえた活発なディスカッションが行われた。毎週の議論は受講者の文献調査などに基づいて行われ、内容を要約する練習、説得力のある主張を展開する練習につながった。また、その成果は意見文やプレゼンテーションに反映されていた。しかし、要約文や意見文を

書く時間及びプレゼンテーションを準備する時間を確保することが難しく、ほとんどが課題になっていたため、十分なフィードバックを行うことができなかった。メールでのやり取りだけでなく、Zoom による個別指導など、効果的なフィードバックの方法を今後検討していきたい。

<秋学期>

履修者が多かったため、会話ではさまざまな学生と話し合う機会を設けることができた。聴解では、最初の2つは、教育と観光というトピックで、後半の2つはコロナ禍における社会問題ということで、時流に沿ったものを取り上げた。そのため、視聴後のディスカッションなどでは、自国との比較をするなど、身近なトピックとして話し合いをしている様子であった。今後の課題としては、どうしてもオンラインだと話し合いが進んでいるグループとそうでないグループが出るなど、ばらつきが出る部分があるので、最初に「答えを出さなければならぬ問い」などを提示し、話し合いを活性化させるような仕組みを取り入れていきたいと感じた。

2020 年度 J8 授業記録

コース概要

J8 は、既に高度の文法・漢字・語彙を習得しており、大学における学習・研究が十分日本語で行える学生を対象としたコースであり、様々な目的に沿った科目を展開している。展開している科目は、大学や大学院での学習、研究生生活のための日本語能力を伸ばす科目と、実社会の中で求められる日本語能力を伸ばす科目、日本語そのものについての知識を身につける科目など、多岐にわたっている。また、J8 で展開する科目は、短期留学生のみならず、学部や大学院の正規学生（日本語を母語としない学生）の履修も可能であり、様々な背景を持つ学生が、一緒に学ぶ機会も提供している。

各科目の詳細は次に示す通りである。

<日本の社会と文化 A>

担当者名：<春学期>武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 12 名

使用教材：独自教材

目標

高度な日本語能力を運用して、日本の社会や文化について考え、理解を深めることを目的とする。

授業の方法

日本の文化や社会に関わるテーマを選び、それに関する文献を読んだり、ビデオを見たりする。講義も行うが、主としてテーマについてのディスカッションやプレゼンテーションを中心とした授業を行い、最後のまとめとしてプレゼンテーションを行う。

結果と課題

正規留学生 11 名、特外生 1 名、合計 12 名が登録していたが、実質 11 名が主な出席者だった。うち 1 名は、後半 4 回欠席し音信普通となってしまった。よって、最後まで授業に参加しすべての課題を修了したのは 10 名であった。今学期は新型コロナウイルスというこれまで経験したことのない社会状況の中でスタートした。この状況をふまえて、2 つの大きな課題に基づいて調査、話し合い、レポート作成、発表を行った。1 つ目のテーマは自粛化でスタートした授業であったため『おうちで過ごそう！ Stay home』と東京都が銘打ったキャッチフレーズから、自宅で体験できる活動について調べ紹介するものとした。東京都HPにステイホーム週間を応援するポータルサイトが開設されたものを紹介したり、バーチャルで体験できる博物館などの施設のURLなどを紹介したりした。そのようなリソースから、各自が最も興味を持ったものを調査し、クラスメートに紹介するという形式での発表を行った。非常に工夫された発表をしたものもいたが、課題の趣旨をよく理解しておらず、ずれた内容で発表したものもいた。それをふまえ、2 回目のテーマ「変わりゆく世界の中で残すべき日本文化とは」では、テーマが決まった後は、教員と個別セッションをブレイクアウトルームで持ち、テーマに沿った内容かどうかを吟味し、アドバイスをした。その結果、最終発表は大変有意義な内容が多く、学習者同士のコメントにもいい意見が出された。発表はすべて録画し、1 回目は振り返りとして提出させ、教員の評価、peer コメントと共にフィードバックした。2 回目の発表の後、教員評価と peer 評価をビデオリンクと共にメールで送り、各自で振り返りをするよう促した。今回、J 8 という最高レベルの学習者にそれぞれの課題を意識して各自の日本語力を伸ばしてもらいたいと考えたが、日本の文化と社会という大きなテーマから、自分の関心のあるトピックを選び、各自が新たな気づき、学び、発見につながり、また自分の選んだテーマからだけでなく、クラスメートの発表からも様々な気づきがあったのではないだろうか。

<日本の社会と文化B>

担当者名：<秋学期>長谷川孝子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 7 名

使用教材：独自教材

目標

高度な日本語能力を運用して、日本の社会や文化について考え、理解を深めることを目的とする。

授業の方法

日本の社会や文化に関わるテーマを選び、テーマに関する映像教材を見たり、文献を読んだりした。学習者の希望も反映させて選定した3つの大きなテーマ「日本の働き方」「日本の食」「日本のブーム」を軸に、自動改札開発秘話、働き方の変化、コロナ禍での飲食業界の問題、食文化の変化、観光業界のブームなど、様々なトピックを扱った。映像教材や文献の内容理解確認、発表やディスカッションをしながら授業を進めた。最後のまとめとして、1チーム2～3人のグループでプレゼンテーションを行った。

結果と課題

学習者は、現在日本の中で起こっている問題について、自分なりの意見を持つことができるようになった。日本人学生ボランティアも参加したディスカッションでは、同世代の日本人の意見を聞くことができ、充実した時間になったようだ。しかし、主体的に物事を進めるという点では、まだ多くの課題が残っている。指示したことに関しては応えることができるのであるが、自分で何をすべきか考え行動することに慣れていないように感じた。そのため、ディスカッションやグループワークがうまく進められないことがあった。教師側から作業の進め方や声掛けの例を細かく示した結果、リーダー役がいるグループでは、うまく協力しながら楽しんで作業を進めることができるようになった。今後も、協力する楽しさに気づける仕組みを考えていきたい。

<日本の社会と文化C>

担当者名：<秋学期>丸山千歌

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期3名

使用教材：独自教材

目標

高度な日本語能力を運用して日本社会や文化に関するテーマの中から、受講生の興味・関心に沿うものを選び、そのテーマに沿って授業を進める。

授業の方法

「日本の企業風土」「日本的経営」「日本型サービス」をトピックとして取り上げ、それぞれの専門家をゲストスピーカーとして招き、ゲストスピーカーの講義を軸として授業を進める。

結果と課題

J6～8の3レベルの学生を対象として開講しTAを配置する科目である。今回の履修者は全員正規学部留学生であった。オンライン授業であったが、ゲストスピーカーによる講義の前の事前学習、後の事後学習は基本的にグループディスカッションや、分担読解の課題を行い、履修者の主体的な学習を促すという流れは例年通りに展開した。少人数であったことで、学生とTA、教員でディスカッションをする場面が多かった。学期末まで学習を継続した履修者は、全体的に非常に学習意欲が高く、学期末まで学習動機を下げることなく、積極的に取り組んだ。授業後の振り返りでは、日本語を駆使して様々な活動ができた、いろいろな視点でものごとを考え、意見を交換することができたというコメントが出た。

<社会の中の日本語 A/B>

担当者名：<春学期>沢野美由紀 <秋学期>高嶋幸太

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期 9名、秋学期 4名

使用教材：独自教材

目標

一つの言語としての日本語を取り上げ、他の言語と比較した場合に特徴的な日本語の側面を理解する。擬音語・擬態語、様々な感情表現、微妙なニュアンスを表す副詞、位相や役割語など、日本語の特徴的な側面を取り上げ、それについての論文を読んだり、調査したりする。

授業の方法

<春学期>

今期は「配慮表現」と「日本語の擬音語・擬態語」をテーマに、関連する資料や文献を読み、日本語と受講者の母語などとの比較もしながらディスカッションをする形で進めた。また、それぞれのテーマの文献を読んでプレゼンテーションを2度ずつ行い、それを基にレポートを作成し提出した。

<秋学期>

本クラスでは次のトピックを扱った。若者ことば、メールの文体、故障、役割語、ポライトネスである。基本的な流れは、最初に教員によるレクチャー、次に関連する論文のピア・

リーディング、最後に当該トピックで興味があることについて発表というものであった。発表の際は、学生ボランティアを呼んで、質疑応答にも参加してもらった。

結果と課題

＜春学期＞

履修者は9名で、うち8名が正規学部生であった。全員コンスタントに出席し、課題もほぼきちんと提出された。授業は、関連する論文だけでなく、新聞記事や専門家による一般向けの説明文なども使用した。今回学んだ「配慮表現」も「擬音語・擬態語」も日本語を考える上では重要な役割を担っているが、当初はそれがあまり受講者に理解されていなかったようである。配慮表現は、初級の日本語の文型を配慮という点から見直し、ルールを考えることで重要性を学び、また擬音語・擬態語は、実際に医療現場や雑誌の記事などでどのように使われているかを知ること、日本語における役割を認識してもらえたようであった。

今回、オンライン授業でZoomを使用して行ったが、カメラもマイクもないという学生もいた。そのため、講義の内容が理解できているのか、どの程度のレベルの教材が適切なのがわからず、手探り状態であった。学期半ば以降、マイクだけは全員使えるようになり、音声によるディスカッションやプレゼンテーションも行うことができたが、環境の問題で十分なディスカッションが行えなかったのが残念だった。オンライン授業の利点を十分に活用できたとは言えないと思われるので、今後はその点についても学び、理解を深めたいと考えている。

＜秋学期＞

社会言語学に関して多岐にわたるトピックを取り上げられたと思う。授業ごとにリアクションペーパーの提出を課していたのだが、今まで漠然と感じていた日本語のことを、知識として理解できた、ということが多く書いてあった。先のトピックは学生にとって身近な興味のあるものだったからだと考えられる。今後の課題としては、オンライン上で作業をしている際、どれほど理解できているか、対面より見えない部分があったので、適宜、質問などを入れて理解チェックをするための対応なども考えていきたいと思う。

＜論文読解の技法＞

担当者名：＜春学期＞（池袋）谷啓子、（新座）佐々木藍子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期（池袋）9名、（新座）0名

使用教材：独自教材

参考教材：浜田麻里他『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版、1997

目標

日本語で書かれた学術論文の内容が読めることを目指し、日本語論文の構成語彙などに

ついて学ぶ。

授業の方法

本授業は初回に論文とは何か？を考え、個々の専門分野に関する論文を探す手法を学んだ。第2回目以降は、各自が探した専門の論文（担当論文）1本と教師から提示されたサンプル論文を素材に「論文の構成」を確認していった。その中で論文特有の表現を学び、グループワークによって分野による論文の違いを学んだ。後半は担当論文を先行研究の扱い、データの種類、調査方法などの面からさらに分析した。最終課題として、担当論文についての詳細なレジュメを作成し、口頭発表と質疑応答を行った。

また論文読解に関連して、「参考文献や引用のルール」「調査方法」、最終発表に必要な「レジュメ作成」や「口頭発表上の注意」などを練習とともに内容に組み込んだ。

今期は全12回、ZOOMによる双方向オンライン形式であった。これまでの対面授業では、手書きで分析を書き込んだ担当論文そのものをOHCに提示して発表、コメントし合う流れだったが、オンライン授業ではそれらをデジタル化する必要があり、また個別の作業状況の把握が難しいことが予想された。

そのため今期は各学生の担当論文を編集可能なPDFの形式で再配布し、「担当論文シート」（Excel書式）を用意して個々の記録・チェックに利用した。授業でグループ内発表をする際、学生は色やコメントをつけた担当論文のPDFと担当論文シートを画面共有して使用した。教師はブレイクアウト中のグループに少しずつ入って回るが、その場で全員分は把握できないため、学生が発表に使ったシートにその日のグループワークでの気づきを追加したものを立教blackboardに提出してもらった。教師側は提出されたシートをチェックし、読み間違いを修正したり、気づきにコメントを入れたりした。学生によっては質問を書きこんでくれることもあり、個別対応に役立った。

結果と課題

今期は6学部から正規学部生9名、2年生～4年生という構成であった。インターンシップ中の4年生は忙しそうだったが、全体に出席率も良く、課題提出も良好だった。初めてのオンラインということで最初の1～2回はZOOMの使い方やblackboardへのup方法で戸惑う姿も見られたが、次第に慣れたようである。

協力的な学生が多く、授業中・課題とも皆真面目に取り組んでいた。グループワーク中の発言を聞いていると、各自が選んだ実際の論文は、教材のモデル論文のように分析できずに迷う様子もあった。そのタイミングで教師がブレイクアウトに入っていればコメントをしたが、できなかった分については追って提出された担当論文シートで確認・コメントした。活動全体を通して、選んだ論文の特徴や論文的表現をとらえることができたと思われる。

担当論文シートは有用であったが、使い方で行き詰りや課題が見えた。①上記のように教師がチェック・返却したものを学生側が確認したかどうか把握しきれなかった。②最初

の頃、更新しながら使うのを理解していない学生がいたり、記入した部分のデータが消えてしまったりした学生がいた。また、共通論文についても同様にシートを作成したが、オンラインの負担を考慮して学生が書き込むというより、書き方の参考にする使い方になった。①については声掛けをすること、②については記入方法や更新についてより丁寧に説明したい。

最終発表会は2回に分け、学生が司会を担当した。自分の担当論文を読んだことがない人・専門外の人聞いても分かるように配慮して準備するよう指示したところ、多くの学生が補足説明を加えながら分かりやすい発表を心掛けていた。発表者による画面共有の際に、「見えますか」「見えています」と自然にやりとりしたり、見やすく拡大して提示したりできていたのも、授業内で何回も発表をしていたためだろう。オンラインにもかかわらず質問が積極的に出たこと、司会が上手に回してくれたことで有意義な発表会になった。

<論文作成の技法>

担当者名：<秋学期>（池袋）谷啓子、（新座）佐々木藍子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期（池袋）1名（新座）7名

使用教材：独自教材

参考教材：大島弥生他『ピアで学ぶ大学生の日本語表現 第2版』ひつじ書房、2014

浜田麻里他『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版、1997

北原保雄監修（独）日本学生支援機構・東京日本語教育センター『実践研究計画作成法』凡人社、2009

目標

卒業論文や学術的な論文作成に必要とされる語彙・文型・スキルについて学び、高度な日本語論文作成能力を身につけることを目指す。日本語の論文の構成、スタイル、使用される語彙や接続表現、文型の特徴について学び、自らそれらを用いて構成の組み立てや短文作成などを行う。その後実際の論文作成を行い、実践力をつける。

授業の方法

全14回、両キャンパスともオンラインで行った。前半は論文の探し方の指導後、各自の専門分野に関する論文を探し、担当論文を1本決めて分析、論文の大まかな構成を把握した。専門や関心の異なる分野の論文に触れることで、論文にも様々なパターンがあることを確認した。並行して論文特有の日本語表現を学んだ。

後半は、研究計画書の書き方、論文に必要な表現等を学びながら、各自が取り組みたい論文の準備を行った。テーマ探しから始まり、研究課題を検討、並行して先行研究の収集と整理を行うという流れで進めた。特にテーマ探しではピア・レスポンスを活動に盛り込み、作

成した構想マップにお互いコメントし、修正点を見つけて改善につなげていった。最終課題として各自の論文の研究計画書と文献メモを作成し、最終回に発表・質疑応答した。

オンライン対応として、今期より前半は読んだ論文をまとめるための「担当論文シート」を用意して、分析等を記入するのに使用してもらい、教師側も適宜コメントを入れて共有した。また後半は「研究計画フォーム」を用意し、これに各自の研究計画の段階を追って作業し、実際に研究計画書を書く際にも参考にした。これらシートの共有や課題の提出には blackboard を利用した。

結果と課題

(池袋)

履修生は正規学部生 1 名であったが、積極的に参加してくれたため、オンライン上でもスムーズにコミュニケーションをとりながら進めることができた。必修日本語で学んだ内容を忘れかけていることもあり、レポート・論文に必要な日本語表現の基礎的な部分も課題等の添削では適宜フォローした。

穴埋めや選択式などのテキストの問題には素早く解答できるが、自力で考えて書くとすると表現に未熟な部分が見られた。本人もそこを弱点と考えていたため、特に執筆に入ってからには内容・表現両面について検討を繰り返した。本人のふりかえりからは、段階をふんで研究を準備することや裏付けをして書くスキルが学べたとのことである。法律の専門的な内容であったので担当者も調べながら対応したが、内容面でさらに深めるためには本人が今後学部の先生や専門家等に相談する機会があればと思う。

今期より使用した「担当論文シート」「研究計画フォーム」は、いずれもオンライン下で作業の確認・共有ができ、学生にとっても作業を確実に残し、必要に応じて振り返ることができたため、有効であったと思う。

(新座)

今学期は、正規学部生と院生の 7 名の履修だった。2 年生も何人かいたため、全員が同じペースで進めていけるか心配したが、どの学生も熱心に課題に取り組んでいたもので、問題なく進められた。

前半の担当論文の分析では、分野ごとの論文の書き方を学んだが、史学やアート系の先行研究はモデルとした論文と異なる構成で書かれていたので、少し戸惑う学生も見られた。しかし、ピア活動で自分の選んだ担当論文を紹介するために、しっかりと読みこみきちんと説明できるよう努めていた。また、同時に論文でよく使われる表現も押さえたため、それを頼りに読むこともあったようである。これらの表現を学習したことで、レポートの作成や卒業論文を書く際にも活用できたと喜んでいて。

後半は研究計画書を実際に作成していったが、テーマはどの学生も、卒業論文や予備論文でテーマとする内容を選択し、先行研究を参照しながら作成していった。作成は項目ごとに段階的に進め、その都度、ピア活動として学生同士で内容を確認しあう時間を取るようし、

その後活動で話した内容を踏まえて、修正したものを教師が確認するようにした。ピア活動では、分野による論文の書き方の違いや異なる分野の研究内容を知ることで見聞が広がるよう、毎回異なるペアとなるようにした。最初は、内容に過不足があったり、内容の結束性が悪いものがあったりしたが、自分の書いた内容を説明することを通して再度内容を整理し、相手からの質問によって、新たな視点が得られたようである。最終的な発表は、研究計画書の作成過程において、課題をきちんと指示通りに進めていたか否かで、差が見られた。こちらの意図がうまく理解できているか、さらに丁寧に見ながら進めていく必要があると考える。

<キャリアの日本語A>

担当者名：<春学期>（池袋）高嶋幸太、（新座）井上玲子 <秋学期>（池袋）小森由里

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期（池袋）12 名、（新座）9 名、秋学期（池袋）11 名

使用教材：『立教就職ガイド 2020』『外国人留学生のための就活ガイド』

（参考資料『外国人留学生のための日本就職オールガイド』）

授業の方法

（池袋）

就職活動で重要な「履歴書・エントリーシートの執筆」「面接」「グループディスカッション」の対策を通して、日本語やコミュニケーションのスキル向上を図った。「履歴書・エントリーシート」では、クラスメートや教員から実際に執筆してきたものに対してフィードバックをもらい、推敲していくという活動を行った。「面接」「グループディスカッション」では、授業中に本番に寄せた流れで模擬選考を実施した。加えて、就職活動にかかわるゲストセッションも行った。

（新座）

授業では、『立教就職ガイド』、『外国人留学生のための就活ガイド』を中心に、他教材、就活支援サイトの情報などを基に、日本での就職活動に関する基本的な流れ、知識等を学びながら、実際に「自己 PR」や「志望動機」といったエントリーシートで出題される内容を分析し、書く練習をしたり、面接の練習を行ったりした。さらに、専門の方にお越しいただき、現在の日本企業の動向、就職状況などを講義していただいた。

<秋学期>

（池袋）

授業では、就職活動の概要を説明したうえで、自己分析や業界・企業分析をさせ、エントリーシート・履歴書を作成する練習、面接をする練習などを行い、就職活動に直結する実践的なスキルの向上を目指した。また、ゲストスピーカーをお招きし、留学生の就職状況や留学生を採用している企業の動向などについて講義をお願いした。毎回、自己分析シート、企

業研究シート、志望動機シートなど授業に関連した課題を提出させ、教師から日本語や内容についてフィードバックを行った。面接に関しては、ビジネスマナーについて説明し、個人面接、グループ面接の練習をした。期末テストではグループ面接を行い、就職に関連するトピックのレポートを提出させた。

結果と課題

<春学期>

(池袋)

12 週という限られた期間であったが、エントリーシートの作成から、面接やグループディスカッションなどの選考試験まで、盛りだくさんの内容であった。今期は、履修者が 12 名と大変多く、さまざまな学生から意見や考えを聞くことができたため、参考になる部分があったように思う。例えば、エントリーシートにおける内容や構成、面接での回答など、他者の成果物や受け応えなどを自身のものに取り入れるといった様子も見られた。

今期はすべてオンラインであったため、活動中の学生の様子は、それぞれのアウトブレイクルームに行かないと見られないという点があった。そのため、どうしても全体の様子がわかりづらいという点がデメリットだったように感じる。その対策として今後は、活動中のことに関して、あとで簡単に口頭か記述で報告してもらうなどのタスクも取り入れられたらと感じた。

(新座)

履修者は 9 名であったが、1 名は長期欠席が続いたため、8 名で授業を進めていった。8 名の学生は一度も授業を欠席することなく、一つ一つの課題を毎回しっかりとこなしていった。そのため、就職で必要とされるスキルを着実に身につけていった。履修者の大半が日本での就職を希望しており、このクラスの受講の目的が一致していたため、学生は同じ目標に向かって協働活動に取り組んでいった。

この授業では、自己分析や ES、志望動機など、文章を作成する課題が多かった。学期の前半は十分な自己分析ができておらず、ES や志望動機をどのように書いたらいいのかわからない学生が多かった。しかし、宿題として各自で考えた後、ペアやグループで確認し合う時間を何度も設けたことで、学生自身が書いた内容をさらに深めることができたようである。また、ゲストスピーカーの方のお話を伺うことによって、個々の就職活動の軸ができ、就職活動への意欲がさらに高まったようである。

学期の前半はなかなか発言が出ず、グループ活動においても課題が終われば、その後は話し合いを止めてしまうということもあった。今学期は初めてのオンライン授業だったこともあり、学生も対面授業とは違うオンラインスタイルでどのようにクラスメートと課題に取り組んだらいいのか戸惑っていたのかもしれない。オンラインにおける人間関係構築のための教師の支援の仕方を考えていきたい。

<秋学期>

(池袋)

学生全員が日本での就職を希望していることもあり、出席率が高く、毎回の課題もほとんどの学生がすべて期限を守り提出していた。しかし、学生の大半は控えめで、オンライン授業ということもあってか、授業中に質問することがなく、教師からの一方的な説明で終わってしまうことも多々あった。そこで、ブレイクアウトセッションを活用し、クラスを小グループに分けそこに教師が加わるという形式をとることで学生との接点を増やすよう心がけ、コース終盤により教師と学生とのやり取りがスムーズに行えるようになった。毎回の課題シートは、練習を重ねるにつれて日本語も修正され、内容も各目的に相応しいものとなった。一方、面接については、期末テストのグループ面接終了後に、学生から面接の方法について質問があり、練習時に教師からのフィードバックが十分ではなかったことがうかがわれた。オンライン授業のため、面接の受け方を個別にチェックすることは容易ではなかったが、面接の練習方法を工夫することを今後の課題としたい。

<キャリアの日本語B>

担当者名：<春学期> (池袋) 小森由里 <秋学期> (池袋) 井上玲子、(新座) 井上玲子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期 (池袋) 15名、秋学期 (池袋) 5名、(新座) 4名

使用教材：独自教材

授業の方法

<春学期>

(池袋)

就職試験 (SPI) の言語能力に関する分野から、同意語、反意語、慣用句など語彙力に関するテーマや文章読解に関するテーマなどを選び、練習問題を通して必要な知識や問題を解くためのストラテジーを身につけさせた。教材プリントの一部は宿題にし、毎回提出させた。また、授業冒頭には前回の授業内容に関わる小テストを行った。学期末には学習範囲を網羅した練習問題をさせて十分に身につけていない点を学生に認識させ復習を促し、その翌週に期末テストを実施した。

<秋学期>

就職試験 (SPI) の言語能力に関する分野から、同意語、反意語、慣用句など語彙力に関するテーマや文章読解に関するテーマなどを選び、練習問題を通して必要な知識や問題に対応するためのストラテジーを身につけさせた。授業冒頭には前回の授業内容に関わる小テストを行った。また、学期末には、学習範囲を網羅した模擬テストを行い、答え合わせを通して不十分な点を各学生に認識させ復習を促したうえで、その翌週に期末テストを実施した。

結果と課題

<春学期>

(池袋)

正規学部生 13 名、特外生 2 名が本コースを履修した。学生たちは真面目に授業に出席していた。オンライン授業のため、これまでほどは小テストに比重は置かず、代わりに宿題の分量を多くしたが、大半の学生が期日を守りきちんと宿題を提出した。予習も十分に行っており、スムーズに授業を進めることができた。期末テストでは、過去のテストの 2 倍近い数の問題を出題したが、総じて高得点だった。学期末にコース全体の感想を聞いたところ、就職試験対策に役に立った、国語文法や文学史などこれまで触れる機会がなかったものを学ぶことができたとのことだった。ただ、毎回教材プリントの練習問題の数が多いため、教師と学生間で答えをチェックすることに授業時間の大半が費やされることがほとんどだった。学生間のやり取りを組み込み、学生のより積極的な授業参加を促すクラス運営をすることを今後の課題としたい。

<秋学期>

(池袋)

今学期は、正規学部生 5 名が本コースを履修した。就職試験を意識している学生、日本語力の向上のために受講した学生と様々であった。5 名のうち欠席が少々目立つ学生が 1 名いたが、全体的に真面目に授業に出席し、復習予習も十分に行っていた。毎回の小テストにも準備をして臨んでいた。テストの範囲が広範囲だったにも関わらず、ほとんどの学生は冬休みに学習範囲をしっかりと復習したようで、模擬テストと期末テストの結果は非常に良好であった。

小テストと期末試験は Blackboard のテスト機能を使用し、オンラインテストを実施した。模擬テストでは、テスト後に解答の解説行うために、解答用紙 (Excel ファイル) に答えを入力して提出してもらったが、学生からは Blackboard のテスト機能のほうがやりやすいという意見があった。

学期末にコース全体の感想を聞いたところ、クラスで扱った内容については、難しい学習項目もあったが、就職活動に役立つ内容であったとのことである。今学期も春学期同様、Zoom を使用し、双方向での授業を行った。概ね問題はなかったが、ずっとパソコンを見ていると目が疲れてしまう時もあったと感想を述べた学生がいた。毎回ほぼオンラインで授業を行ったが、オフラインで行うタスクを入れてもよかったかもしれない。Zoom で授業を行う場合に、オンラインでもオフラインでも学生が積極的に授業に取り組めるよう、クラスの進め方を工夫していきたい。

(新座)

新座クラスも池袋クラス同様、Zoom を使用し、双方向での授業を行った。今学期は、正規学部生 4 名が履修した。4 名のうち欠席が少々目立つ学生が 1 名いたが、全体的に学習への意欲が高く、予習をしっかりと授業に臨んでいた。また、毎回の授業で積極的に質問が出

て、非常にいい雰囲気です授業を進めることができました。模擬テストは 1 名芳しい結果ではなかったが、期末試験に向けてしっかり復習したようで、期末テストの結果は総体的に良好だった。

学生の積極的な授業参加の姿勢もあって、特に問題なく授業を進めることができました。学期末にコース全体の感想を聞いたところ、勉強したことのない内容のものもあって勉強になったとのことであった。また、1 名の学生が特に授業内で積極的に質問したり、クラスメートへ声掛けを行ったりして、他の学生も自由に発言できる雰囲気を作ってくれた。クラスでたくさん発言することができたことや、質問に対して、教師からだけでなくクラスメートからも反応があり、チームで授業を進めていくことができたとのことであった。

今後の課題としては、池袋クラス同様、Zoom で授業を行う際に、オンラインでもオフラインでも学生が積極的に授業に取り組めるようにクラスの進め方を工夫することである。

<ビジネスのための口頭運用力 A>

担当者名：<春学期>（池袋）小森由里、（新座）井上玲子 <秋学期>（池袋）小松満帆

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期（池袋）19 名、（新座）春学期 4 名、秋学期（池袋）2 名

使用教材：独自教材

参考教材：（池袋・新座）『人を動かす！実践ビジネス日本語会話上級』、『BJT 模試と対策』
（新座）『新装版商談のための日本語』『新装版ビジネスのための日本語』
『にほんごで働く！ビジネス日本語 30 時間』

目標

ビジネスで必要とされる構文または談話レベルの日本語力（聴解・発話）を身につける。

授業の方法

<春学期>

（池袋）

ビジネス場面を想定した会話および聴解の練習を行った。会話練習としては、会議、電話応対、商談と大きく 3 つのテーマを取り上げ、各場面で用いられる表現や談話展開を指導した。テーマごとにロール・プレイのテストを行い、学生同士でロール・プレイの評価をさせた。また、宿題として状況にそった会話文を作成させ提出させた。聴解練習としては、ビジネス用語や表現に注意させながら情報を聴き取らせた。場面把握、状況把握、資料聴読解など、さまざまなタイプの問題を練習させ、コース最終日に期末テストを実施した。

（新座）

授業では、ビジネスシーンの「会議」「電話」「商談」という 3 つの場面を取り上げ、そこで必要とされる会話力、対応力を養成するよう進めた。各回の進め方は、まずその回で扱う

表現を確認し、ペアまたはグループで会話練習を行った。次に、ブランクのあるモデル会話に入る表現を考えてもらった後、ディクテーションを行い、その回のターゲット表現を再度確認した。そして、そのモデル会話を使って口頭練習を行った後、まとめとしてロール・プレイを行った。各場면을学習した後には、ロール・プレイテストを行い、テスト終了後にフィードバックを行った。さらに、並行してビジネス場面での聴解力をつけるため、ビジネス日本語能力テストの聴解問題も行った。

<秋学期>

(池袋)

ビジネス場면을想定した会話および聴解の練習を行った。会話練習では、「会議」「電話対応」「商談」というビジネスシーンで必要とされる敬語、ビジネス表現、ビジネスマナー等を学び、短い会話、長いやり取り、ロール・プレイという流れで、実際の場面に近づけて練習を行った。聴解練習では、語彙、表現等に注意を向け、必要な情報を的確に聞き取れるよう練習を行った。学期中3回ロール・プレイテストを行い、各ビジネスシーンで必要とされる用語や表現の確認を行い、フィードバックを行った。また、適宜ビジネス用語・表現の小テストも実施した。

結果と課題

<春学期>

(池袋)

正規学部生 18 名、特外生 1 名が本コースを履修した。真面目な学生ばかりで出席率は非常に高かった。また、宿題も 1 名を除き全員がすべての課題を提出した。聴解練習では、どのタイプの問題もよく聞き取れており、期末テストも総じて高得点だった。オンライン授業だったため、会話は、ブレイクアウトセッションでロール・プレイの練習をさせたが、対面ではないことから互いに声をかけづらく練習がスムーズに進まないペアやグループもあった。しかし、ロール・プレイのテストには十分に準備をして臨んでいた。テスト後に発話内容・表現の正確さ・発音・流暢さなどに関するコメントを記した評価シートを学生に個別に配布し注意点を指摘した。改善点を意識させたためか、テストの回を重ねるごとに学生の会話力が向上していくことが感じられた。ただ、学生数が多くオンラインだったため、個別に発音や話すスピードについて指導することが困難だった。オンラインでも個別指導ができる授業方法を工夫することを今後の課題としたい。

(新座)

履修者は正規学部生 2 名と大学院生 1 名、特外生 1 名の 4 名であった。小規模クラスであったため、クラスで扱う表現やモデル会話を確認した後、ロール・プレイの会話練習に十分な時間を取ることができた。今学期はオンライン形式の授業だったため、学生たちは Zoom の画面共有の機能を使って、お互いにメモを共有しながら時間を取って会話練習に取り組んでいた。また、課で扱う表現の確認を予習としたので、授業で扱う会話のイメージを事前

に持たせることができたようで、会話練習もスムーズに行うことができた。

課題としては、敬語に重点を置いた練習が少なかったことである。ロール・プレイでは課のターゲット表現や会話の流れを意識して発表できていた。敬語に関しても意識して使っていたが、敬語が正確に使えていなかったり、気を抜くと敬語が抜け落ちて、普段日常会話で使用している会話口調になってしまったりしていた。その都度FBをしたが、FBで終わってしまったのはもったいなかったように思う。敬語を定着させるために、FBを踏まえてもう一度発表する時間を設けてもよかったかもしれない。

＜秋学期＞

(池袋)

履修者の1名が既に日本企業で働いた経験を持っていたため、実際の場面を具体的に想定しながら練習に臨むことができた。また、学生からも、このような場合にはどのように対応すべきか、どのような表現を使うべきかという具体的な質問が多く出された。習った表現だけではなく、自分なりにバリエーションを増やしたり、表現を組み合わせたりするなどの工夫も見られ、より現実的な練習ができた。

課題としては、ビジネス用語や表現に集中すると、どうしても敬語が抜けてしまうなど、両方を適宜使っていくことに難しさがあった。また、言語表現以外のビジネスマナーや振る舞い方など、自国の文化と異なる部分については、とっさに適切な対応をするのが難しいという場面も見られた。会話練習に加え、ビジネスマナー等の振る舞いについても、よりフォローしていく必要がある。

＜ビジネスのための口頭運用力B＞

担当者名：＜春学期＞(池袋) 平山紫帆 ＜秋学期＞(池袋) 平山紫帆、(新座) (新座) 井上玲子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期(池袋) 8名、秋学期(池袋) 6名、(新座) 2名

使用教材：秋学期 BJT 対策問題集(語彙リスト)

目標

ビジネスで必要とされる談話レベルの日本語力を、ソリューション・デザイン型活動を通して身につける。

授業の方法

＜春学期＞

(池袋)

Zoomを使用し、双方向型で授業を行った。

まず、初回の授業で、ソリューション・デザイン(SD)型活動の狙いや意義、進め方を

説明した。2 週目以降は、学期を前半後半に分け、前半は「商品開発」、後半は「問題解決」に関するタスクを提示し、グループごとに SD 型活動を進めていった。

毎回の SD 型活動は、Zoom のブレイクアウトルームを使用した。教師は各班を移動しながら活動を見守り、注意すべき口頭表現を記録した。授業の最後には、班ごとに議事録の報告をさせるとともに、口頭表現のフィードバックを行った。

そして、案が固まった段階で、まず 1 回目のグループ発表を行った。そしてグループ同士でコメントをしあうコンサル活動を行い、その内容を踏まえて発表を修正し、最終プレゼンを行った。プレゼンは Zoom の録画機能を使用して録画した。プレゼン後にはピアフィードバックを行い、翌週、録画したものを一緒に見ながら教師がフィードバックを行った。

また、この活動とは別に、毎回、ビジネス語彙に関するプリントを宿題として課し、添削して個別に返却した。

<秋学期>

(池袋)

春学期と同様に行った。

(新座)

Zoom を使用し、双方向型で授業を行った。

まず、初回の授業で、ソリューション・デザイン (SD) 型活動の狙いや意義、進め方を説明した。2 週目以降は、学期を前半後半に分け、前半は「商品開発」、後半は「問題解決」に関するタスクを提示し、SD 型活動を進めていった。

毎回の SD 型活動は、Zoom のブレイクアウトルームを使用した。教師は学生のブレイクアウトルームを訪問し、活動を見守り、注意すべき口頭表現を説明した。授業の最後には、学生間で話し合った内容を口頭で報告してもらった。また、時には議事録での報告の提出も義務付けた。

そして、案が固まった段階で、まず 1 回目のグループ発表を行った。前半の「商品開発」では今学期担当している他クラスの学生数名と教育講師の先生にお越しいただき、学生の発表を聞いてもらった。発表後は、ビジターを交えてコメントし合うコンサル活動を行い、その内容を踏まえて発表を修正し、最終プレゼンを行った。後半の「問題解決」では学生が個々での発表を希望したため、1 回目の発表後にお互いにコメントをし合い、その内容を踏まえて発表を修正し、最終プレゼンを行った。プレゼンは Zoom の録画機能を使用して録画した。プレゼン後には録画したものを一緒に見ながらピアフィードバックや自己評価を行い、教師からもフィードバックを行った。

また、この活動とは別に、毎回、ビジネス語彙に関するプリントを宿題として課し、添削して個別に返却した。

結果と課題

<春学期>

(池袋)

今学期は正規学部生が 6 名、大学院生が 1 名、特外生が 1 名履修した。対面で相談できない状況でも、適宜画面を共有したりしながら、お互いに協力し合って活動を進めていた。今学期は授業回数が少なかったために活動期間も短くなってしまったが、そうした状況の中でも、学生たちは毎回大変意欲的に活動に取り組み、興味深いプレゼンテーションを行っていた。

この授業は、オンラインでも十分に対応できる内容や形態だと思われるが、それでもやはりオンラインゆえの難しさを感じる場面もあった。学生たちの通信環境上の問題もあり、会議は顔を映さずに音声だけで行われることが多かったが、音声のみだと、発言をしていないときの様子が他の班員に伝わりづらい。そのため、発言の多い学生が、発言の少ない学生の意図が読めず、困惑することが度々あった。あいづちやコメントなどの聞き手としての反応をいつも以上に積極的に行うようにアドバイスをしたが、音声による話し合いで、いかに聞き手としての役割を果たすかというところをもっと学生たちに意識させる必要があると感じた。後期の課題にしたい。

<秋学期>

(池袋)

今学期は学習意欲と向上心の高い学生が多かった。多くの学生が、毎回のグループ活動に熱心に参加し、宿題も与えられた課題をただこなすというのではなく、ビジネスシーンを想定して例文を作るなど、自分なりの工夫をしながら取り組んでいた。また、毎回の発表後には、教師が各学生に口頭表現や発音等の個別のフィードバックも行ったが、指摘した点が次の発表時に修正されていたり、改善しようとする意識が見えたりする学生が非常に多かった。

その一方で、グループ活動をする中では問題も起きた。まず、様々な意見が出た場合にグループ内での意見のすり合わせがなかなかできなかったり、相手の発言の意図を誤解したりして、学生たちが次第にヒートアップして感情的になってしまうことが度々あった。遠隔会議では、たとえ相手の映像が見えていたとしても相手の発言の真意が読みにくく、誤解が生まれやすいので、丁寧な説明や相手に配慮した反論の仕方などが対面時以上に求められると思われる。今後はその点にもっと学生たちの意識を向けさせていきたい、

また、今学期はインターネット環境等の問題で授業に参加できない学生がいて、グループのメンバーが揃わないということがしばしば起きた。その日の話し合いを進めるという点でも、その後のメンバー間の意思疎通という点でも、とりわけその日に出席した学生たちには負担が大きかったようである。グループワークをする中で、一部の学生に大きな負担がかからないように進め方や対応策を検討していきたい。

(新座)

履修者が正規学部生 1 名と大学院生 1 名の 2 名であったため、学生間の話し合いは勿論のこと、教師が入ってのコメントの時間も十分にとることができた。2 名は非常に熱心で協力的な学生であったため、SD 活動では活発な話し合いがなされ、多くの興味深いアイデア

が出た。後半の「問題解決」のタスクでは発表したい内容が個々で違っていたため、個人での発表となったが、個人の意見に偏らないように、個々で考えた内容についてもう 1 名がコメントをする時間を設け、最終発表の準備を行った。学生たちが協力し合い、積極的に授業に参加してくれたため、授業の進め方については特に問題はなかったが、履修者が 2 名しかいなかったため、2 名の学生が気づいていない視点でのコメントを聞く機会が少なかったように思う。前半ではビジターに来ていただき、コメントし合う活動ができたが、後半の「問題解決」タスクでもビジターを交えての活動を入れてもよかったかもしれない。学生からは特に要望はなかったが、学生の活動の様子などをしっかり見ながら、臨機応変に対応していきたい。

<ビジネスメールと文書>

担当者名：<春学期>（池袋）谷 啓子 <秋学期>（池袋）谷 啓子、（新座）小林友美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期（池袋）11 名、秋学期（池袋）10 名、（新座）3 名

使用教材：村野節子、山辺真理子、向山陽子（2015）『タスクで学ぶ日本語ビジネスメール・ビジネス文書 適切にメッセージを伝える力の養成をめざして』スリーエーネットワーク

参考教材：川島冽（2008）『5 分で送信 ビジネスメール速書き文例集』すばる舎

目標

日本でのビジネスに必要な日本語能力（読解、作文）について学び、使えるようになる。

授業の方法

<春学期>

（池袋）

本授業は、ビジネス場面で必要とされる書く作業（「依頼」「お詫び」といったビジネスメールや「稟議書」などの文書）はどのようなものか学び、実際に書き、それに対してフィードバックする方法で進めた。今期は全 12 回、ZOOM による双方向オンライン形式であった。オンラインという特性上、授業内課題の作業時間や提出方法等に配慮する必要がある、2～3 回目から以下の流れで落ち着いた。

各回の構成は、①前回の課題へのフィードバックと関連するフォロー、②メイン教材の新しい課の説明→「役に立つ表現」「練習問題」、③課題説明→解散→各自課題作業、という流れであった。

授業は毎週木曜日で、課題〆切は翌週火曜とした。課題は毎回ビジネスメール 2 通、またはメール 1 通+文書 1 である。提出は立教 blackboard に up を基本としたが、時には作成した文書を担当教師にメール添付で送付し、そのメール文面を考えることも課題とした。提出された課題には個別に赤入れやコメントをして次回授業前日までに返却、授業はその全体

フィードバックからスタートした。

フィードバックでは共通して多かった間違いを PowerPoint で提示しながら補足説明を行った。また、ビジネス表現に慣れてきた第 5 回課題からは各学生作成のものから適切に書けている部分を 1 人 1 カ所取り出し、全体に共有するようにした。同時期より課題の赤入れの際にも個別に良い点、癖になっている間違いをコメントするようにした。

学習する項目や順番はメインの教材の流れに沿ったが、敬語やメール事例などは他教材を利用したり、実物を見せたりすることで、よりビジネス現場へのイメージを高めてもらうようにした。例えば稟議書の課では、どのような場合に稟議書を書くのか、書く時の注意事項、実物はどのような形式があるのかなどを補足した。教材は紙ベースであるが、近年現場ではクラウドベースのグループウェアを利用した稟議・決済も多いため、それらの実物も紹介した。

なお、前半のフィードバックや後半の新規項目の説明や練習では極力学生を指名して発言してもらい、オンライン故に受け身のままにならないよう心掛けた。

<秋学期>

今期は全 14 回、ZOOM による双方向オンライン形式であった。本授業は、教材に沿って、ビジネスメールとビジネス文書の読み方、書き方について学び、実際に作成するという方法で進めた。各回は、①前回の課題へのフィードバックと関連するフォロー、②メイン教材の新しい課の説明→「役に立つ表現」「練習問題」、③課題説明→解散→各自課題作業、という流れであった。宿題は期日までに blackboard やメールで提出するよう指示し、添削、コメントを入れて次回の授業で返却した。フィードバックは、代表者の宿題を画面共有し、効果的に書けている部分や改善点について確認し、改善方法についても全体で考えた。また、共有した課題点を示し、補足説明を行った。活動は、適宜ペア・グループワークを取り入れ、学生同士のやり取りする機会も作るよう心掛けた。

結果と課題

<春学期>

(池袋)

履修者は学部生 9 名、特外生 2 名であった。就職活動中の 4 年生と、将来日本での就職を視野に入れた学生たちで目的意識がはっきりしており、初めてのオンラインで他科目も忙しい中、非常に真面目に取り組んでいた。分からないことはマイクを使って全体に、また個別にメールで質問をするなど積極的な学生が多かった。

スタートして最初の数回は基本的な間違いが散見され(例：前株と後株の間違い、先方の社名や部署を略してしまう)、敬語の種類も区別がつかない学生が多かったが、回を重ねるごとに上達した。個人差はあるが、後半には修正せずにビジネスメールとして通用するレベルのものが見られるようになった。全 12 回、様々な立場になってメールや文書を作成した成果といえるだろう。相手との関係性やビジネスの段階を考慮した上で、敬語や伝える内容

を微調整するのは最後まで難しいようであったが、その必要性和難しさは認識できたと思う。

授業方法としての課題は、ピアチェックなど学生同士のやり取りが十分にできなかったことである。授業内で課題を作成すると作業時間に差が出たこと（オンラインだと個々の作業状況を教師が把握しにくい）、またそれを全員で共有するためにワークセッション必要になるため、今期は作業時間を残して解散とした。4限目で、朝からオンライン授業を受けている学生には疲れが見える時間帯でもあり、少し早めの終了の方が学生はほっとした表情だった。

第6回で次の課題の説明後、課題で使えそうな表現を数人で話し合ってもらいグループワークを取り入れてみたところ、短時間なら負担が少ないようだったので次期にはこのような活動の機会を増やしたいと思う。

<秋学期>

(池袋)

秋学期、池袋(木)3限の履修者は10名、内訳は学部2年生が6名、就職活動中の学生も含む4年生が4名であった。アルバイト等でビジネスメールに馴染みがある学生もいたが、多くは「敬語に自信がないから」「就職活動で役立てたいから」を履修理由に挙げており、最初の数回はビジネスメールのマナーや敬語に慣れず、課題に時間がかかっているようであった。毎回の課題には細かくコメントを入れて返却したため、きちんと見直しをしている学生は前期同様、回を重ねるにつれ、基本的な敬語やビジネスメールの流れ、ビジネスに必要な配慮が身についていった。

今期は授業で課題のフィードバックをする際、1名の課題をその場でやりとりしながら修正して見せ、その後ペアでお互いの提出済課題をコメントし合う活動を複数回取り入れた。仲間から学び、一方向になりがちなオンライン授業にめりはりがつく良い機会になったと思う。

全体としては学生の解答例を参照しながらのフィードバックや質問への解説により時間をかけた。学生によっては新規課題に取り組むにあたっての注意事項やヒントをより明確に出した方が取り組みやすかったのではと思われる。限られた時間であるが、次期はこの点についても配慮していきたい。

(新座)

新座クラスの履修者は3名であった。内1名は、日本での就職を希望している学生であり、その他は、日本での就職は希望していないものの、メールの書き方や待遇表現に苦手意識があり、それらを克服するために履修した学生であった。日本語力が高く、アルバイト経験がある学生達であったが、ビジネスメールや文書の作成は未経験であった。そのため、学期前半は、状況把握や表現の選択に苦戦していたようであった。学期後半になると、要領を得て、スムーズにメールや文書が作成できるようになっていった。本クラスは少人数であったため、毎回の授業でペアワークを実施する時間が取れた点、個別フィードバックができた

点はよかった。しかしながら、同じ間違いを繰り返すなど注意力に欠ける学生もいた。また、話し合いでは、消極的な場面がしばしば見受けられた点も課題として挙げられる。引き続き、学生間のコミュニケーションが取れる活動を積極的に取り入れ、今後は、活動が活性化するような工夫を考えていきたい。

2020 年度 Japanese Language and Japanese Culture A、B、Japanese Language and Japanese Society A、B 授業記録

コースの概要

すべての特別外国人学生を履修対象とし、履修のための日本語レベルは問わない。日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学ぶ。

<Japanese Language and Japanese Culture A>

担当者名:<春学期> 数野恵理

授業コマ数: 週 1 コマ

履修者数: 春学期 13 名

使用教材: 独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、日本語および日本文化への理解を深めることを目的とする。

授業の方法

授業は英語と簡単な日本語で行われる。講義だけでなく、学生同士のディスカッションや調査、発表なども頻繁に行った。トピックとして扱ったのは、日本の地理と観光、アニメ、生活習慣、日本の踊り、日本のお笑い、日本の祭りと踊り、日本語の通訳などである。日本語の通訳についてはゲストスピーカーを招いて講演を聞き、ディスカッションを行った。学期末には、日本人学生にインタビューをして、プレゼンテーションをしてレポートを書いた。

結果と課題

今年度はオンライン授業となり、Zoom で授業を行った。オンラインという環境を生かし、授業時間中に各自担当のビデオを見た後でお互いに説明し合うという活動をする、キッチンで和食の作り方を見せるといった活動も取り入れることができた。また、ブレイクアウトルームを利用して、通常学期のように毎回グループディスカッションも行った。その他、ボランティアの日本人学生を招き、グループ内でインタビューをしたり意見交換をしたりする機会も設けた。せっかくの留學生活だが、なかなか日本人学生と接する機会がないため、

日本人学生を招いてのインタビューやディスカッションは特に好評であった。ボランティア学生は英語が得意な学生も多かったが、英語が苦手な学生がいた場合には、日本語初中級レベルの留学生を含むグループに参加してもらい日本語でも話せるようにした。しかし、留学生の日本語レベルも様々でグループの数も多かったこともあり、予定していた学生が参加できなくなった場合に、ブレイクアウトルームで素早く日本語力や英語力を考慮してグループを作り直すのは大変であった。よりスムーズな運営ができるよう工夫していきたい。

<Japanese Language and Japanese Culture B>

担当者名:<秋学期> 小松満帆

授業コマ数: 週 1 コマ

履修者数: 秋学期 3 名

使用教材: 独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、日本語および日本文化への理解を深めることを目的とする。

授業の方法

日本の歴史、防災、スポーツ、冠婚葬祭、ジェンダー問題、音楽、労働、お正月、漫画とアニメというテーマで、日本の文化・歴史的背景を学んだ。学生によるブレインストーミングを経て、講義を行い、テーマについてのディスカッションを行った。また、学期中、日本人学生を招いてのディスカッションを3回実施した。学期途中でショートレポートを課し、学期末には、授業で扱ったテーマについて、自身の経験や自国・地域の状況と比較しながら考察するレポートと、その内容について発表するプレゼンテーションを課した。なお、授業は、学生の日本語レベルに合わせ、英語のスライドを用いつつ、主に日本語で行った。

結果と課題

今学期の履修者は3名と少なかったが、毎回のテーマに真摯に向き合い、深く考察する姿勢が見られた。学期末に学生に興味を持ったテーマを聞いたところ、日本の歴史と回答した学生が多く、これまで長く日本語を学んできたにも関わらず、日本の歴史をほとんど知らなかったという気づきが得られた、と話していた。また、履修者数が少なかったことで、学生一人一人が自分の意見を述べる時間が十分に取れ、互いにとってよい刺激になったようである。また、キャンパスに行けない、あるいは来日すらできていない学生もいるという状況が続く中で、日本人学生たちとディスカッションを行ったことも、とても有意義な活動となった。一方で、履修者が全員アジア出身の学生だったため、多様な文化を広く比較することが難しかった。学生は自身の国や文化と日本との類似点・相違点を見ることで、日本への理解

を深めることはできたが、広い視野でテーマを捉える機会があれば、より学びが深まっただろう。

<Japanese Language and Japanese Society A>

担当者名：＜春学期＞小森由里

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 13 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する社会的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、日本語および日本社会への理解を深めることを目的とする。

授業の方法

日本語および日本社会に関するテーマを毎回 1 つずつ取り上げた。地域方言、社会方言、名前の変遷、ボディーランゲージ、日本語の表記体系、日本の教育制度などである。授業は、冒頭にそれぞれのテーマについて 10 問ほどの質問を学生に投げかけ考えさせた後、講義を行いながら質問の答えを示すという形式で進めていった。授業後半には、各テーマについて日本と学生の出身国との比較についてグループでディスカッションさせ、その結果を発表させるなどして、学生の積極的な参加を促した。期末レポートは、授業で扱った「地域方言」「名前(ファーストネーム)」「若者言葉」「男性語・女性語」「キャンパス言葉」の中からテーマを 1 つ選択させた。また、ビジターセッションを設けて日本人学生を招き、レポートのリサーチクエストンについてインタビュー調査をさせた。期末レポートについては学期末の 2 クラスで一人ずつ発表させた。

結果と課題

13 名の学生が履修したが、出席率が高く真面目な学生ばかりであった。毎回提出させたリアクションペーパーから、いずれのテーマにも熱心に取り組んでいることが読み取れた。期末レポートは、日本人を対象にするだけではなく、出身国の友人や知人を対象に調査をし、結果を比較するなどして分析を深めているものが複数みられた。これまでよりも履修者数が少ないため、期末レポートの発表にも時間をかけたり質疑応答を取り入れたりすることができた。コースの振り返りでは、オンライン授業のため書道や茶道が体験できず残念だったというコメントがあった。一方で、ブレイクアウトセッションでさまざまな国の学生たちと意見交換できたこと、ビジターセッションで日本人学生と交流できたことが興味深かったという声も聞かれた。オンライン授業であっても、学生間の交流を深め主体的な授業参加が促せるよう授業方法を工夫していきたい。

<Japanese Language and Japanese Society B>

担当者名：＜秋学期＞小森由里

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 3 名

使用教材：独自教材

授業の方法

授業では、日本語と日本社会に関するテーマを毎回 1 つずつ取り上げた。テーマは、人称詞、敬語、色・動物のイメージ、日本の食生活、衣生活、住生活、日本の宗教、日本の社会事情などである。毎回テーマについて講義をしたうえで、クラスでディスカッションをして学生の積極的な参加を促した。オンライン授業のためキャンパスでの日本人学生との接触が限られていることを考慮し、日本人学生にもクラスに 3 回参加してもらった。敬語について講義をした翌週に、日本人学生にインタビューして敬語に関する意識調査を行った。短歌・俳句のクラスでは日本人学生に協力してもらい短歌・俳句を作るという体験学習も行った。また、年末年始の過ごし方について、日本人学生と意見交換するという活動も取り入れた。さらに、ゲストスピーカーとして神職を招き、神道についての講義をお願いした。期末レポートでは、色や動物のイメージについて学生の母語と日本語とを比較すること、学生の母語の家族内呼称体系と日本語の体系とを比較すること、敬語について日本人を対象に意識調査を行うことという 3 つの中から課題を選択させた。

結果と課題

学生数 3 名という小さいクラスであったが、全員出席率が高くディスカッションや活動に積極的であった。学生の日本語は中級レベルで 3 名とも日本語学習に熱心だったため、講義用のスライドでは英語を用いたが、説明はほとんど日本語で行い学生たちも日本語でディスカッションを行った。毎回提出させたリアクションペーパーから、学生がどのトピックにも興味を持って取り組んでいたことが読み取れたが、特に日本人学生との交流を楽しんでいたことがうかがわれた。最終クラスで行ったコースの振り返りでは、日本人学生の助けを借りながら短歌・俳句を作成したことが印象的だったことに加え、色・動物のイメージ、人称詞、日本の宗教、日本の食生活が特に興味深かったという意見があった。日本の社会事情もテーマの一つとして取り上げたが、今学期は社会面に興味を持っている学生が多く、社会事情の各トピックをもっと深く知りたかったという声が上がった。社会事情をさらに掘り下げてクラスで扱うことを今後の課題としたい。

2020 年度 演習 授業記録

コースの概要

演習科目は、初級、初中級レベルの日本語を用いて、内容を学ぶ科目であり、演習 1 は J2

レベル、演習 2 は J3 レベル、演習 3 は J4 及び J5 レベルの学生を対象とするものである。演習科目は、いわゆる語学の科目ではなく、学生が身につけているレベルの日本語を「道具」として用いながら、演習 1 では「アニメ／日本の歌」、演習 2 では「映画／まんが」、演習 3 では「小説／詩」について内容理解を目指す科目である。

演習 1～3 の詳細は以下の通りである。

＜演習 1＞

担当者名：＜春学期＞小林友美 ＜秋学期＞開講せず

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 2 名、秋学期 開講せず

使用教材：独自教材

コースの目標

日本のアニメや歌を取り上げ、それらの作品を通して、現代日本の社会や文化、日本人の考え方などについての理解を深める。

授業の方法

アニメを通して、学校(教育制度、お弁当、掃除、部活動、先輩後輩、受験、防災訓練)、住まい、就職活動、結婚、年中行事などについて学び、自国の文化・社会との相違点や共通点についてのディスカッションや発表を実施した。また、日本の歌を聞き、歌詞の理解やディクテーションもした。期末は、学生ボランティアを呼び、ビジターセッションを実施した。各自のテーマでインタビュー活動を行い、その結果をレポートにまとめて口頭発表させた。主な使用言語は J2 レベルの簡単な日本語とし、必要に応じて英語も使用した。

結果と課題

＜春学期＞

履修者が 2 名だったこともあり、学生の理解に合わせて授業を進めることができた。クラスでは期末発表以外に、3 回のミニ発表を実施した。発表では、調べたこと、自国と日本の文化、自分の意見をまとめてもらい、質疑応答の時間も設けた。2 名ともオリジナリティある PPT を作成することができた点もよかった。

異なる文化背景を持つ学生だったこともあり、活発に意見交換を行うことができた。日本語力に差があったため、簡単な日本語と英語を用いたが、1 名、英語に頼ってしまう場面が多々あった。そのため、レベル差の対応については今後の課題としたい。また、今学期は通常の学期より 2 回少なかったため、ビジターセッションが 1 回のみとなった。次回は、学生ボランティアとのセッションを複数回導入し、教師以外の日本人との交流の中で、日本社会や文化をより深く学ぶ機会を設けたい。

＜演習 2＞

担当者名：＜春学期＞開講せず ＜秋学期＞開講せず

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 開講せず、秋学期 開講せず

使用教材：独自教材

＜演習 3＞

担当者名：＜春学期＞数野恵理 ＜秋学期＞開講せず

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 6 名、秋学期 開講せず

使用教材：『レベル別日本語多読ライブラリー にほんご よむよむ文庫』アスク出版、
NHK for school 「おはなしのくに」など

コースの目標

プレイスメントテストで J4、J5 レベルにプレイスされた学生を対象とする。これまでに習った日本語の語彙や文型を用いて、できる限り日本語で授業を進める。参加者が「道具」として日本語を用いることによって、授業を理解し、日本の小説や詩についての理解を深めることを目指す。

授業の方法

クラスでは短編小説、詩、俳句、川柳、短歌を扱った。毎回、小説を読んで印象に残ったシーンを選んでくこととディスカッションの質問を考えてくことを宿題とした。授業では精読はせず、担当者があらすじについて発表をした後で、内容や感想について話した。

今学期は図書館で図書を借りて読ませることが難しかったため、オンラインで公開されている教材を扱った。学期開始時はオンラインで公開されているもので適したレベルの読み物ものが見つからず、NHK for school の「おはなしのくに」にある「かぐやひめ」、「つるのおんがえし」などの昔話を読んでいたが、アスク出版の『レベル別日本語多読ライブラリー にほんご よむよむ文庫』のシリーズの一部がオンラインで無償公開されたので、学期途中からはこの中の「蜘蛛の糸」、「鼻」（芥川龍之介）、「走れメロス」（太宰治）を読んだ。その他、オンラインで公開されている「えんとつの町のプペル」（にしのあきひろ）の絵本なども扱った。

学期末にはオンラインで公開されている多読教材のほか、オンラインで公開されているショートショートなどを紹介し、そこから各自好きなものを選んで読んだ。最後にビブリオバトルで本の紹介をして、レポートも提出させた。

結果と課題

今学期はオンライン授業となり、ZOOM を用いて授業を行った。発表担当者が画面共有でパワーポイントを見せて発表し、その後全員でディスカッションをするというスタイルである。少人数だったのでディスカッションは全員で行ったが、時間に余裕のあるときは、小グループに分かれて、音読や内容確認をした。また、今学期は各クラスの課題が多くなりそうだったので、クラス内で翌週の読み物の準備をする時間を少しでもとるようにした。

学生は6名全員、非常に学習意欲が高く、毎回きちんと宿題をしてきた。ネットの接続がやや不安定でカメラをオフにしている学生が1名いたが、その学生も含め全員が毎回活発に発言をした。数年前に担当した時は、印象的なシーンを書いてくることだけを宿題にしていたが、今回は一人二つディスカッションの質問も準備させたところ、ディスカッションがさらに活発で、面白い内容となった。「蜘蛛の糸」、「鼻」などの文学作品のディスカッションが興味深いものになるのは期待通りであったが、昔話についても各国の昔話の共通点や相違点などが話し合われ、興味深い内容となった。

今学期はオンライン授業となり、教材選びに苦労したが、『レベル別日本語多読ライブラリー にほんご よむよむ文庫』の無償公開のおかげもあり、質を保つことができた。一学期に様々な短編小説を読む場合、すべての本を購入させるのも難しいため、オンラインで公開されていて、かつ、このレベルの学生が読むのに適したものを探していくことが今後の課題である。

2020 年度 総合日本語 4～6 授業記録

コースの概要

J4～J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

<総合日本語 4-6A>

担当者名：小林友美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 10 名

使用教材：独自教材

授業の方法

授業は、読解を軸に、内容確認、グループ・全体ディスカッション、個人・グループ発表を行った。扱ったテーマは、「観光地」「祭り」の2つである。読解教材は、内容は同じであるが、学生の各レベルに合わせたものを準備し、授業外で読んでくることを宿題とした。また、読解で扱ったテーマに関する作文の宿題を2回出した。毎回の授業には TA が参加し、ディスカッション、作文のフィードバック、学生のレベル差への対応など、授業活動に積極

的に関わった。

結果と課題

春学期の履修者は J5 の学生 9 名と J6 の学生 1 名で構成されていた。そのため、レベル差が比較的少ないクラスとなった。発表の語彙リスト作成は、学生からの提案であった。「観光地」、「祭り」とそれぞれ用語や難易度が高い表現があったため、語彙リストは聴衆の理解の助けとなり、効果的であった。クラス仲が良好であり、自分の意見を明確に話せる学生が多かったので、グループセッションでは活発なやりとりが行えたようだ。しかしながら、全体の質疑応答の時間になると、消極的になることがあり、こちらが指名して進める場面が多々あった。そのため、オンライン授業での発言しやすい雰囲気作りを今後の課題としたい。作文の書き直しは、添削とコメント付きのファイルを返却するだけでなく、個別フィードバックも実施した。普段なかなか話せない学生とも話すことができ、理解確認もできたため、有益な活動となった。オンライン授業となり、教師に気軽に質問したり、やりとりをしたりする時間が制約されているため、来学期もこのような時間を適宜設け、丁寧なケアができるよう心掛けたい。

<総合日本語 4-6B>

担当者名:佐々木藍子

授業コマ数: 週 1 コマ

履修者数: 春学期 6 名

使用教材: 独自教材

授業の方法

本授業は、J4 から J6 の学生を対象とした授業で、日常生活で使用する日本語はもとより、大学での講義や学習にも適応できるよう日本語のレベルを高めることを目指して進めた。授業では、日本文化に関する 3 つのテーマを取り上げ、それらに関連した語彙や文法を学び、クラスメートとディスカッションをすることで、日本語の力を養うようにした。取り扱ったテーマは (1) IT リテラシー、(2) 若者の消費、(3) 育メンの 3 つで、日本文化・日本社会についての知識も踏まえ学習した。

1 つのテーマの具体的な進め方としては、①まず各テーマに関する動画を視聴した。そして、動画に出てくる語彙がまとめられた「ことばリスト」を配布し、それを調べてくる課題を出した。②テーマに関するウォーミングアップを行ったあとで、「ことばリスト」を確認したら、テーマで扱う動画を再度視聴した。動画を見る際は、メモを取るようにした。メモした内容を小グループでシェアし、その後、クラス全体で動画の流れを確認した。1 つのテーマにつき、動画は前半と後半の 2 つに分けられているので、ここまでの作業を 2 週繰り返す。③動画での学習が終わったら、ディスカッションを行った。ディスカッションは、2

つのグループに分けて行った。この時、司会と記録係を決めてから始め、ディスカッションの後には、記録係がディスカッションで出た意見をまとめて内容を発表した。この流れで3つのテーマを取り扱った。それぞれのテーマが終了したら、テーマ内で学習した語彙や表現を確認するための復習プリントを課題として出した。さらに、テーマ（2）では、作文の課題も出した。最終課題では、授業で扱ったテーマに関して、一番興味を持つものについて、それぞれの視点でプレゼンテーションを行った。

結果と課題

今回はオンライン授業に切り替わったことで、受講生の増加が見込まれたが、実際は6名とそこまで多くなかった。少人数であったため、一人一人に対し、丁寧に対応できたと思う。日本語学習に意欲的な学生が多かったこともあり、欠席はあまりなく、提出物もほとんど期限内に提出していた。また、日本語のレベルはJ5が5名、J6が1名とあまり差がなかったため、スムーズに進行でき、クラスの雰囲気もととても良かった。グループでの話し合いも、それぞれが積極的に行っており、日本文化だけでなく、クラスメートや自分の国の文化についても考えることができたので、知識を深め、広げることができたのではないかなと思う。

初回の授業では大学で指定されていた Google Meet を使用したが、この授業では、動画を見た後にその内容をペアで確認したり、小グループで話し合ったりする時間を設けていたため、2回目の授業からは、グループごとの小部屋に分けられるブレイクアウトセッション機能のある Zoom を使用して行った。初のオンライン授業で授業開始時期は学生たちにも多少戸惑いもあるようだったが、授業で使用した Google Meet や Zoom の使い方については、特に問題はなかった。

今回、教材の配布や課題の提出は Blackboard を活用して行ったが、教材がうまくダウンロードできていなかったり、アップロードする課題のファイルを間違えたりする学生もいた。また、添削した復習プリントや作文などの課題は個別に大学のメールアドレスに送ったが、大学のメールはあまり確認しておらず、あとから連絡してくる学生いたので、この点について、今後改善していきたい。

<総合日本語 4-6C>

担当者名：小林友美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 2 名

使用教材：独自教材

授業の方法

授業は、読解教材を軸に、内容確認、ディスカッション、発表、作文を行った。扱ったテーマは、「若者」と「日本の外国人」である。読解教材は、J4、J5、J6 それぞれのレベルに

合ったものを用意し、語彙リストを添付した。作文は、読み物のテーマに沿ったものを宿題として2回出した。また、毎回の授業にはTAが参加し、授業活動に積極的に関わった。

結果と課題

履修者はJ5の2名であった。同じレベルの学生であったが、内1名は会話を苦手とする学生であり、学期開始時は多少レベル差を感じた。少人数で和気藹々とした雰囲気であったため、会話を苦手とする学生の発話量が自然と増え、学期後半には口頭表現能力の向上を感じることができた。発表では、TAの発表を含めて評価、コメントを記入してもらったが、お互いから学び合う姿勢が窺えた点もよかった。また、最終プレゼンテーションでは、コロナ禍であったにもかかわらず、各自工夫しながらインタビュー調査を行い、オリジナリティある内容の発表ができた。しかしながら、作文では、分かりやすい表現、構成を重視したためか、内容の充実さに欠けたものがあつた。そのため、今後は、作文導入時の問題提起の仕方やディスカッションの進め方を工夫していきたい。

<総合日本語4-6D>

担当者名：<秋学期>開講せず

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期 開講せず

使用教材：独自教材

2020年度 漢字 授業記録

コースの概要

どのレベルの学生でも履修することができるクラスである。学生は自分でレベルを選択し、学期中2回ある立教漢字検定に向けて、その範囲の漢字語彙を学習する。

担当者名：<春学期>小林友美、<秋学期>佐々木藍子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期 29名、秋学期 5名

使用教材：独自教材、立教漢字検定テキスト

目標

履修のための日本語レベルは問わず、全レベルの学生が履修することができる。漢字語彙の拡充を目的として、漢字の意味、漢字の語彙の使い方に関する知識を深めるとともに、読んだり書いたりする力をつける。

授業の方法

立教漢字検定のテキストを用いて、各学生が決めたレベル、分野に沿って学習を行った。2020年度は初級 B1～B6、中級 I-A～I-G、上級 A-A～A-G の全レベルを対象とした。授業ではテキストに沿ったワークシートを中心に、個別学習を行った。また、毎回、毎回、身の回りにある漢字を生活の中で見つけて発表する「漢字発見」の活動を行い、それに加え、春学期は、好きな漢字の意味、用法、理由などを PPT にまとめて発表する「好きな漢字発表」を、秋学期は、漢字のディクテーションを実施した。

結果と課題

＜春学期＞

春学期は履修者が 29 名となり、J0 から J8 まで様々なレベルの学生がいた。12 回のオンライン授業となったため、個別学習の他に、全体での学習時間を増やすよう活動内容を一部変更した。クイズの代わりに、「好きな漢字発表」を課したが、漢字の意味、用法、好きな理由のみならず、その漢字の由来、歴史、漢字に纏わるエピソードや文学作品、調査結果など、各自の視点で様々なことを紹介することができた。オリジナリティのある PPT は、写真や絵で漢字の成り立ちを説明したり、文学作品の一説を引用して紹介したりするなど、聴衆の理解を助けた。本活動は、今学期が初めての試みであったが、学生からは、「クラスメートが紹介してくれた漢字に興味を持った。」、「語彙、表現が増えた」、「意味だけではなく、どんな時どう使うかが分かった」などと、肯定的な意見を得ることができた。漢字検定が中止になったが、このような活動を適宜取り入れ、今後も漢字学習へのモチベーションを保てるような工夫をしていきたい。授業での初級の学生への配慮として、教師も学生もスライドに英訳を付けたり、日本語の発表後に簡単に英訳をするなどした。「漢字発見」や「漢字の名前を考えよう」のグループシェアでは、グループ内で初級の学生をサポートする姿も見受けられ、協力的な雰囲気だったこともよかった点である。しかしながら、ワークシートの未提出が続く学生が数名いたことは残念であった。教室とは異なり、全員の個別学習の様子を把握することが困難であったため、当該学生には適宜声掛けをしていたが、漢字レベルが合っていなかったことやオンラインでの個別学習を苦手としたことも原因かと思われる。そのため、今後は、各学生の日本語力に合った漢字レベルの決定や、個別学習の方法についてのケアをより重視していきたい。

＜秋学期＞

秋学期は、5 名の学生が履修した。春学期から継続して履修している学生もいたため、秋学期は漢字発見のタスクに加え、ディクテーションで漢字を書きとる練習を継続して行った。履修している学生のレベルは全員 J5 以上だったが、選択する漢字テキストのレベルについては、多少差があったため、ディクテーションで出題する問題は基本的に学生が選択しているテキストのレベルのうち、一番低いレベルのワークシートから出題し、後半は少し上のレベルのワークシートからも出題した。さらに、上のレベルの漢字を学習している学生に

は、低いレベルで問題とされているもの以外の漢字も書くように促した。今年度は、オンラインでの授業となりクイズや漢字検定が実施できなかったため、ディクテーションで自分の漢字の力を試す機会になったのではないかと思う。

選択したテキストのレベルについては、1回目のレベル決めで上級の学生が少し難しいものを選択してしまい、ワークシートをするのに苦戦していた。この学生は上級であったため、問題ないと判断したが、もう少し注意深くレベル選択の相談をすべきだったと感じた。後半では少しレベルを下げるようにアドバイスし、負担が大きくなりすぎないようにした。他の学生もワークシートをその日のうちに終わらせ、提出することには多少負担を感じているようであったが、どの学生も熱心に取り組んでいた。昨年に比べ、人数が少なかったことで、個別にワークシートのFBが行えたことは良かったと思う。また、学生はこの授業を受けることで、身の回りの漢字が以前より読めるようになったことに喜びを感じたようである。

2020 年度 Business Japanese I/Business Japanese A 授業記録

コースの概要

Business Japanese I/A は、経営学研究科国際経営学専攻の留学生を主な対象とするクラスで、文法を適宜導入しながら、ビジネス場面での日本語を実践的に学習し、運用力をつけることを目標とする。Business Japanese I は J4, J5 レベル、Business Japanese A は J6, J7 レベルの学生を対象とする。

<Business Japanese I>

担当者名：小松満帆、富倉教子、三浦綾乃、沢野美由紀、長谷川孝子

授業コマ数：週 5 コマ

履修者数：秋学期 2 名

使用教材：独自教材

目標

限られたビジネス場面で日本語で適切にコミュニケーションを行うことができるようになること。

授業の方法

この科目は、将来企業の幹部候補となるビジネスパーソンの育成という特化した目的を持つ科目である。具体的には、仕事にまつわる様々な場面で使用された洗練された表現の運用を目指す練習と、談話レベルでの運用力をつけるためのプロジェクト活動、そしてプロジェクトの発表場面にもなる、立教セカンドステージ大学からの協力を得てのゲストセッションの3本柱で展開した。

本授業の主な流れは、①朝のロール・プレイ、②オリジナル教材を用いたキープレーズの

導入ならびに会話練習、③帰りのロール・プレイである。①と③では、出勤・退勤時に同僚や上司と交わされる日常会話を練習した。②では、商談、会議、電話応対等のビジネス場面で必要となる表現を導入し、適切に対応できるよう練習を行った上で、総まとめとなるゲストセッションでのやりとりを想定した応用練習を行った。さらに、対人関係に応じた基本的な言語表現の使い分けや敬語、日常的な社内文書やビジネス文書の基本を学び、ビジネス日本語能力テストに向けた聴解練習も行った。学期中 6 回実施したゲストセッションでは、コース前半は顧客から依頼されたポスターの作成、後半は新商品・新戦略の提案を行った。セッションは毎回録画し、後日フィードバックを行った。

結果と課題

新型コロナウイルス感染症の拡大により、来日できず時差のある中での受講となったことや、あるいは学期途中で日本へ移動する必要があったことなど、授業時間への適応が苦しい中、一度の欠席もなく、高い意欲を維持し、積極的かつ熱意を持って授業に臨んでいた。2 名という少ない学生数ではあったが、お互いが助け合い、切磋琢磨して学び、それぞれに能力を高めることができた。ロール・プレイの練習では、はじめはなかなか場面を理解し、イメージすることが難しく、会話の切り出しや切り上げがうまくできないこともあったが、徐々に表現を覚え、自然な会話が展開できるようになった。また、6 回のゲストセッションを通して、語彙や表現を増やし、実際のビジネス場面に近い状況で練習を重ねることができ、大きく成長したといえる。また、毎回のフィードバックを通して、自分の話す癖や繰り返し間違えてしまう文法事項などに気づき、自ら修正していく姿勢が見られた。

課題としては、学生の日本語力よりもやや高い教材を使用していた回もあり、漢字の読み方や語彙については事前に調べてリストを作らせるなど、より授業活動を進めやすく、かつ学生にとっても負担の少なくなる方法を工夫する必要がある。また、6 回のゲストセッションの流れがやや複雑になることもあり、学生への理解の確認に、より心を配る必要があると思われる。

<Business Japanese A>

担当者名：藤田恵、富倉教子、三浦綾乃、沢野美由紀、長谷川孝子

授業コマ数：週 5 コマ

履修者数：秋学期 4 名

使用教材：独自教材

目標

限られたビジネス場面で日本語で適切にコミュニケーションを行うことができるようになること。

授業の方法

将来幹部候補となるビジネスパーソンの育成という特化した目的を持つ科目である。具体的には、仕事にまつわる様々な場面で使用される洗練された表現の運用を目指す練習と、談話レベルでの運用力をつけるためのプロジェクト活動、そしてプロジェクトの発表場面にもなる、立教セカンドステージ大学からの協力を得てのゲストセッションの3本柱で展開した。

本授業では、ゲストセッションに向けて課題を設定し、その課題が達成できるようにさまざまな表現を導入し、実際の現場で使えるようにしている。本年度の課題は「新製品の売り込み」「新製品販売状況報告」「取引先への謝罪と説明」「問題の対応策の検討（社内会議）」「自社説明（プレス）」等である。

結果と課題

2021年度のBJAクラスは、履修登録者は4名であったが、1名から学期の初めに専門科目に専念したいと履修取りやめの申し出があったため、実際には3名でクラスを進めていった。他のクラスと同様に、本クラスにおいてもオンラインで授業を進めていった。

3名の学生とも、日本での就職を目指しており、日本のビジネスシーンで用いられる表現や敬語を学びたいという想いが強く、どの課題にも熱心に取り組んでいた。また、どの学生も今何をするべきか、何が求められているのかをすぐに理解することができたため、非常スムーズにクラスを進めることができた。

毎日の授業の冒頭と終わりに行っているロール・プレイと、ビジネス会話の練習では、回を進めるごとに自然な話題の切り出しや適切な表現がスムーズに出てくるようになっていった。

プロジェクト活動では、個々にプランを立てたり、クレームの対応を考えたりと経験のない内容だったために、苦勞することがあり、さらに、日本の文化的な要素も加わるため、学生にとっては難しくかつ学ぶところも多かったのではないかと思われる。特に、「トラブル・クレーム対応」のプロジェクトでは、学生だけでなく、教師側も実務場面で起こりえる内容に整える指導をすることに難しさを感じるがあった。

ゲストセッションも、他の授業と同様にオンラインで行った。まず、準備段階では、資料作成が進まない学生がおり、個別の対応が必要な場面があったため、課題の提示時期やスケジュールの調整を検討したい。ゲストセッション当日は、学生が資料を画面共有しながら発表をしていくが、資料のページを進める速さと聞き手の読む進度が合わないことがあり、この点はオンラインゲストセッションならではの課題としてあがった。実際のビジネスシーンにおいても、プロジェクター等で資料を提示しながら発表する機会があることが予想されるため、資料の見せ方の練習を取り入れる必要があることが分かった。ゲストセッション後のフィードバックでは、ゲストと教師からのコメントを活かし、次の回に改善されていることが多かった。フィードバックの時間は、ゲストセッションのビデオを長く見るように計

画したこともよかったのではないかと思われる。今学期は自分の発表時のビデオを見るように進めていったが、他者の発表から学べることも多いと思われるため、クラスメートの発表を見る機会が取り入れられるように、フィードバックの方法も工夫していきたい。

2020 年度 大学生の日本語 / 総合日本語 6-8 授業記録

コースの概要

「大学生の日本語」は正規学部生の1年生が大学における学習を日本語で行えるよう、アカデミックジャパニーズを学ぶためのコースである。「総合日本語 6-8」として特別外国人学生や大学院生も履修可能であり、様々な背景をもつ学生が、共に学ぶ機会を提供している。各科目の詳細は次に示す通りである。

<大学生の日本語 A6, 7, 8> <総合日本語 6-8A>

目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、聴く・話す活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、プレゼンテーションのしかたを身につけることを目指した。春学期は「ニュースの紹介と用語の定義（引用）」、「グラフの説明」、「アンケート調査」という3つのテーマで、それぞれ必要な機能表現を導入・練習し、スライドを用いた5分のプレゼンテーションを行った。今学期はオンライン授業となったがZoomの画面共有でスライドを共有して発表を行い、ブレイクアウトルームを活用して発表練習やディスカッションを行った。各回の主な目標となる機能表現が含まれるスライドの1枚分についてはスクリプトも提出させた。また、ディスカッションのための質問も用意させて、質疑応答のあとでディスカッションをさせた。テーマ1と2は、まずスライドとスクリプトを作って練習をし、録音音声と自己評価を提出させた。また教師がスライドを添削してフィードバックをし、学生は作り直したスライドを用いて、代表の学生が皆の前で発表をした。最終課題はGoogle Formを使ってアンケート調査を実施し、全員が皆の前で発表した。

使用教材

独自教材

[社会・経営]

担当者名：長谷川 孝子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：(池袋) 春学期 11 名

結果と課題

学習者は発表練習を繰り返すことで、聞き手に分かりやすい構成、パワーポイントの基本的なルール、発表の表現など、発表の基本を身につけることができた。話し方のスピード、間の取り方など、話し方の技術に関してはすぐに修正できる学習者がほとんどであった。最終発表のために実施したアンケートの内容とそのまとめ方なども、こちらで少し指示をすれば自力で直すことができる学習者であった。ただ、授業外に 1 人で発表練習の時間をとるのが難しい様子だった。次回は、授業時の発表練習を多めに取り入れていきたい。

[経済・理学]

担当者名：長谷川 孝子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：(池袋) 春学期 20 名

結果と課題

学習者は練習を繰り返すことで、聞き手に分かりやすい構成、パワーポイントの基本的なルール、発表の表現など、発表の基本を身につけることができた。話し方のスピード、間の取り方など、話し方の技術に関しては気を付けている学習者が多かった。学習者何名かにとって、この授業の内容はかなりの挑戦であったが、周りからの刺激ももらい全員最後まで続けることができた。考察の深め方、出典や引用の書き方など、まだ課題が残っている。教師は各学習者の理解度を観察しながら、練習を繰り返す必要があるだろう。

[法学・異文化]

担当者名：井上玲子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：(池袋) 春学期 29 名

結果と課題

非常に人数の多いクラスであり、また、今学期は Zoom を用いたオンライン形式の授業を初めて実施したので、一人一人の指導が行き届かなかった中、履修学生は、自主的かつ積極的に活動に取り組んでくれた。また授業を運営するにあたっては、学生の協力が非常に不可欠だったが、学生たちは状況を理解し、協力的な姿勢で授業に臨んでくれた。受講生は全体的に学習意欲が高く、一つ一つの課題を毎回しっかりとこなしていった。秋学期も引き続き学生の学習意欲の維持に努めたい。

今学期は、日本語での発表の経験がない学生が何人かいた。また、学生にとっても初めてのオンライン授業ということもあり、非常に不安を感じている学生もいたようである。授業内ではスライドのサンプルや表現例を使って発表の練習をグループで行い、授業外ではサ

ンプルスライドや表現例を参考に各自でスライドと発表スクリプトを作成してもらった。学生が作成したスライドとスクリプトを添削し、それを使って、個別FBを行った。FB後にスライドと発表スクリプトの修正版を提出してもらったが、修正ができていない学生が数名いた。コメント機能を使用して添削したが、一部の学生はそれが見られない、またはコメントがずれてしまい、どこを直したらいいのかわからなかったようである。来学期はコメントの書き方を工夫したい。

また、スライドと発表スクリプトのFBを授業内では全員行うことができず、授業外での時間を設けて学生に集まってもらった。学生たちは直接教師からFBが受けられるということで、時間外であっても時間を調整して集まってくれた。ただ、対面の授業の場合は、授業外FBは難しいだろう。今学期はオンライン形式の授業だったため、授業外指導が可能となったが、来学期以降、大所帯のクラスでのFBの仕方をどうするか考えなければならないだろう。

スライド作成では、文字が小さい、文字の量が多い、箇条書きではなく、文になってしまっている、考察やまとめが不十分等、様々な課題が残った。また、たくさんの内容を詰め込み過ぎて、5分の発表のところを、大幅に時間をオーバーした学生もいた。指定された時間内のスライド作りや発表の仕方については引き続き秋学期の課題としたい。

[文学]

担当者名：数野恵理

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期 13名

結果と課題

初めてのオンライン授業となり、例年とは少し授業方法を変更しながらも、同等の内容と質を維持するよう工夫して進めた。最終授業での振り返りでは、発表の表現をいろいろ学べて役立った、表現・構成・参考文献について学んでいたので他のクラスで発表するときも自信を持って発表できた、Google Formの使い方を学べてよかったなど、授業内容が役立ったという声が多く聞かれた。オンライン授業についても、初回は皆の前で発言するのが緊張したけれど話す機会も多く慣れた、オンラインでもこのクラスは少人数で留学生同士なので発言がしやすかった、日本語のクラスはブレイクアウトルームでクラスメートとたくさん話す機会があったのでよかったという肯定的な意見が多かった。一方で、友達が作りづらく一人暮らしでずっと狭い部屋にいたため孤独、オンラインでも仲良くなったがやはり直接会って共通の体験をすることで深まる絆もあるので残念、自分のネット接続が不安定なことがあったという声もあった。次の学期はより学生同士の交流が活発になるように工夫していきたい。

[観光・映像]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 9 名

結果と課題

遠隔授業ということで、授業の内容以外にネット接続や提出物の確認などお互いに神経を使うことが多かったが、出席していた学生はそういった状況の中でも概ね真面目で前向きに取り組んでいたと思う。定義、図表の説明、アンケートと 3 つのテーマを扱ったが、いずれにも共通する発表の基本の形式を身につけ、大学生として体裁の整った発表ができるようになった。

課題としては、学生によってはテーマごとの定型表現が十分に使えていないこと、図表の説明やアンケート結果の説明に意識が向き、そこからの考察が十分に深まっていなかったことである。秋学期の課題としたい。1 名が全て欠席、もう 1 名が後半欠席であったことは残念であった。

[福祉・心理]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 9 名

結果と課題

パワーポイントでの発表は初めてという学生も数名いたが、課題をこなしていくことで発表の基本が身についたと思う。静かではあるが個性の強いクラスで、はじめは課題の求めているものから少し外れたものを作ってくる学生もいたが、最終的には課題で指示された枚数、またほぼ決められた時間内で発表ができるようになっていた。

課題としては定型表現がまだ十分使いこなせていなかった学生がいたこと、テーマごとの考察の深め方が不十分であったこと、またディスカッションがあまり活発でなかったことである。ディスカッションに関しては、聴衆とのインターアクションがあまりないままに終わるということも多かった。遠隔ということで、相手の反応が見えにくく、難しい部分もあると思うが、発表者だけでなく、聞き手の立場で、質問したり、ディスカッションに参加したりするためのスキルを磨くことも今後の課題としたい。途中で諦めかけた 1 名が、後半になり、提出の遅れていた課題にも取り組み、最終発表までできたことは良かったと思う。

[GLAP]

「大学生の日本語 A」 は「Japanese Language and Japanese Society A」と併置のため、

「Japanese Language and Japanese Society A」部分を参照のこと。

＜大学生の日本語 B6, 7, 8＞＜総合日本語 6-8B＞

目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、読む・書く活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、読解力を高めるとともに、レジュメ、レポートや論文を書く際に必要な技能を身につけることを目指した。

オンライン授業となったが、Zoom や Meet で双方向の授業を行い、通常学期とほぼ同様の活動を行った。『上級日本語教科書 文化へのまなざし』のうち「国際共通語」、「フリーターと仕事」に関する 2 つのテーマを扱った。資料 1 は共通読解として全員が同じものを読み、内容の理解を行った。資料 2 は A と B から各自読み物を選択し、その内容について発表できるようにレジュメの作成を行った。さらに、リアクションペーパーとレポートの書き方を指導し、リアクションペーパーを書いたあとで、複数の資料を用いてレポートを作成した。例年は学期の前半と後半でそれぞれのテーマについてレポートを書いているが、今学期は急遽 14 週から 12 週の授業に変更となったため、レポートは一つとした。また、例年実施している漢字クイズと表現クイズはワークシート形式に変更した。

使用教材

近藤安月子・丸山千歌、2005、『上級日本語教科書 文化へのまなざし』、東京大学出版会。

[社会・経営]

担当者名： 数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 12 名

結果と課題

「総合日本語」として履修する 3 名を含むクラスとなった。オンライン授業となったが、少人数ということもあり全員カメラをオンにしていた。最終日に振り返りをさせたところ、レポートの書き方や表現など初めて知ることが多く、実践的な内容で、積極的に学べたという声が多かった。また、オンラインでも皆の顔を見ながら話ができ、一方的に話を聞くだけでなくグループでの話し合いができたのが良かったというような意見が目立った。しかし、前の学期から継続して学んでいる特別外国人学生（総合日本語）1 名は、オンライン授業に

なってからやる気を保つのが難しかったという。キャンパスで学ぶのとは違い、自室で一人で一学期間授業を受け続けるのはやはり精神的な負担がある。オンラインであっても、学生のモチベーションを維持していくことが課題である。

[経済・理学]

担当者名：長島明子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 26 名

結果と課題

出席や課題提出は全体的によく、熱心に課題に取り組んだ。今学期はオンライン授業ということもあり、クラスのメンバーをお互いに知るのに時間がかかり、最初のうちはグループ、ペア活動がうまくいかなかったが、回を重ねるうちに次第に円滑に進められるようになった。レジュメ作成では、1 回目は形式・体裁が整っていないものや資料の文章をそのまま抜き出して書いたものが多く見られた。しかし、2 回目は資料の内容のポイントを理解し、箇条書きにしてまとめ、視覚的な工夫をするなど、多くの学生のレジュメに改善が見られた。レポート作成では全体の構成、引用の方法、参考文献リストの書き方を重点的に進めていった。初稿では引用のしかた、文献リストの書き方に誤りが散見されたが、自己評価シートや全体・個別フィードバックで、自分のレポートの問題点を確認した結果、誤りは減っていった。来学期はレポート作成において、正確な引用表現、適切な引用ができるよう指導を工夫したい。また、再履修の学生のうち何人かは今学期も未提出の課題が多く、残念な結果となった。来学期は早い段階から声をかけるなど、対策を講じたい。

[法学・異文化]

担当者名：小林友美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 27 名

結果と課題

今学期はオンライン授業となったが、スケジュールの調整もあり、予定されていた課題や活動を無理なく実施することができた。出席率、課題の提出率がよく、一つ一つの課題をこなすことで、ライティングの基本的スキルを身に着け、到達目標に近づいていった学生が多かったように感じる。一方で、同じ間違いを繰り返す学生や、未提出の課題が溜まってしまった学生もいた。そのため、授業前後も声掛けをするようにした。授業で実施したグループセッションは効果的であり、クラスメートとの交流という点からも学生の満足度が高かった。国から参加している学生もあり、孤独感を感じる学生もいたため、来学期も適宜このよ

うな活動を取り入れたい。課題としては、履修者が多数いたため、授業内にきめ細やかな個別フィードバックをすることに限界があったことが挙げられる。今後もフィードバックの方法を工夫し、自律した学びができるような指導を心掛けたい。

[文学]

担当者名：浅野有里

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 16 名

結果と課題

今期はオンラインで授業が行われたため、前半は各学生の日本語力の把握と授業での協働作業を通しての学生同士の関係構築に努めた。そのためか、学期中盤以降の分担読み、課題の確認、グループでの課題作成などは、学生間で協力的に進められていたように思う。その一方で、どうしても雰囲気に乗れない学生、自分の主張を通したがる学生も見られたので、常にグループを巡回するようにしていたが、十分に目が届かない部分もあったことが反省点である。また、授業が 12 週になり、じっくりと課題をこなせるスケジュールだったので、学生に過度の負担をかけることなく、課題に取り組んでもらうことができた。レポートやレジュメなどは FB と修正作業が重要なポイントになると思われるが、オンライン授業では画面の共有ができるので、学生から承諾を得た上で、その学生の提出物から参考になる部分を取り出し、よい例としてクラスに共有するようにした。こちらから一方的に説明をするよりも、他の学生の実物を見た方が刺激を受けるのか、再提出された課題には工夫した修正が見られるようになった。

毎回の課題の内容については授業内で発表し、Blackboard に提出という形で進めたが、毎回のように 1 人は課題の内容や形式を勘違いして提出している学生が見られた。オンラインでの伝達方法が問題なのかどうかは定かではないが、課題の周知の方法については今後も検討していきたい。

[観光・映像]

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 9 名

結果と課題

初めてのオンライン授業で、接続環境やマイク、カメラなどに留意しつつ、試行錯誤を重ねての授業となったが、ほとんどの学生は接続のトラブルもなく、小レポート、レジュメ、各課題に熱心に取り組んだ。小レポートの作成では、全体の構成、引用の方法、参考文献リ

スト作成を中心に授業を進めた。アウトラインを推敲することで全体の構成の重要性を意識できるようになったが、引用文型や参考文献の記号の使い方などに誤りが多く見られた。来学期は今学期取り上げた表現を復習すると共に、正確な引用の仕方を引き続き指導していきたい。また、レジュメ作成においては、テーマ①では資料の文章をそのまま書き抜いてしまう学生もあり、記号の付け方や文末などの統一性に改善の余地があったが、フィードバックやレジュメを元に内容説明の練習を通して、テーマ②では読み手に分かりやすく示す方法が概ね身に付いたようである。来学期はオンライン授業の中で、学生同士のコミュニケーションがより円滑にできるよう工夫し、活発なクラス活動と有意義な課題の学習に繋げたい。

[福祉・心理]

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 10 名

結果と課題

初めてのオンライン授業で、接続環境やマイク、カメラなどに留意しつつ、試行錯誤を重ねての授業となった。学期の前半には接続が不安定で開始時間に遅れてしまう、オンラインでは学習意欲の維持が難しく感じるなどの学生が見られたが、後半になると、接続環境も整い、学習方法にも慣れ、自分のペースで各課題に取り組めるようになった。小レポートの作成では、全体の構成、引用の方法、参考文献リスト作成を中心に授業を進めた。これらの学習項目をしっかり身に付けることができた学生がいる一方で、不正確な表現をなかなか改められない学生も見られた。来学期は今学期の学習事項を復習しつつ、的確な表現の定着を図りたい。また、レジュメの作成においては、テーマ①では、箇条書きや見出しの付け方に慣れておらず、簡潔にまとめることに苦労していたが、その反省を踏まえ、テーマ②では番号や記号の使い方に工夫が見られ、読み手にとっての分かりやすさについて徐々に考えられるようになった。来学期はオンライン授業の中で、活発な意見交換が学生間でできるよう工夫し、学習意欲の向上とより充実した課題への取り組みに繋げたい。

[GLAP]

「大学生の日本語 B」は「Japanese Language and Japanese Culture A」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Culture A」部分を参照のこと。

<大学生の日本語 C6, 7, 8> <総合日本語 6-8C>

目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、聴く・話す活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、プレゼンテーションのしかたを身につけることを目指した。

今年度はオンライン授業となったが、Zoom の画面共有でスライドを共有して発表を行い、ブレイクアウトルームを活用して発表練習やディスカッションを行った。秋学期は比較対照、有識者の見解への同意、部分的な同意と反論などの機能表現を導入し、スライドを用いた 5 分のプレゼンテーションを計 4 回行った。発表スライドにはディスカッションのための質問も入れて、質疑応答のあとでディスカッションをさせた。

テーマ 1 は、まずスライドを作ってグループの中で発表の練習をして学生間評価をし、さらに教師がスライドを添削してフィードバックをし、学生は作り直したスライドを用いて再度グループの中で発表した。テーマ 2 とテーマ 3 は Google スライドを用いてグループで一つのスライドを作成し、クラスの前でグループ発表を行った。最終課題は個人の発表とし、全員が皆の前で発表した。

また、今回から、上記の発表の他に、即興で短いスピーチをする練習も取り入れた。その場で与えられたトピックについて準備をして、スライドを使うことなく、グループの中でお互いにスピーチをし合うという活動である。

使用教材

独自教材

[社会・経営]

担当者名：長谷川孝子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 9 名

結果と課題

学習者は発表練習を繰り返すことで、聞き手に分かりやすい発表とは何かを考え、学んでいった。グループ発表へ向けての準備では、コミュニケーション能力が高い学習者が周りの学習者により影響を与えながら、学びが進んでいく様子が見られた。グループで協力しながら課題を完成させる大切さや楽しさを学ぶことができたようだ。しかしながら、グループワークは毎回よい方向へ進むわけではない。負の方向へ進んでしまう場合や学びが起こらない場合の指導法も考える必要がある。

[法学・異文化]

担当者名：井上玲子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 25 名

結果と課題

今学期も春学期同様、Zoom を使用し、双方向での授業を行った。今学期は、春学期に「大学生の日本語 A」を履修した学生が 24 名、再履修の学生 1 名の合計 25 名と、春学期に引き続き人数の多いクラスとなった。春学期から履修している学生は、自主的かつ積極的に活動に取り組んでいて、秋学期も引き続き、高いモチベーションを維持していた。そして、再履修の学生も、一つ一つの課題を毎回しっかりとこなしていった。大半の学生はほぼ欠席することなく課題をしっかりとやり遂げ、優秀な成績を収めた。しかし、学期の後半に長期欠席が続いた学生が 1 名いた。対面であれば直接声掛けができたであろうが、オンライン上で学生一人一人の様子を把握することの難しさを痛感している。学生が授業にしっかりついてきているかどうか、対面の時よりも注意深く見ていく必要があるように思う。

春学期はすべて個人発表であったが、今学期はグループ発表を 2 回行った。学期末に感想を聞いたところ、クラスメートと意見交換ができて勉強になったこと、見やすいスライド作りを心掛けるようになったこと、授業外で集まって話し合う機会を設けたので、クラスメートとの関係構築ができたことを挙げるなど、グループ発表は概ね好評であった。個々で準備している時には気がつかなかったことが協働学習では見えたようで、グループ活動を通して、学ぶべきものがあつたようである。

[文学]

担当者名：数野恵理

授業コマ数：週 コマ

履修者数：秋学期 16 名

結果と課題

履修登録者数は 16 名だったが、1 名は休学のため採点対象外で、その他、一度も出席しない学生が 1 名いたため、実質的には 14 名のクラスであった。

今学期は、春学期に「大学生の日本語 A」を履修した学生が 12 名、再履修の学生 2 名の合計 14 名のクラスであった。春学期から履修している学生は、高いモチベーションを維持しながら自主的かつ積極的に活動に取り組んでいた。そして、再履修の学生も、その雰囲気が伝わり、一つ一つの課題をしっかりとこなしていった。大半の学生はほぼ欠席することなく課題をしっかりとやり遂げ、優秀な成績を収めた。しかし、学期の後半に長期欠席が続いた学生が 1 名いた。オンライン授業において、学生一人一人が授業にしっかりついてきているかどうかを把握するには、対面の時よりも注意深く見ていく必要があるのではないかと思った。今後の授業運営において、気をつけていきたい。

今年度はすべてオンラインでの授業だったため、スライドの文字が小さかったり、文字数が多かったりしても、概ね発表に問題はなかった。しかし、今後、教室で発表する際には、発表の仕方やスライドの見せ方など、Zoomでの発表の時とは違い、戸惑ったり失敗したりすることがあるかもしれない。1年を通して、発表の仕方やスライドの基本的な作り方はしっかり学べたのではないかと思うので、今後は発表の経験を通して、自分自身で学び、発表の仕方やスライドの作り方をブラッシュアップしてくれることを期待している。

[観光・映像]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 10 名

結果と課題

春からの継続の学生が多く、1名いた特別外国人学生も発表の経験があったため、予定した内容をスムーズに進めることができた。また、遠隔での授業に慣れてきたこともあり、学生は春よりはリラックスした雰囲気ですべての課題に取り組んでいたと思う。今回はテーマ 2 と 3 がグループ発表の形であったが、準備の段階ではお互いに補い合い、学び合う様子が見られた。また、グループで一つの発表を作り上げていくことで、役割分担や責任など、社会性の育成にもつながったと思う。一方、学生ごとの貢献度に差は見られたため、グループメンバーの組み合わせによって、真面目な学生の負担が多くなり、グループ全体の評価が必ずしも全員にとって公平とは言えないと感じることもあった。どの段階でどのような手当ができたか、反省も含め考えたいと思う。1名参加度の悪い学生がおり、提出物も滞りがちであったのは残念であった。

[福祉・心理]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 11 名

結果と課題

全体に真面目なクラスで、欠席もなく、各課題にきちんと取り組み、遅れることなく提出できていた。その結果、今期の目標であったデータや有識者の見解から考察を深めるという発表の流れが定着したと思う。グループ発表では、リーダー的な学生が全体を引っ張る感じで進められていたが、最終発表では各自構成の整った発表ができていた。グループワークから学んだものがあつたのではないかと思う。また、遠隔での授業に慣れてきたせいか、質疑応答やディスカッションも前期に比べ活発であった。課題としては、見やすいスライドの作

成と質疑応答を質問者発表者双方が的確かつ簡潔に行うことである。いずれも授業では十分指導に時間が取れなかったので、練習の段階から意識づけを図れるよう検討したい。

[経済・理学]

担当者名：数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 20 名

結果と課題

同じ学期に同じ学部の「大学生の日本語 D」も担当したが、「大学生の日本語 C」のほうが出席率も課題の提出状況もよく、欠席はほとんどなかった。今回初めて、2 回の発表をグループ発表としたが、個人の課題よりも責任感が増したようで、グループ発表の準備の回や発表当日は欠席した学生がおらず、課題にもしっかり取り組んでいた。この 1 年はオンライン授業であったが、グループ発表ではお互いに協力する必要があったため、通常のグループディスカッションなどの活動よりも学生間の距離が縮まったようである。

カメラはあまりオンにしないクラスだったので、原則、発表する人はカメラをオンにしてそれ以外はオフでもいいことにした。発表の日は発表を聞いた後のディスカッションでの発言を参加度としたこともあり、質疑応答とディスカッションも非常に活発だった。人数の多いクラスで、発表者以外はカメラがオフの状態でありながらも、名乗ってから発言するというようにしたところ、大変スムーズに進んだ。

また、このクラスは 1 回、希望者のみ対面授業で行った。3 名希望者がおり、その 3 名が教室で、その他の学生は通常通り Zoom で双方向の授業に参加するという形であった。今回は教室での対面が少人数ということもあり問題なく進めることができたが、人数のバランスによっては、どちらかが置いていかれたように感じることもあるかもしれない。来年度ハイフレックスとなった場合には注意が必要だ。

[GLAP]

「大学生の日本語 C」は「Japanese Language and Japanese Society B」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Society B」部分を参照のこと。

<大学生の日本語 D6, 7, 8> <総合日本語 6-8D>

目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、読む・書く活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、読解力を高めるとともに、レポートや論文を書く際に必要な技能を身につけることを目指した。

学期の前半は『上級日本語教科書 文化へのまなざし』の「個性と学び」、後半は生教材の「AI」に関する読み物を扱った。学期の前半と後半それぞれ、資料 1 は共通読解として全員が同じものを読み、内容の理解を行った。資料 2 は A と B から各自読み物を選択し、その内容について発表できるようにレジュメの作成を行った。さらに、レポートの書き方の指導を行い、複数の資料を用いて各テーマについてのレポートを作成した。春学期の大学生の B では直接引用について学んだが、秋学期の大学生の日本語 D では間接引用を練習した。

例年はレポートのピア・エディティングもしているが、2020 年度はオンライン授業だったため、教員が添削する前の学生同士のピア・エディティングはやめ、自己評価シートを用いて自分で評価し、クラスメートにはレポートの内容を説明するという活動に変更した。また、春学期は急なオンライン化で漢字クイズと表現クイズをワークシート形式にしていたが、秋学期は Blackboard のテストツールを用いて、例年のようにクイズの形に戻した。その他の活動は対面授業と同様に行った。

使用教材

近藤安月子・丸山千歌、2005、『上級日本語教科書 文化へのまなざし』、東京大学出版会。

新井紀子、2018、『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』、東洋経済新報社。

井上智洋、2018、『人工知能と経済の未来—2030 年雇用大崩壊』、文春新書。

小林雅一、2017、『AI の衝撃—人工知能は人類の敵か』、講談社。

[社会・経営]

担当者名：長島明子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 15 名

結果と課題

出席や課題提出は非常によく、熱心に課題に取り組んだ。クラスメンバーが前学期と同じということもあり、ペア活動やグループディスカッションも円滑に進められた。レジュメ作成では、形式・体裁は整っていたが、箇条書きがうまくできず、読解資料の文章をそのまま抽出して書いたものが見られた。この点をフィードバック時に説明した結果、2 回目は資料の内容のポイントを押さえ、箇条書きにしてまとめられるようになった。レポート作成ではレジュメと同様、形式・体裁はよくできていた。しかし 1 回目は根拠の不足や引用の多用な

どの問題があった。2 回目はこの点に注意するよう全体及び個別フィードバックで注意を促した結果、大幅な改善が見られた。学生も確かな手ごたえを感じたと思われる。

課題としてはレジュメの箇条書きとレポートの論の展開が挙げられる。読解資料の内容を過不足なくまとめて箇条書きができるように、レポート作成では適切な根拠を示して論を展開できるよう授業を工夫したい。また、今学期は途中から出席しなくなった学生がおり、残念な結果となった。来年度は早い段階で対策を講じたい。

[経済・理学]

担当者名： 数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 23 名

結果と課題

このクラスは学生間の取り組みの差や力の差が大きいクラスであった。日本語力が高くない学生も含め、多くの学生はクラスで学んだことを身につけ、しっかりとしたレジュメやレポートが書けるようになった。学生たちによれば、学部でもレジュメやレポートを作成する機会が多く、このクラスで学んだことを生かすことができているということである。一方で、課題を提出しない学生や、レジュメの体裁やレポートでの引用がまだしっかりできていない学生も複数名いた。課題未提出の学生とは Zoom のブレイクアウトルームで個別に話し、資料をなくしたという場合には再度共有するなど手当てをした。学期末までにどうにか提出した学生もいたが、結局提出のない学生もいたのが残念である。この科目は単にレジュメやレポートを作成するだけでなく、書き直して改善するところまでを目標としており、日々の課題（宿題）も多い。オンライン授業では例年以上に時間管理が難しい可能性はある。自律的に取り組めない学生をどのように手当てしていくかが今後の課題である。

[法学・異文化]

担当者名：小林友美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 25 名

結果と課題

春学期に「大学生の日本語 B」を履修している学生が大半であり、授業の進め方をよく把握していたため、スケジュール通り円滑に教室活動を進めることができた。大人数のクラスであったが、全体的に積極的に活動に参加し、課題、宿題の提出率は良好であった。学期開始時は、春学期学んだ基本的なレジュメやレポートの書き方を忘れてしまった学生もいたが、復習をすると取り戻し、回を重ねるごとに、分かりやすい構成のレジュメ、レポートを

作成することができるようになっていった。全体的に春学期より成長が見られ、着実にライティング力を身に付けたように感じる。しかしながら、引用の仕方や参考文献の書き方について、フィードバックで指摘したもののなかなか定着しなかった学生も数名いた。本科目のレジュメ、レポートの再修正は効果的な活動であるため、今後は、活動一つ一つの動機付けや、フィードバックでの意識づけをより強調していきたい。

[文学]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 24 名

結果と課題

遠隔ということもあり、なるべく学生同士の交流を持ってもらいたいと思い、グループやペアでの話し合いの機会を多く取り入れた。学生は概ね真面目で、メールやクラス内でのチャットによる質問も比較的良好であり、対応が早めに行えた。一方、再履修の数人の学生は、課題の提出が遅れがちで、資料の紛失も多く、遠隔の場合特に管理力が必要だと感じた。

内容的にはレジュメはテーマ 1 のものは、箇条書きでポイントを羅列したようなものが多かったが、テーマ 2 では見やすさや、関係の示し方に工夫が見られるものが多くなっていた。レポートはテーマ 1 では引用と意見の区別が明確でないものがかなりあり、フィードバックではその点を指摘することが多かった。テーマ 2 ではその部分では改善が見られたが、全体の流れで、「はじめに」の予告がなく「おわりに」に本論をまとめられておらず、そのためやや一貫性を欠いたものが見受けられた。これについては、本論に基づいた序論と結論の構成の仕方やその表現の型などについて、もう少し具体的な指導をするべきだったかもしれない。今後の課題としたい。

[観光・映像]

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 10 名

結果と課題

春学期から引き続きオンラインでの授業となったが、接続に関するトラブルもなく、授業を円滑に進めることができた。オンライン上のクラス活動やコミュニケーションにも慣れ、レポートアウトラインの発表やレポートテーマの意見交換を通して、各学生の視野も広がったようである。レジュメの作成においては、必要な情報抽出への留意や記号・番号の効果的な使用などの工夫が見られ、読み手にとっての分かりやすさを意識できるようになった。

また、レポートの作成では、春学期の学習項目を復習しつつ、間接引用、接続詞の適切な使い方などを学んだ。引用と自分の意見を区別すること、及び両者に関連性を持たせて論を展開することの重要性は認識できるようになったが、接続詞の使い方、引用表現や参考文献の書き方に細かいミスがあり、修正が必要である。文章作成における正確で、より適切な表現の定着を図れるよう練習を工夫し指導することを今後の課題としたい。

[福祉・心理]

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 9 名

結果と課題

春学期から引き続きオンラインでの授業となったが、接続に関するトラブルもほとんどなく、オンライン上の発表や意見交換にも慣れ、みな熱心に各課題に取り組んだ。レジュメの作成においては、

箇条書きや形式の統一性、小見出しと要約の関連付けなどが意識できるようになり、資料の内容を読み手に簡潔に伝える方法が身に付いたようである。また、レポートの作成では、春学期の学習項目を復習しつつ、間接引用、接続詞の適切な使い方などを学んだ。引用部分の妥当性、引用表現の細かいミス、「また」「または」のような類似した接続詞の混用などの修正すべき点はまだ見られるが、自己流で書くということはなくなり、アウトラインを基にして全体の構成や論理性に留意できるようになった。今後は、学期の学習項目の定着を図るとともに、資料の要約や各表現形式の練習を通して的確な引用や論理的な文章展開ができるよう指導していきたい。

[GLAP]

「大学生の日本語 D」 は「Japanese Language and Japanese Culture B」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Culture B」部分を参照のこと。

2. 2020 年度 Placement Test 実施報告

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、日本語プレイスメントテストは実施を見送った。

【春学期】

2020 年度春学期 日本語プレイスメントテスト対象者数

	正規学部生		特別外国人学生		正規大学院生		研究者
	新入生	継続生	新入生	継続生	履修希望 新入生	在学学生	
対象者	83	3	21	0	41 ^{※1}	4	0
全対象者数 152 名							

※1：正規大学院生（履修希望新入生）41 名のうち、ビジネスデザイン研究科 25 名

春学期プレイスメントテスト対象者 レベル判定結果（特別外国人学生・正規大学院生）

J 0	11			
J 1	0			
J 1 S	2			
J 2	3			
J 2 S	0			
J 3	0			
J 3 S	1			
	文法・文 型	読解	作文	聴解・会 話
J 4	2	2	2	2
J 5	3	3	4	3
J 6	16	3	35	37
J 7	23	36	5	5
J 8	5（うち条件付き 3 名）			

＜春学期総評＞

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、当初予定していた日本語プレイスメントテストは急遽見送りとなった。代替策として、留学生の日本語学習歴や日本語能力試験の受験実績（自己申告）とこれまで蓄積してきた知見を活用して、暫定的なレベル判定を行い、授業第1週に個別に履修相談に応じることで、履修する日本語科目の確定まで導いた。授業第1週の修相談は19件（メール対応、日本語相談室対応を含む）で、学期末に実施したFD委員会（第1回）では、「実際に授業をしてみて、新規生のレベルは大きく違いは感じなかった」という所見が共有された。

【秋学期】

2020年度秋学期 日本語プレイスメントテスト対象者数

	正規学部 生	特別外国人学生		正規大学院生	
	新入生	新入生	継続生	新入生	在学学生
	0	1	0	17	3
全受験者数 21名					

秋学期プレイスメントテスト対象者 レベル判定結果（特別外国人学生・正規大学院生）

J 0	8			
J 1	1			
J 1 S	0			
J 2	2			
J 2 S	0			
J 3	1			
J 3 S	0			
	文法・文 型	読解	作文	聴解・会 話
J 4	1	0	1	0
J 5	2	3	2	3
J 6	1	1	4	4
J 7	3	3	0	1
J 8	2（うち条件付き1名）			

＜秋学期総評＞

秋学期は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、大学が特別外国人学生の受け入れ中止を決定しており、日本語科目履修予定人数が大幅に減った。また、秋学期も授業形態がオンライン授業となることが大学の方針として決まっていたため、日本語プレイスメントテストの代替策として、留学生の日本語学習歴や日本語能力試験の受験実績（自己申告）とこれまで蓄積してきた知見を活用して、暫定的なレベル判定を行い、授業第1週に個別に履修相談に応じることで、履修する日本語科目の確定まで導いた。

2020年度の日本語科目履修者の内訳は以下の通りである。（履修者数は、継続生も含む。ここでいう「継続生」とは、前学期に日本語科目を履修した者。継続生は日本語プレイスメントテスト対象者には含まない。）

【2020 年度春学期】			【2020 年度秋学期】	
特別外国人学生	国 籍	人 数	国 籍	人 数
	アイルランド	3	アメリカ	1
	アメリカ	5	タイ	1
	イギリス	5	ドイツ	2
	カナダ	1	フランス	1
	韓国	1	ベトナム	1
	スイス	2	ペルー	1
	スペイン	4		
	スロベニア	2		
	タイ	3		
	台湾	1		
	チェコ	1		
	中国	4		
	中国（香港）	2		
	デンマーク	1		
	ドイツ	8		
	日本	1		
	フランス	10		
	ペルー	1		
	ルーマニア	1		
特別外国人学生合計		56		7

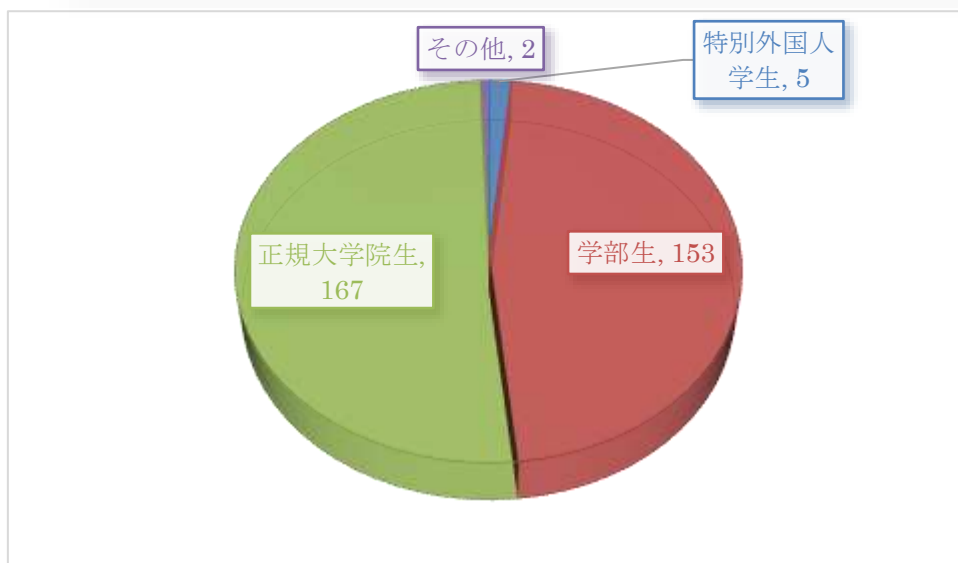
正規留学生 (大学院)	国 籍	人 数	国 籍	人 数
	インドネシア	1	アメリカ	1
	台湾	2	インドネシア	1
	中国	37	ウガンダ	1
	ドイツ	1	オーストリア	1
	フランス	3	台湾	1
	ベトナム	1	中国	29
	ベナン	1	日本	1
			フランス	1
			ベトナム	2
			マレーシア	1
			モロッコ	2
	正規留学生（大学院）合計			41
日本語履修者合計		102	2020 年度秋学期	48

※中国国籍の正規大学院生のうち春学期 23 名、秋学期 21 名ビジネスデザイン研究科 1 年生

3. 2020 年度日本語相談室実施報告

2020 年度 日本語相談室利用状況（2020 年 5 月 4 日～2021 年 2 月 4 日）

【相談者所属別利用件数】



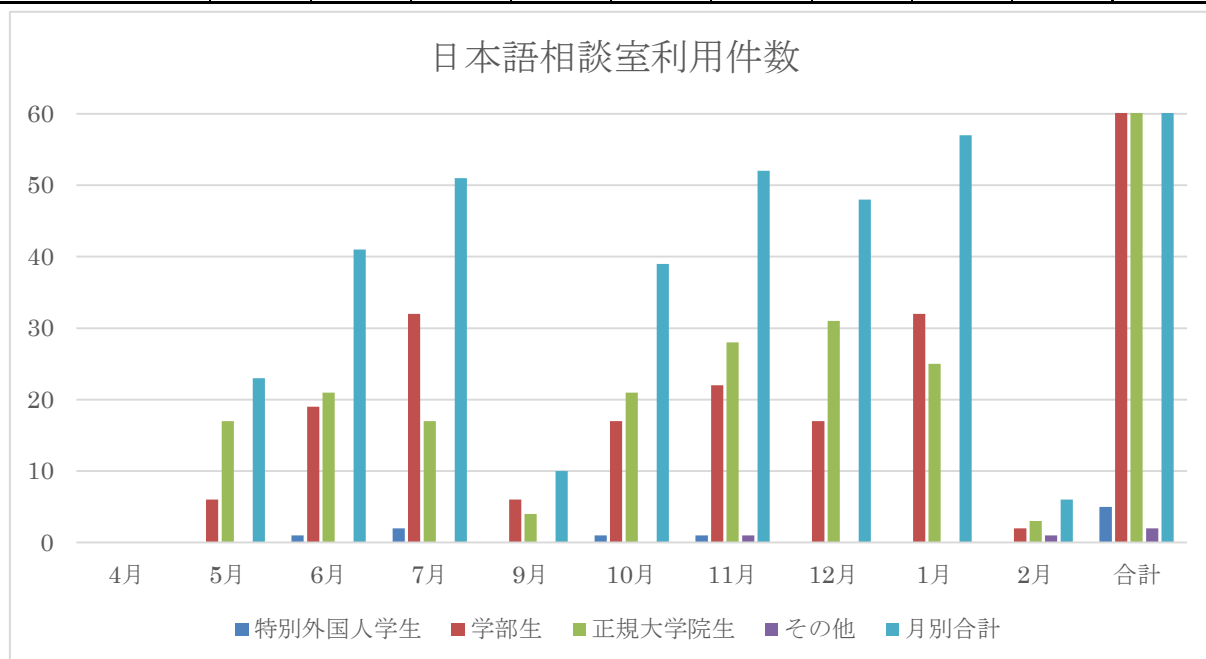
2020 年度の日本語相談室は新型コロナウイルス感染症の影響により、初めてオンライン形態で実施された。事前資料をメールで受け付けるなど対面時とは異なる取り組みがいくつか行われたが、例年と同様に安定的に日本語相談室を運用することができた。

時間や場所を問わず利用できるオンライン形態ではあったが、新型コロナウイルス感染症により留学生数の減少したことが影響し、利用件数は前年度より減少した。2020 年度は、2019 年度の利用件数である 394 件より 67 件減少した 327 件となった。例年より 1 ヶ月遅れての開室であったことを考慮し、2019 年度の利用件数 394 件から 4 月の 31 件を除いた 363 件と比較しても 2020 年度の利用件数は前年度より減少したことがわかる。

2020 年度の日本語相談室利用の内訳をみると、前年度と同様に、正規大学院生による利用件数が 167 件と最も多かった。その次が正規学部生による 153 で、特別外国人学生による利用件数はわずか 5 件のみであった。前年度の 63 件より大幅に減少したことがわかる。このことから、利用件数の前年からの減少は、特別外国人学生数の減少が大きく影響しているといえる。

【月別推移】

	4 月	5 月	6 月	7 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	合計
特別外国人学生	0	0	1	2	0	1	1	0	0	0	5
正規学部生	0	6	19	32	6	17	22	17	32	2	153
正規大学院生	0	17	21	17	4	21	28	31	25	3	167
その他							1			1	2
月別合計	0	23	41	51	10	39	52	48	57	6	327



利用件数の月別推移をみると、期末レポートの提出時期である 7 月と 1 月は正規学部生による利用が多く、修士論文や博士論文の提出時期に近い 11 月から 1 月は正規大学院生による利用が多い。従来と同様に、正規大学院生及び学部生の試験期間や論文提出時期において日本語相談室が有効に活用されていることがわかる。しかし、スピーチコンテストと重なる時期に特別外国人学生の利用件数が従来は多かったのに対して、今年度は特別外国人学生数が減少したこともあり、コンテストが開催された 11 月前後における、特別外国人学生の利用はあまりみられない。

【所属別利用件数】

		実質利用人数	合計利用回数
特別外国人学生		4	5
正規学部生	文学部	2	23
	経済学部	2	5
	異文化コミュニケーション学部	7	64
	経営学部	1	2
	法学部	1	2
	現代心理学部	5	53
	コミュニティ福祉学部	1	1
	理学部	2	3
正規大学院生	文学研究科	7	52
	観光学研究科	8	40
	ビジネスデザイン研究科	1	13
	異文化コミュニケーション研究科	3	10
	21 世紀社会デザイン研究科	2	3
	経営学研究科	6	13
	社会学研究科	2	8
	経済学研究科	1	7
	現代心理学研究科	1	6
	コミュニティ福祉学研究科	1	6
	法学研究科	3	9
その他	研究員	1	2
	特別外国人学生 計	4	5
	正規学部生 計	21	153
	正規大学院生 計	35	167
	その他 計	1	2
合 計		61	327

2020 年度は通年でオンラインにより展開したため、キャンパスごとの利用状況の報告はない。

新型コロナウイルス拡大の影響により特別外国人学生の受け入れが大幅に減ったことにより、本学に在籍する留学生の総数も昨年度に比べ減少した中で、特記すべきは、正規学部生の利用についてである。正規学部留学生の合計利用回数は、昨年度が 126 回であったのに対し、今年度は 153 回と増えた。実質利用人数は、昨年度が 72 人であったのに対し、今年度は 21 名であることから、繰り返し利用されることが多かったことがわかる。この傾向は正規大学院生も同様である。実質利用人数は昨年度が 105 人であったのに対し、今年度は 35 名である。平均で一人 4.7 回利用したことになり、昨年度の平均利用回数約 2 回（実質利用人数 105 名、合計利用回数 205 回）よりも大幅に数値が上がった。変化の要因が実施形態による影響であった可能性があるが、今後検証していきたい。

【曜日・時限別 利用件数および相談内容の内訳】

日本語相談室は、基本的に予約制で 1 コマに 2 件相談を受け付けられる設計となっており、試験期間を入れて各学期 15 週稼働している。春学期よりも、秋学期のほうが全体的に利用件数が多かったことがわかる。また、火曜日 3, 4 限は両学期とも、ほかの時間割帯よりも利用件数が少ないようである。今年度 1 限に初めて配置をしたが、ほかの時間割帯と同程度の利用件数となった。今後の参考にしていきたい。

【曜日・時限別 利用件数】

2020 年度春学期 (オンライン)

	月	火	水	木	金
1 限					
2 限	13	12	9		
3 限		8	9	15	14
4 限	8	5	5	13	4

2020 年度秋学期 (オンライン)

	月	火	水	木	金
1 限			15		
2 限	15	13	17	22	20
3 限	19	6	17	22	20
4 限	17	9			

【相談内容内訳】

相談内容	件数
卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）	134
就職活動（エントリーシート等）	13
レポート（授業、ゼミ等）	91
奨学金関係（申請書類、面接練習等）	28
発表指導（授業、ゼミ等）	9
学会発表・予稿集・投稿論文	3
学習方法指導（練習、日本語能力試験対策指導も含む）	24
スピーチコンテスト	20
その他	5
合計	327

日本語相談室担当者コメント

今年度の日本語相談室は池袋、新座、テレプレゼンスの区別なく、オンライン相談室として開室した。そのため、学生は自分の希望する時間帯に自由に予約することができた。2019年度と異なるのは、資料の提出の仕方である。2019年度までは日本語相談室（M909）のポストに資料を投函することになっていたが、今年度は、日本語相談室宛のeメールで資料を提出させた。担当者は同じアドレスを共有して、学生とやり取りを行った。相談の際はオンライン上で学生の書いた資料を画面共有し、それを見せながら、指導や助言を行った。資料の返却はZoomのチャット機能やeメールを使用した。相談室担当の教員も相談に来た学生もZoomの操作に戸惑うことなく時間を有効に使い、実施することができた。

今年度はオンライン相談室での実施のため、全体（池袋、新座、テレプレゼンス）について報告する。

今年度はコロナ禍の影響により、留学生の在籍総数が減っており、2019年度の394件から67件減少し、327件の利用件数であった。昨年度の相談内容と比較して一番差があったのは、51件から13件に減った「就職活動（エントリーシート等）」である。コロナ禍は留学生の就職活動にも大きく影響しており、就職活動の相談は少なかった。それに反して、2019年度に比べ「卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）」は5件増、「レポート（授業、ゼミ等）」は7件増、「奨学金関係（申請書類、面接練習等）」は6件増となっている。これらは、学部生、大学院生を問わず、多くの学生が利用しており、例年同様、同一学生による定期的な相談もあったが、相談室の利用方法がこれまでのチラシの配布やオリエンテーションでの日本語相談室の案内によって、周知されてきた様子が窺える。また、今年度は留学生の総数が減少したにもかかわらず、昨年度より「卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）」「レポート（授業、ゼミ等）」「奨学金関係（申請書類、面接練習等）」の利用者数が微増した理由として、相談室がオンラインであったことが考えら

れる。自宅からすぐにアクセスできるため、利用しやすかったのであろう。課題としては、卒業論文や修士論文の提出時期に 30 ページ以上の論文を一度に提出する学生が目立ったことである。担当者も内容を確認する準備にかなりの時間を割いて対応しているが、相談室の 1 枠は 50 分であるため、一度に指導を行うことは難しい。何度か相談室に通って、よりよい論文が提出できるように促すなど、事前に相談室の利用方法について助言できるといいかもしれない。

このほか「学習指導方法」は 12 件減、「スピーチコンテスト」は 8 件減であった。今年度は特別外国人留学生在が非常に少なく、それが影響していると思われる。日本語クラスでも日本語相談室が利用できることを引き続き伝えていきたい。

来年度も日本語相談室の認知度を高め、多くの学生が利用できるように、周知を行っていききたい。

【2011 年度—2020 年度 利用件数推移】

	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度	2019 年度	2020 年度
特別外国人学生	26	45	62	46	29	88	67	42	63	5
正規学部生	29	18	33	52	76	98	70	92	126	153
正規大学院生	89	90	86	138	311	242	268	304	205	167
その他	0	0	0	1	8	0	2	0	0	2
合 計	144	153	181	237	424	428	407	438	394	327
増 減	100	106.3	125.7	164.6	294.4	297.2	282.6	304.2	273.6	227.1

秋学期の FD 委員会（第 5 回）では、新型コロナウイルス禍の日本語相談室運営を取り上げ、特に秋学期は例年と同様の運営ができたことを確認した。

利用件数の月別推移をみると、期末レポートの提出時期である 7 月と 1 月は正規学部生による利用が多く、修士論文や博士論文の提出時期に近い 11 月から 1 月は正規大学院生による利用が多い。従来と同様に、正規大学院生及び学部生の試験期間や論文提出時期において日本語相談室が有効に活用されていることがわかる。

また週ごとの日本語相談室の稼働状況も確認した。学期開始時は稼働率が低い、修士論文や卒業論文の締め切り前は稼働率が高く、予約がとりにくい状況になっていることを数字で確認することができた。2022 年度開始予定の本学の RSP 事業（新しいタイプの留学生受け入れ事業）に合わせて、日本語相談室の今後の模索しているところであり、大変有用な情報を共有することができた。

さらに 2020 年度の相談内容内訳である。2020 年度は 2019 年度より 64 件減少した 330 件となったが、「卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）」は前年度の 129 件から 134 件、「レポート（授業、ゼミ等）」は 84 件から 91 件、「奨学金関係（申請書類、面接練習等）」は 22 件から 28 件に増加した。一方、「就職活動（エントリーシート等）」

は 51 件から 13 件と大幅に減少した。これは、新型コロナウイルス感染症拡大が一部の就職活動に影響を及ぼした結果であるともいえる。また、論文やレポート、奨学金関連など、留学生が大学及び大学院生活を送る上で不可欠な日本語についての相談は前年度に引き続き増加傾向にあることがわかる。

相談記録からは、特に論文添削の相談で事前に寄せられる分量が大量で、事前準備に負担がかかるケースがあることも共有した。

4. 2020 年度立教大学漢字検定試験実施報告

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により当初予定していた漢字検定の実施すべてを見送った。

5. 2020 年度 日本語自主学習用図書貸し出し実施報告

日本語教育センターでは、1 回 3 冊、2 週間までの図書の貸し出しを行っているが、2020 年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により大学が入構制限を行っていたことに合わせて、図書の貸し出しを行わなかった。

6. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告

『立教大学留学生による日本語スピーチコンテストー東京セントポールライオンズクラブ杯ー』は例年春学期に開催してきたが、2020年度は11月28日に新型コロナウイルス感染症拡大の影響により秋学期にオンラインで開催した、当日は11名の留学生が登壇した。

実施の詳細は、日本語教育センターホームページ

<https://cjle.rikkyo.ac.jp/contest/6th.default.aspx>

を参照されたい。

スピーチコンテストの成果物として、『第9回 立教大学留学生による日本語スピーチコンテストー東京セントポールライオンズクラブ杯ースピーチ文集』を刊行した。

7. 日本語教育センターシンポジウム実施報告

本学は、2022 年秋を目指して、新しいタイプの留学生受け入れ準備を進めている。この動きの中で、日本語教育センターは、2018 年度、2019 年度と多様な正規学部留学生を受け入れに関連したテーマでシンポジウムを企画してきた。

2020 年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響によりオンラインでの開催となったが、引き続き同じ課題に取り組むこととした。

具体的にはテーマを「正規学部留学生受け入れの新時代に向けてー 海外の中等教育の事情に学ぶー」とし、2020 年 12 月 12 日（土）にオンラインで開催した。

登壇者は、タン テイ ミビン氏（ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学 日本言語文化学部 講師）、ルッシー ノヴァリダ リドワン氏（ジョグジャカルタ第一国立高校教員・インドネシア全国中学校・高校日本語教師会会長）、ガルバドラッハ トゴス（新モンゴル学園 専務理事）、学内からは池田 伸子氏（国際化推進機構長、異文化コミュニケーション学部教授）、丸山 千歌氏（日本語教育センター長、異文化コミュニケーション学部教授）であった。

海外からの登壇者に現地の日本語教育および日本留学についてご講演いただくとともに、本学の国際化の方向性および日本語教育の今後の取り組みについて発題があり、最後に全体協議を行った。本企画の関係者以外の参加は、学内の教職員をはじめ、学生、国内外の学外の方で 48 名であった。

当日の成果は冊子体『シリーズ 新しい日本語教育を考える 10』として刊行した。

8. 日本語教育センターニュースレター発行報告

昨年度にひきつづき「日本語教育センターニュースレター」を発行した。今年度の授業形態が全面的にオンライン授業だったことから、紙媒体にはせず、すべてオンラインで配信した。スピーチコンテストや日本語クラスの紹介、留学生向けのグローバル教養副専攻について特集を組んだ。また、学内教職員の協力をえて、留学生へのメッセージを積極的に発信した。詳細は日本語教育センターホームページ

<https://cjle.rikkyo.ac.jp/newsletter/>

を参照されたい。

9. 短期日本語プログラム報告

短期日本語プログラムは、2020 年度からはシドニー大学の団体受け入れがない回が発生するため、参加者を安定的に確保しながら運営することを課題に準備を進めてきたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、全ての回について実施を見送ることとなった。しかし見送りに至る検討の中で、オンラインによる短プロ開催の可能性が検討され、2021 年度実施計画にはオンライン開催の回を設けることとなった。また、対面で計画しているものについても社会状況を見ながらオンラインでの実施に切り替える方向も模索することとした。実施計画書はその都度実務委員会で共有されてきたが、あらためて第 5 回 FD 委員会でその内容を確認した。

10. 新型コロナウイルス対応まとめ

今年度の新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けての様々な対応は、実務委員会、日本語教育センター運営会議でその都度協議の上方針を確認し、実施後は共有をしてきた。以下、簡単に主な対応をまとめておく。

(1) 日本語プレイスメントテスト

(A) 正規学部留学生

(A) -1 春学期

- ① PT は実施せず、全員 J6 に配置して授業をする

(他言語希望者は、次年度に第 3 言語として履修)

- ② 春学期最後あたりに日本語 PT を実施、秋学期は学生のレベルに合わせたレベル配置をして授業実施する。(新型コロナの状況により複数パターンを用意)

- ③ 個別対応対象者 (2 名)

(A) -2 秋学期

- ① 大学の方針(授業は春学期終わりまでオンライン、秋学期も原則オンライン)に従い、PT 実施を見送り、春学期「大学生の日本語」の単位を取得した学生は全員 J7、不合格となった学生は J6 に配置した。(レベル配置方針は従来通り)

(B) 特外生

(B) -1 春学期

- ①これまでのデータと、新入特外生の日本語学習歴にもとづき暫定的にレベル配置

通常オリエンテーションで実施するアンケートを事務局が google アンケートで情報集約 4 月 20 日中に国際センターに報告

② 授業第 1 週は、トライアルで履修 適宜、オンラインで面談、履修科目再配置

③ 5/6 以降 登録変更、履修科目確定

(修正期間：5/9 (土)～5/15 (金)に吸収、基本的には 5/11 (月)に対応)

(B) -2 秋学期

①大学の方針（授業は春学期終わりまでオンライン、秋学期も原則オンライン）に従い、PT 実施を見送り、継続学生については春学期の履修履歴にもとづきレベル配置、新規の学生については、日本語学習歴にもとづき暫定的にレベル配置

②授業第 1 週は、トライアルで履修 適宜、オンラインで面談、履修科目再配置

③9/28 以降 登録変更、履修科目確定

(修正期間：9/28 (月)～10/3 (土)に吸収)

(C) GLAP

(C) -1 春学期

①新入生 → 日本語力を問わない科目を履修するので PT なしで問題ない。

②2 年次 → 自由科目履修の希望なし

③留学から戻って 2 学期目の学生 2 名 → メール、zoom で履修相談対応

(C) -2 秋学期

①自由科目履修希望者 1 名に対し、メール、zoom で履修相談対応

(D) BD 研究科生

(D) -1 春学期

①新入生は日本語学習歴（年数、教科書、日能試）アンケートで暫定的な判定
あとは特外と同じフロー

(D) -2 秋学期

①特外の継続生と同じフローで対応

(E) 新規正規大学院生

(E) -1 春学期

BD 研究科と同様の対応（日本語学習歴のアンケート実施ととりまとめは日本語教育センター事務局）「総合日本語 6・8 は履修対象外」を明記

(E) -2 秋学期

特外の新入生と同様の対応（日本語学習歴のアンケート実施ととりまとめは日本語教育センター事務局）登録スケジュールで対応可能だったので「総合日本語 6・8」は履修可能とした。

(2) 日本語オリエンテーション情報の配信（4 月 22 日～4 月 27 日）

(2) -A 春学期（4 月 22 日～4 月 27 日）

新規特外生、継続特外生、正規大学院生、BD 研究科新入留学生、継続大学院生
(2) -B 秋学期(特外継続・新規:9月11日 大学院生継続:9月11日 大学院新規:9月15日)

新規特外生、継続特外生、新規正規大学院生、継続正規大学院生

(3) 科目担当者(兼任講師)とのオンライン授業についての打ち合わせ

(3) -A 春学期

期間:4月14日~4月16日(17組)

参加:科目コーディネーターと兼任講師

(3) -B 秋学期

担当者連絡会開催:9月8日(当日打ち合わせられない科目は翌日に zoom で実施)

参加:29名(事務局を含む)

(4) 日本語相談室オンライン対応

相談フローの構築(春学期)

HP改修(主に春学期、秋学期は情報更新が主)

(4) イベント・インターンシップ科目の対応

(4) -A 春学期

スピーチコンテスト延期、国際的協働のための国内インターンシップ不開講

(4) -B 秋学期

スピーチコンテスト 11月28日(土)オンラインによる開催

日本語教育センターシンポジウム 12月12日(土)オンラインによる開催

(5) 2020年度春学期および秋学期の特外生用科目の履修者数減への対応

① 新型コロナウイルスの影響による特外生受け入れ数の減少

国際化推進会議で承認された特外生受け入れ中止の方針により、特に秋学期は在籍する特外生の人数が激減することがわかったため、対応をとる必要が生じた。

秋学期の留学生受け入れについての大学の方針が春学期の早い段階で決定したことから、日本語教育センターの対応について、総長室への相談、日本語教育センター運営会議、国際化推進機構運営会議への報告などを早期に開始し、6月中旬には秋学期の対応の方向性について兼任講師を含む全体で共有、そのうえで時間割調整に入ることができた。関係の皆様のご理解とサポートに心から感謝したい。

(7) 中間・期末テスト体制

中間・期末テストはこれまで対面の設定で実施してきたが、すべてオンラインで対応できるよう整備した。初級 J1～J3+S クラス、中級 J4 以上、J8 科目のまとまりで方針を検討し、方向性を確認、実務委員会等の会議で報告を行った。

(8) 短期日本語プログラム

・7 月実施分の中止 (4 月 9 日国際化推進会議、部長会、4 月 15 日日本語教育センター運営会議)

・12 月実施分の中止 (6 月 24 日日本語教育センター運営会議、7 月 2 日国際化推進会議、部長会)

・1 月実施分の中止 (9 月 24 日国際化推進会議、部長会、9 月 30 日日本語教育センター運営会議)

秋学期には、短期日本語プログラムに関する海外協定校へのアンケート (対面・オンライン) を国際センター実施のアンケートの一部に含める形で実施し、実務委員会、日本語教育センター運営会議、国際化推進機構運営会議などで報告された。次年度の短期日本語プログラムのオンライン版は、このアンケート結果を踏まえて計画された。

11. センター員活動報告

池田伸子

研究論文

1. 「海外日本語教育—高度人材獲得の視点から言語文化政策としての日本語教育を再考する」『先の見えない今～人、地域、文化、社会をつなぐ「ことば」を考える (立教大学異文化コミュニケーション学部研究叢書 III)』晃洋書房、2020 年、32－70 頁
2. 「オンラインによる日本語学習支援活動を通じた学びに関する質的研究—KJ法による自由記述の分析を通して—」『日本語・日本語教育』立教大学日本語教育センター、2021 年、21－34 頁

報告

1. 「立教大学日本語教育センターにおけるオンライン授業の取り組み」(藤田恵・数野恵理・金庭久美子・小林友美・任ジェヒ・小松満帆・丸山千歌との共同執筆)『日本語・日本語教育』第 4 号、立教大学日本語教育センター、2021 年、1－20 頁

講演

1. 「大きく社会を変えるために、まず小さく始めてみませんか」2020 年栃木県女性団体連絡協議会研修会、於栃木県男女共同参画センター、2020 年 11 月 5 日

研究助成

1. 2017.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「大学日本語教育プログラムを対象とした開発型評価—持続可能で有用な開発型評価とは」（研究分担者）（課題番号：17K02863）

丸山千歌

研究論文

1. 「地域・文化・社会をつなぐ日本語教育 —日本語教育人材の養成・研修の観点から—」『先が見えない今～人、地域、文化、社会をつなぐ「ことば」を考える（立教大学異文化コミュニケーション学部研究叢書 III）』晃洋書房、2020 年、22－31 頁
2. 「日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触—日本に住み、働きつづける日本留学経験者Cの場合—」（小澤伊久美との共同執筆）『日本語・日本語教育』立教大学日本語教育センター、2021年、35－54頁

報告

1. 「立教大学日本語教育センターにおけるオンライン授業の取り組み」（藤田恵・数野恵理・金庭久美子・小林友美・任ジェヒ・小松満帆・池田伸子との共同執筆）『日本語・日本語教育』第4号、立教大学日本語教育センター、2021 年、1－20 頁

研究発表

1. 「組織的な学びを促す評価—大学日本語教育部門構成員への聞き取り調査から—」、第 21 回日本評価学会大会、zoom による online 開催、2020 年 11 月 28 日（小澤伊久美との共同発表）
<http://evaluationjp.org/activity/start.htm>
2. 「間モード再構築法 としての PAC 分析」（小澤伊久美・サトウタツヤとの共同ポスター発表）、2020 年度人間科学研究所年次総会、zoom による online 開催、2021 年 2 月 27 日～3 月 6 日、立命館大学人間科学研究所、https://www.ritsumeihuman.com/20th_anniversary/
3. 「発展的評価を用いたプログラム評価の活動」、日本語教育とプログラム評価研究会「公開シンポジウム 日本語教育におけるプログラム評価の意義」、zoom による online 開催、2021 年 3 月 6 日

講演

1. 「パンデミック中の日本語オンライン授業の方針・方法・評価—立教大学の取り組み—」（数野恵理と共同で講演）、2020 年度インドネシア日本語中学校・高校日本語教師会 オンライン国際セミナー・ワークショップ、zoom による online 開催、2020 年 8 月 8 日
2. 「PAC 分析入門」（小澤伊久美と共同で講義）、小出記念日本語教育研究会主催ワークショップ、zoom による online 開催、2021 年 2 月 26 日

研究助成

1. 2017.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「大学日本語教育プログラムを対象とした開発型評価—持続可能で有用な開発型評価とは」（研究分担者）（課題番号：17K02863）
2. 2020.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「「日本とつながって生きる」選択から見える日本語教育の新時代」（研究代表者）（課題番号：20K00707）

数野恵理

報告

1. 「新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴う日本語教育プログラムの対応—2020 年度の立教大学日本語教育センターの取り組み—」（藤田恵・金庭久美子・任ジェヒ・小林友美・小松満帆・池田伸子・丸山千歌との共同執筆）『日本語・日本語教育』第 4 号、立教大学日本語教育センター、2021 年、1－20 頁
2. 「レジュメ作成とビジターセッションにおけるレジュメ発表」（金庭久美子との共同執筆）『日本語・日本語教育』第 4 号、立教大学日本語教育センター、2021 年、131－146 頁

研究ノート

1. 「第二言語としての日本語ナラティブ作文の評価基準とルーブリックの開発」（坪根由香里・トンプソン美恵子・影山陽子との共同執筆）『大阪観光大学紀要』第 21 号、大阪観光大学、2021 年（印刷中）

研究発表

1. 「日本人大学生が書いたナラティブ作文の評価—日本語ナラティブ作文用の評価項目を用いて—」（坪根由香里・トンプソン美恵子・影山陽子との共同発表）日本語教育学会 2020 年度秋季大会、zoom による online 開催、2020 年 11 月 29 日
2. 「プロンプトによるナラティブ作文の評価の違い—タイプの異なる『よいナラティブ』の提示—」（影山陽子、坪根由香里、トンプソン美恵子との共同発表）第 52 回アカデミック・ジャパニーズ・グループ定例研究会、zoom による online 開催、2021 年 2 月 13 日
3. 「第二言語としての日本語ナラティブ作文に対する日本語母語話者教師の評価観点—good writing の評価はどう異なるか—」（坪根由香里・トンプソン美恵子・影山陽子との共同発表）早稲田大学日本語教育学会 2021 年春季大会、zoom による online 開催、2021 年 3 月 20 日

講演

1. 「パンデミック中の日本語オンライン授業の方針・方法・評価—立教大学の取り組み—」（丸山千歌との共同講演）2020 年度インドネシア日本語中学校・高校日本語教師会 オンライン国際セミナー・ワークショップ、zoom による online 開催、2020 年 8 月 8 日

研究助成

1. 2019.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（B））「日本語ライティングにおけるナラティブの Good Writing 探究と評価法の開発」（研究分担者）（課題番号：19H01274）

金庭久美子

研究論文

1. 「YNU コーパスにおける「テシマウ」の使用の特徴」（金蘭美・曹娜との共著）、『日本語・日本語教育』第4号、立教大学日本語教育センター、2021年、55－73頁
2. 「作文支援システムに必要な「支援」—日本語学習支援システムの変遷と展望—」（金蘭美との共著）、『ときわの杜論叢』8号、横浜国立大学国際戦略推進機構、2021年（印刷中）
3. 「日本語：日本語インタビューテストにみられる応答開始時のレベル別特徴—「くり返し」と「考えている」表現に注目して—」（西部由佳・岩佐詩子・坂井菜緒・萩原孝恵・奥村圭子との共著）、『小出記念日本語教育論集』29号、小出記念日本語教育研究会、2020年（査読有・印刷中）
4. 「「てしまう」の指導法に関する一考察—物語タスクにおける使用状況の分析から—」（金蘭美との共著）、『日本語教育方法研究会誌』Vol.27 No.1、日本語教育方法研究会、2021年、4－5頁

報告

1. 「新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴う日本語教育プログラムの対応—2020年度の立教大学日本語教育センターの取り組み—」（藤田恵・数野恵理・任ジェヒ・小林友美・小松満帆・池田伸子・丸山千歌との共著）、『日本語・日本語教育』第4号、立教大学日本語教育センター、2021年、1－20頁
2. 「レジュメ作成とビジターセッションにおけるレジュメ発表」（数野恵理との共著）、『日本語・日本語教育』第4号、立教大学日本語教育センター、2021年、131－146頁

研究発表

1. 「日本語学習支援システムの変遷と展望」、口頭発表（企画発表）、韓国日本語學會 第41、42回学術大会、於韓国漢陽大学（オンライン）、2020年9月19日
2. 「初級から学べる段階別学習型作文支援システムの構築—データ収集システムの開発—」（金蘭美・川村よし子との共同発表）、ポスター発表、日本語教育学会 2020年度秋季大会、於日本語教育学会（オンライン）、2020年11月29日
3. 「生の会話を「聞き手参加型聴解」教材へデザインする」（奥野由紀子・山森理恵との共同発表）、口頭発表、第7回年次大会、於言語文化教育研究学会（オンライン）、2021年3月7日

講演

1. 「聞き手参加型聴解の実践方法」、日本語専門家招聘特別講演、於韓国漢陽サイバー大学（オンライン）、2020年9月12日（招待講演）

研究助成

1. 2019.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「初級から学べる段階別学習型作文支援システムの構築」（研究分担者）（課題番号：19K00734）

藤田恵

研究論文

1. 「専門教育機関で開講される日本語科目の位置づけと日本語教員が果たし得る役割に関する一考察—視覚特別支援学校専攻科での実践例をもとに—」（河住有希子との共同執筆）『日本語教育方法研究会誌』Vol.27 No.1、日本語教育方法研究会、2021年、30—31頁

報告

1. 「新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴う日本語教育プログラムの対応—2020年度の立教大学日本語教育センターの取り組み—」（数野恵理、金庭久美子、任ジェヒ、小林友美、小松満帆、池田伸子、丸山千歌との共同執筆）『日本語・日本語教育』第4号、立教大学日本語教育センター、2021年、1—20頁

任ジェヒ

研究論文

1. 「バリエーション学習のあり方に関する一考察—日本語学習者による人称表現の使い分けを手がかりに—」『日本語・日本語教育』第4号、立教大学日本語教育センター、2021年、89—109頁

報告

1. 「新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴う日本語教育プログラムの対応—2020年度の立教大学日本語教育センターの取り組み—」（藤田恵、数野恵理、金庭久美子、小林友美、小松満帆、池田伸子、丸山千歌との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第4号、立教大学日本語教育センター、2021年、1—20頁

研究発表

1. 「韓国語を母語とする日本語学習者の読解における推測ストラテジー」（野田尚史との共同発表）韓国日本語学会第41・42回統合学術大会、オンライン開催、2020年9月19日

研究助成

1. 2020.4～至現在 科学研究費助成金（若手研究）「日本語学習者の多様な言語生活に対応したバリエーション教育開発のための基礎研究」（研究代表者）（課題番号：20K13092）

学位論文

1. 『「学習者視点」に基づく「ことばの多様性」の学習に関する研究－「人称表現」における多様性を対象として－』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文、2020 年

小林友美

研究論文

1. 「日本人学部生と留学生の質問者による情報収集の談話展開の方法—応答者の質問者に対する印象評価とフォローアップインタビューから—」『日本語・日本語教育』第 4 号、立教大学日本語教育センター、2021 年、75－87 頁

報告

1. 「第 4 章 5. すぐれた要約力の受講インタビューの談話にするための学習方法」『講義理解における要約力に関する研究』研究代表者 佐久間まゆみ 平成 28 年～令和元年度（2016 年～2019 年度）科学研究補助金 基盤研究（C）（一般）課題番号(16K02825)研究成果報告書、2020 年、150－152 頁
2. 「新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴う日本語教育プログラムの対応—2020 年度の立教大学日本語教育センターの取り組み—」（藤田恵・数野恵理・金庭久美子・任ジェヒ・小松満帆・池田伸子・丸山千歌との共著）、『日本語・日本語教育』第 4 号、立教大学日本語教育センター、2021 年、1－20 頁

研究助成

1. 2020.4～至現在 科学研究費助成金（若手研究）「相互作用を意識した会話教育のための教材開発」（研究代表者）（課題番号：20K13089）

小松満帆

研究論文

1. 「日本語演劇ワークショップの試み—フランス国立東洋言語文化大学での「演劇アトリエ」の活動報告」『日本語教育方法研究会誌』Vol.27 No.1、日本語教育方法研究会、2021 年、56 - 57 頁

報告

1. 「新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴う日本語教育プログラムの対応—2020年度の立教大学日本語教育センターの取り組み—」(藤田恵・数野恵理・金庭久美子・任ジェヒ・小林友美・池田伸子・丸山千歌との共著)、『日本語・日本語教育』第4号、立教大学日本語教育センター、2021年、1-20頁

12. 2020 年度 F D 記録

(1) 担当者連絡会など

①2020 年度 FD 委員会 (2020 年 7 月 17 日、2020 年 9 月 8 日、2021 年 1 月 22 日、2021 年 1 月 29 日、2021 年 2 月 19 日、2021 年 3 月 1 日 計 6 回)

2020 年度の FD 計画に沿って計画的に進めた。活動の詳細は以下の通りである。

- a. 2020 年 7 月 17 日 (金) 実務委員会終了後〔場所〕オンライン〔参加者数〕9 名〔議題〕新型コロナウイルスに関連する新学期の日本語教育センターの対応について
- b. 2020 年 9 月 8 日 9 : 00-16 : 00〔場所〕オンライン〔参加者数〕29 名〔議題〕日本語教育科目運営について、各科目の振り返りおよび引き継ぎ、個人情報の取り扱い注意ほか
- c. 2021 年 1 月 22 日 (金) 17 : 15-18 : 45〔場所〕オンライン〔参加者数〕12 名〔議題〕(研修) ユニバーサルコミュニケーションデザインを考える (1)
- d. 2021 年 1 月 29 日 (金) 17 : 15-18 : 45〔場所〕オンライン〔参加者数〕14 名〔議題〕(研修) ユニバーサルコミュニケーションデザインを考える (2)
- e. 2021 年 2 月 19 日 (金) 実務委員会終了後〔場所〕オンライン〔参加者数〕10 名〔議題〕2020 年度の FD 活動の課題 (短期日本語プログラムの運営および日本語科目のさらなる開発と改善)、来年度の FD 活動の課題ほか
- f. 2021 年 3 月 1 日 (火) 9 : 00-16 : 00〔場所〕オンライン〔参加者数〕29 名〔議題〕日本語教育科目運営、各科目の振り返りおよび引き継ぎ、新型コロナウイルスの影響による次年度の日本語プログラム運営ほか

(2) 短期日本語プログラムの運営についての検討

短期日本語プログラムは、2020 年度からはシドニー大学の団体受け入れがない回が発生するため、参加者を安定的に確保しながら運営することを課題に設定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、全ての回について実施を見送ることとなった。しかし見送りに至る検討の中で、オンラインによる短プロ開催の可能性が検討され、2021 年度実施計画にはオンライン開催の回を設けることとなった。また、対面で計画しているものについても社会状況を見ながらオンラインでの実施に切り替える方向も模索することとした。実施計画書はその都度実務委員会で共有されてきたが、あらためて第 5 回 FD 委員会での内容を確認した。

(3) 日本語科目のさらなる改善と開発

日本語教育センター科目は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を大きく受け、FD 活動は主にオンラインによる授業および日本語相談室体制の開発を課題として取り組んだ。

第1回では1学期の活動について、レベル判定、オンラインツール、ネット環境、教材、授業活動、日本語相談室、引継ぎ、コーディネーション関連など、観点を整理して振り返りを行い、秋学期に向けた課題を確認した。第5回では、コロナ禍における日本語相談室の運営状況を振り返り、特に秋学期は例年と同様の運営ができたことを確認した。また週ごとの日本語相談室の稼働状況も確認し、今後の展開の素地を作った。さらに、2022年秋学期から開始するRSP事業用の集中日本語クラス用の教材開発も取り上げ、概要とこれまでの進捗を確認するとともに、教材開発例を共有し協議を行った。

兼任講師も参加する第2回と第6回は各学期の振り返りと次学期の課題を確認するとともに、大学の授業方針や留学生の受け入れ動向、日本語教育センターの対応方針などを共有した。各科目担当者と2単位設計のJ8科目(全カリ言語自由科目)の科目運営も確認した。

第3,4回は今年度臨時で行った活動である。日本語教育センターの事業として展開しているプログラム評価活動の一環として、ユニバーサルコミュニケーションデザインに関する研修会を開催し、多様な情報の受け手を想定した発信活動についての理解を深めた。

当初活動を予定していた2020年度より開設する国際的協働のための国内インターンシップは、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により未開講となった。このためFD活動には組み込まなかったが、次年度は対面、オンライン両方の実施を想定して計画した。

(4) 2020年度の学生による評価アンケート結果(特別外国人学生対象J0～J7)

日本語教育センターでは、特別外国人学生用日本語科目について、J0からJ7レベルの日本語科目を履修したプログラム修了予定学生(帰国予定学生)を対象に日本語プログラムに関するアンケートを実施している。国際センターの協力によりウェブによるアンケートを実施し、春学期55名、秋学期(集計中)から回答を得た。

質問内容は以下の通りで、自由記述以外は、5: はい 4: まあそうである 3: どちらともいえない 2: あまりそうでない 1: いいえ の5段階の選択式で回答を得た。

- 1 以前より日本語を聞いて理解できるようになった。

I can listen and understand Japanese better than before.

- 2 以前より日本語を話すことができるようになった。

I can speak Japanese better than before.

- 3 以前より日本語を読んで理解できるようになった。

I can read and understand Japanese better than before.

- 4 以前より日本語で書く力が伸びた。

I can write Japanese compositions (or reports) better than before.

- 5 以前より多くの日本語の単語を使えるようになった。

I expanded my Japanese vocabulary, and use it in my spoken/ written Japanese.

6 以前より多くの文型を使えるようになった。

I can speak/write Japanese using different sentence patterns.

7 日本語で発表したりディスカッションをしたりする力が伸びた。

My ability to discuss and give a presentation in Japanese improved.

8 日本語で発表したりディスカッションをしたりする自信がついた。

My confidence to discuss and give a presentation in Japanese increased.

9 宿題は日本語の勉強の役に立った。

The homework helped me to learn Japanese.

10 日本語の授業を通して、日本の文化や社会について考えるようになった。

The Japanese class's activities help me think about Japanese social and cultural issues.

11 教師のクラスでの学生への説明や指示は明確だった。

My teachers gave clear instructions and explanations in class.

12 日本語で話す機会が十分にあった。

I had enough time to speak in Japanese during each class.

13 立教の日本語科目数に満足している。

I am happy with the variation of the Japanese classes of Rikkyo University.

14 1クラスの学生の人数は適当だった。

The number of students per Japanese class was appropriate.

15 立教の日本語プログラムに満足している。

Overall, I am happy with the Japanese course of Rikkyo University.

自由記述

立教の日本語プログラムでいいと思った点があれば書いてください。

Please write freely about the Japanese course of Rikkyo University, especially the ways in which it was good.

立教の日本語プログラムで改善すべきだと思った点があれば書いてください。

Please write freely about the Japanese course of Rikkyo University, especially the ways in which it was not good, and any suggestions for improvement.

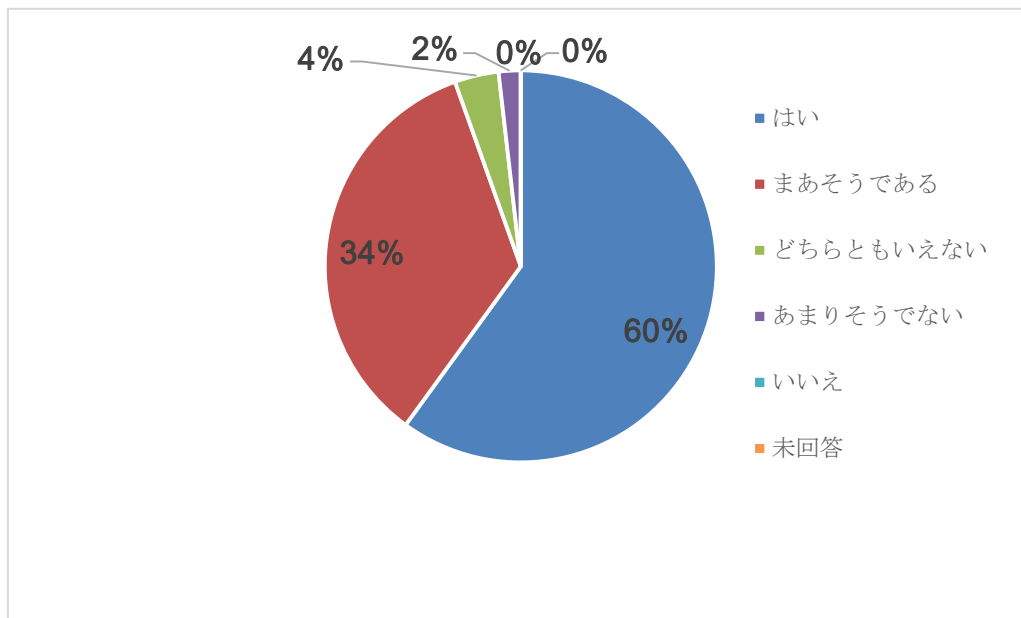
アンケートに対する回答者数 137 名、回収率 88.4%で、結果は以下の通りとなった。

春学期は、4 技能の向上、語彙力の向上、書く力の向上、教師のインストラクション、クラス人数の適正さ、科目数、全体的な満足度などに対する評価が非常に高い。ディスカッションをしたりする力、それに対する自信、日本の文化社会への理解について考えるようになったかについての評価はやや高い。

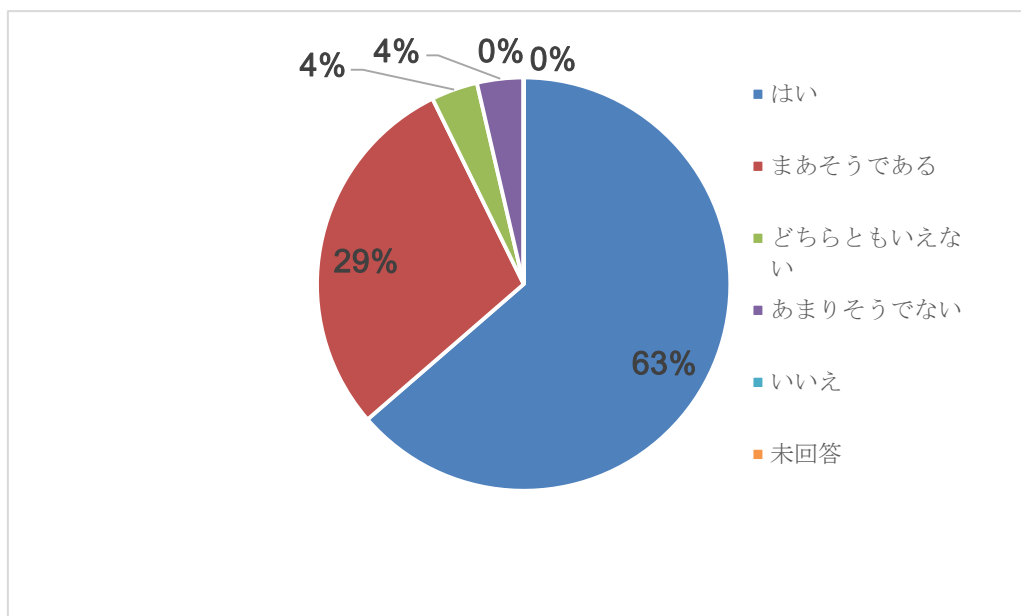
自由記述では、教師の対応やインタラクティブな授業運営、教師の専門性、日本語による日本語クラスの展開科目数、授業の構成などについて具体的で肯定的な評価があった。一方で、読解教材に表れる語彙の多さ、宿題の量が多い、小テストが多いなどのコメントがあった。

【2020 年度春学期プログラム修了予定学生アンケートの結果の内訳】（数値は%）

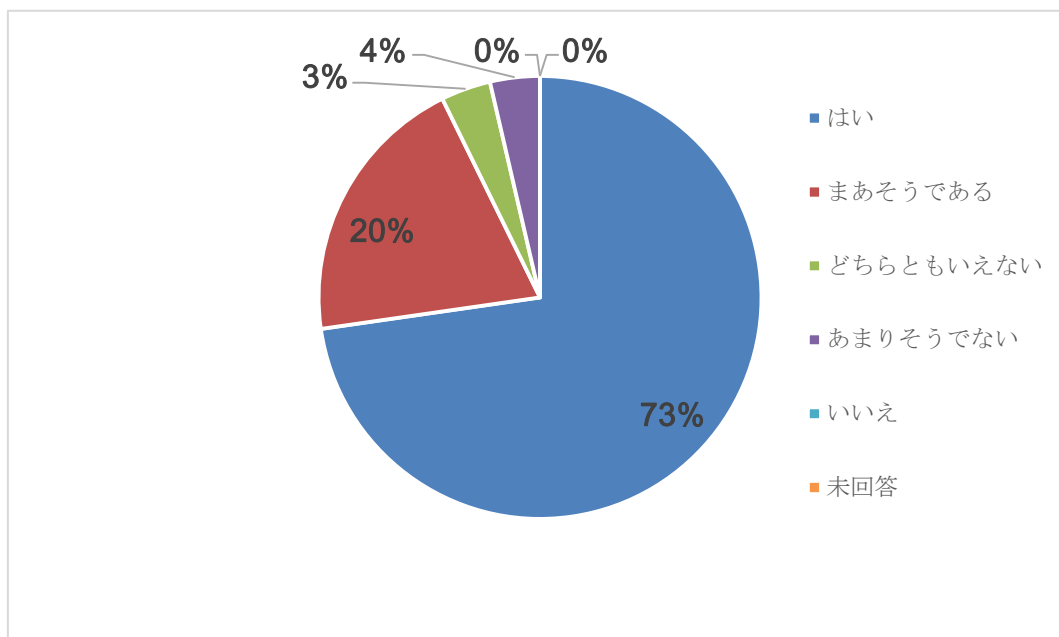
1. 以前より日本語を聞いて理解できるようになりましたか？



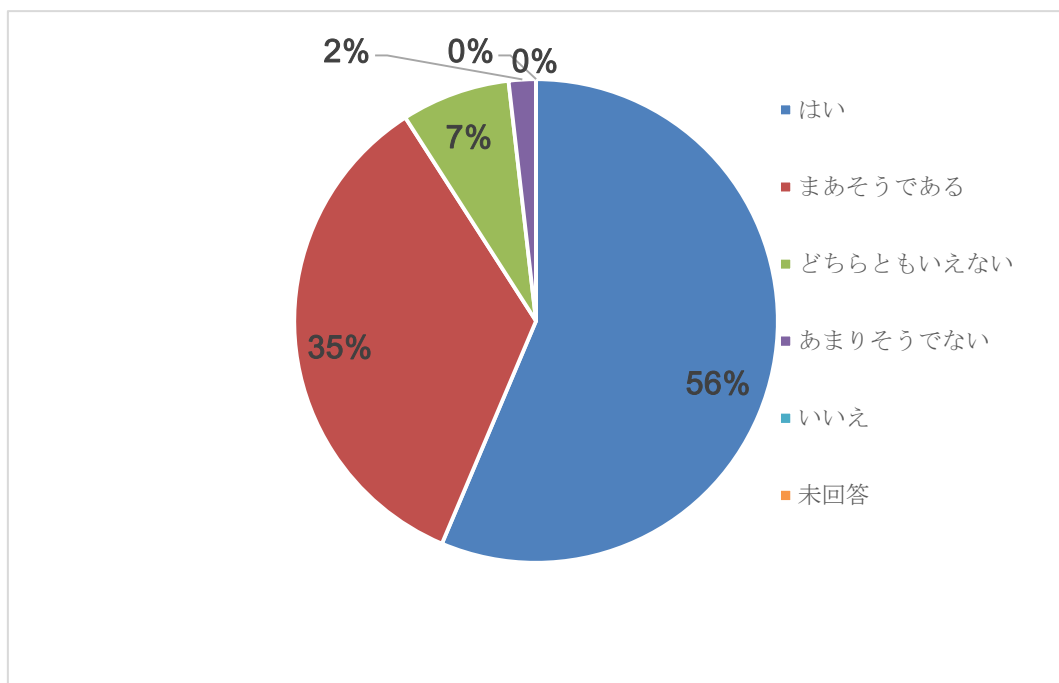
2. 以前より日本語を話すことができるようになりましたか？



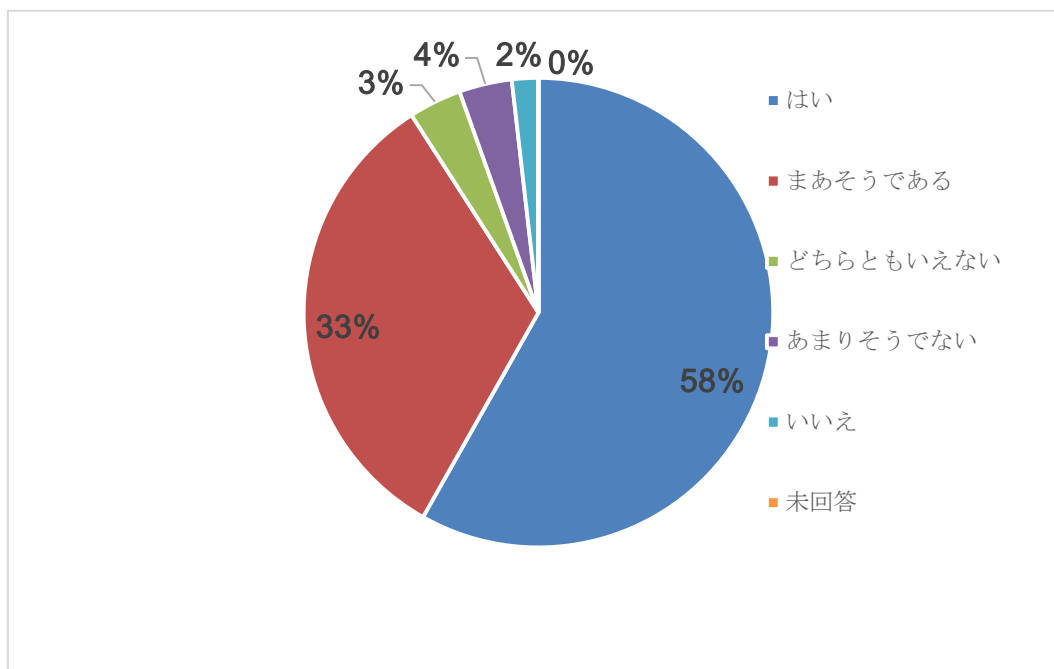
3. 以前より日本語を読んで理解できるようになりましたか？



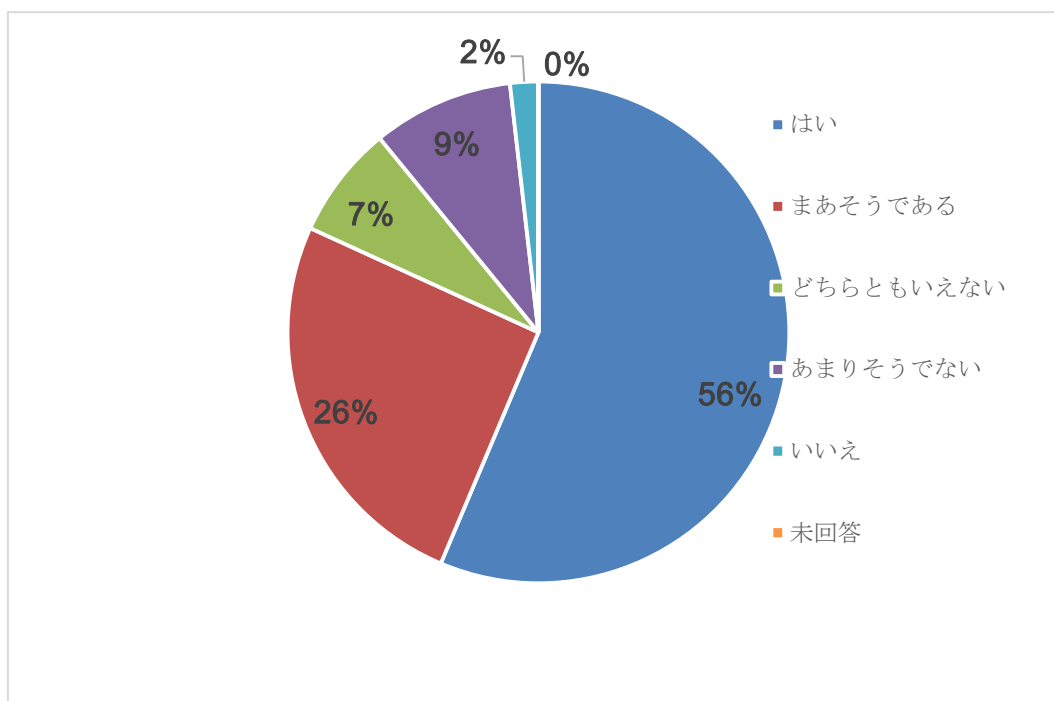
4. 以前より日本語で書く力が伸びましたか？



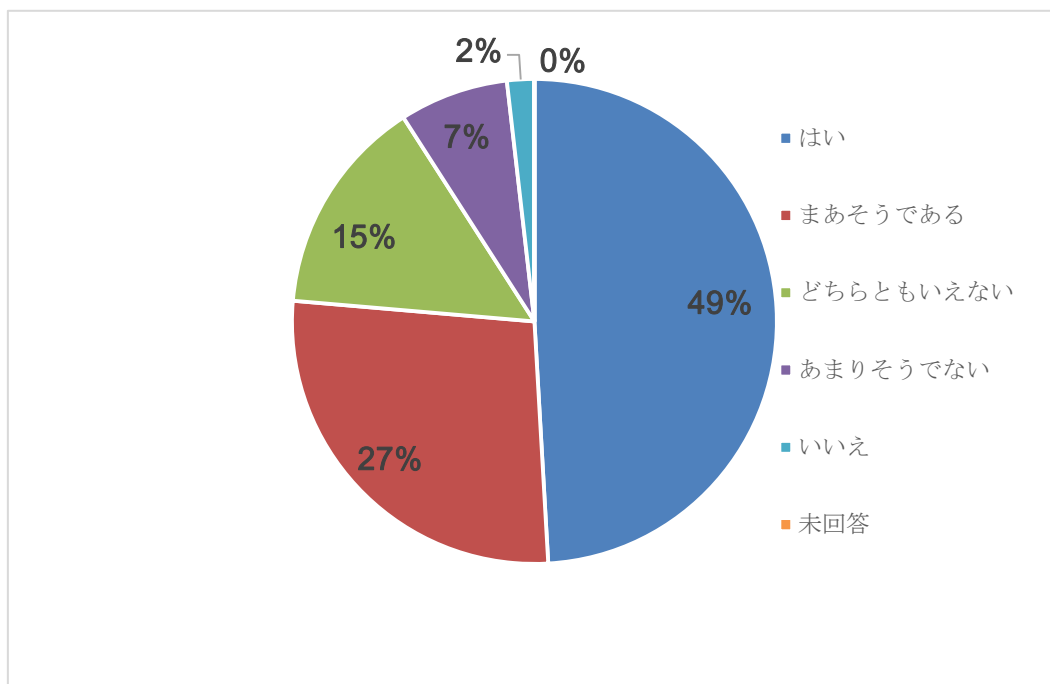
5. 以前より多くの日本語の単語を使えるようになりましたか？



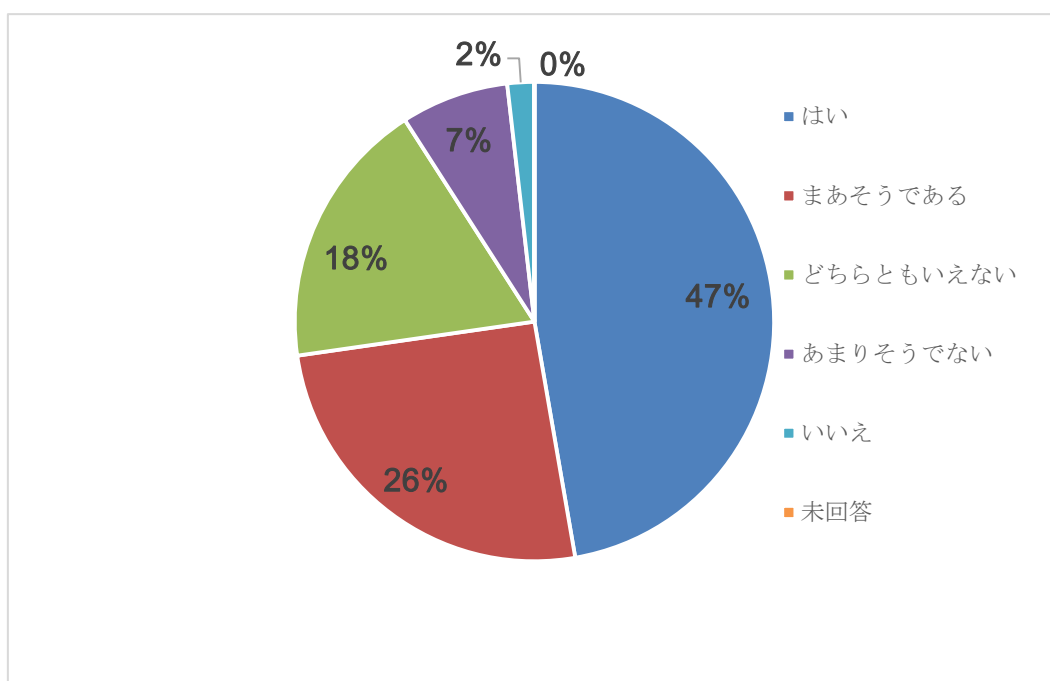
6. 以前より多くの文型を使えるようになりましたか？



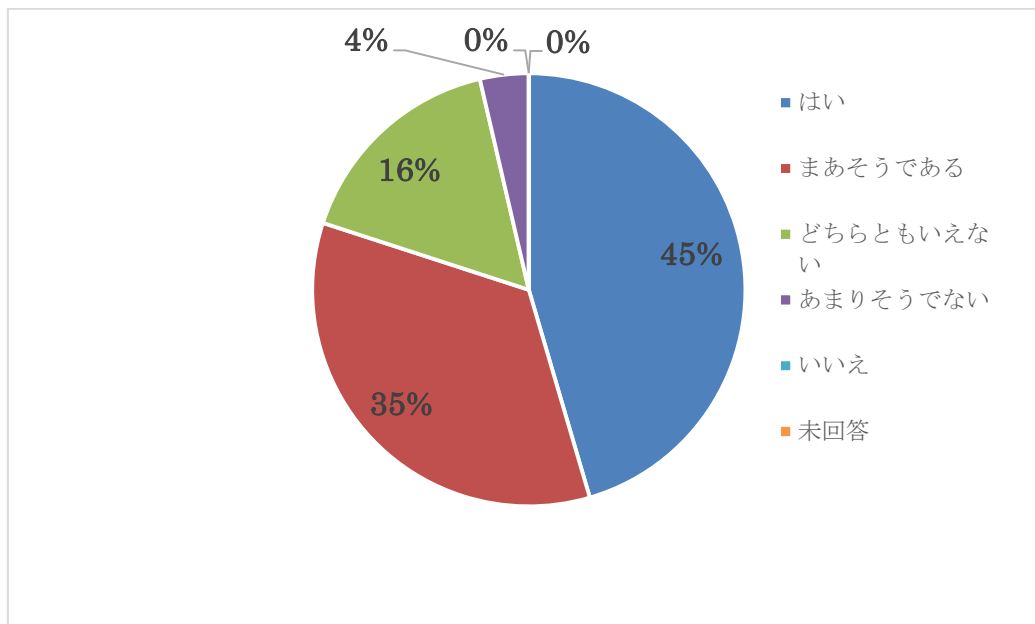
7. 日本語で発表したりディスカッションをしたりする力が伸びましたか？



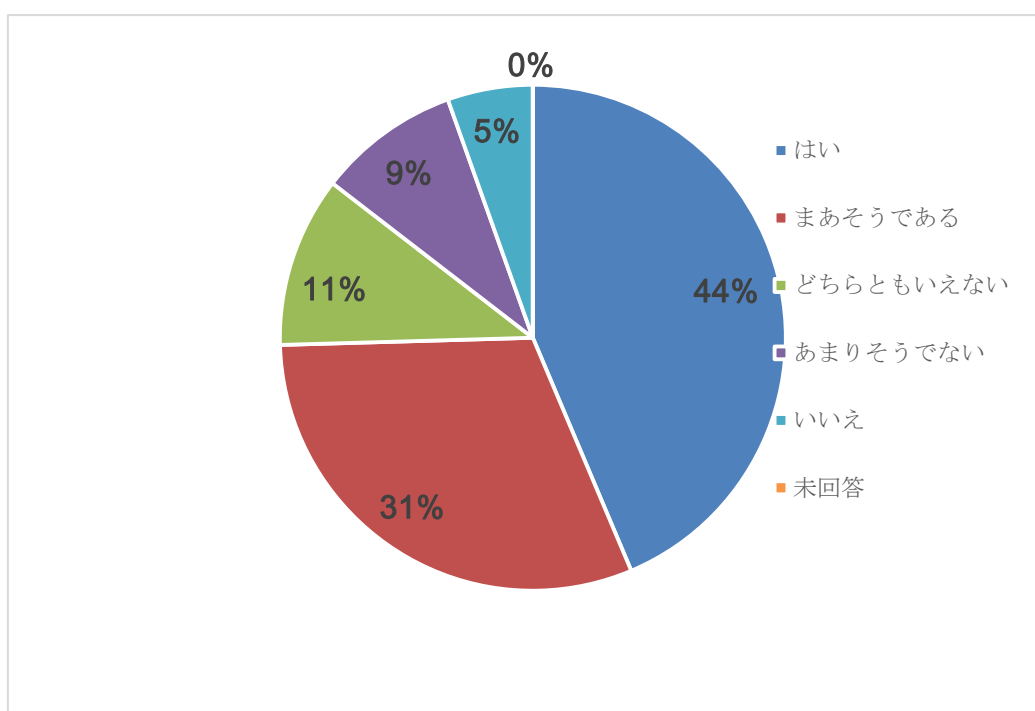
8. 日本語で発表したりディスカッションをしたりする自信ができましたか？



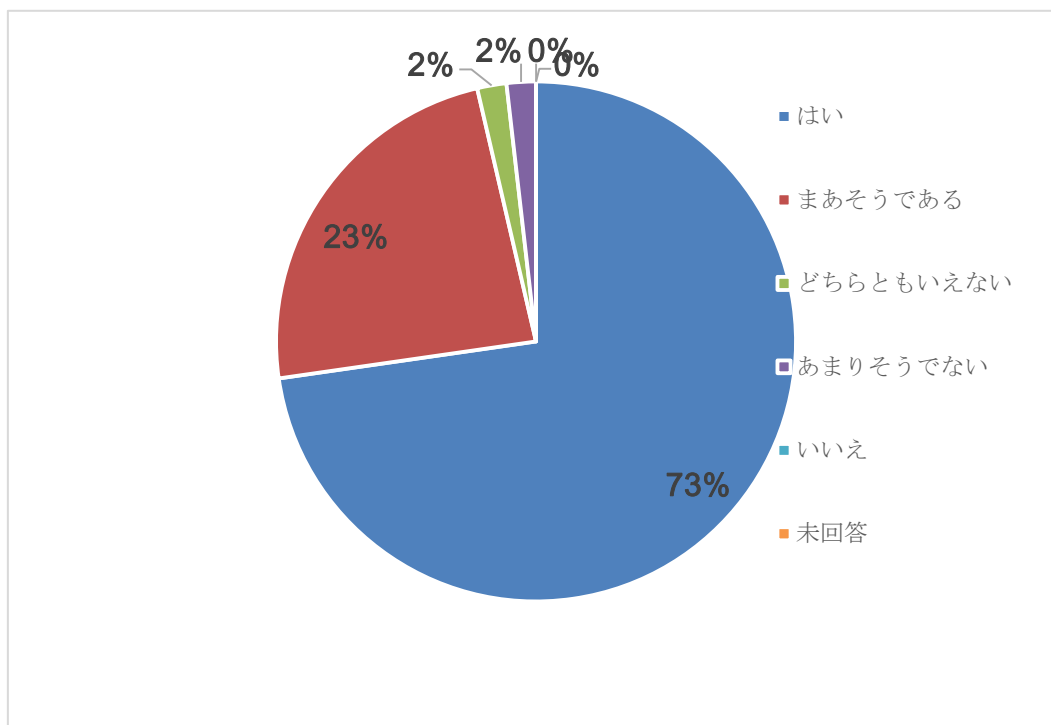
9. 宿題は日本語の勉強の役に立ちましたか？



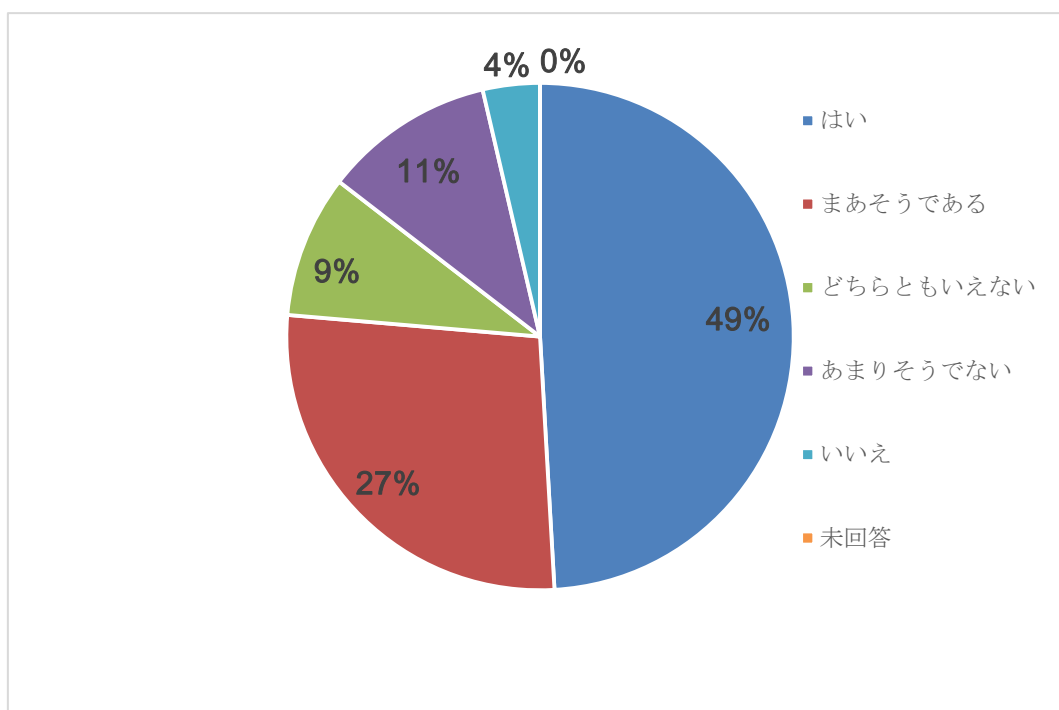
10. 日本語の授業を通して、日本の文化や社会について考えるようになりましたか？



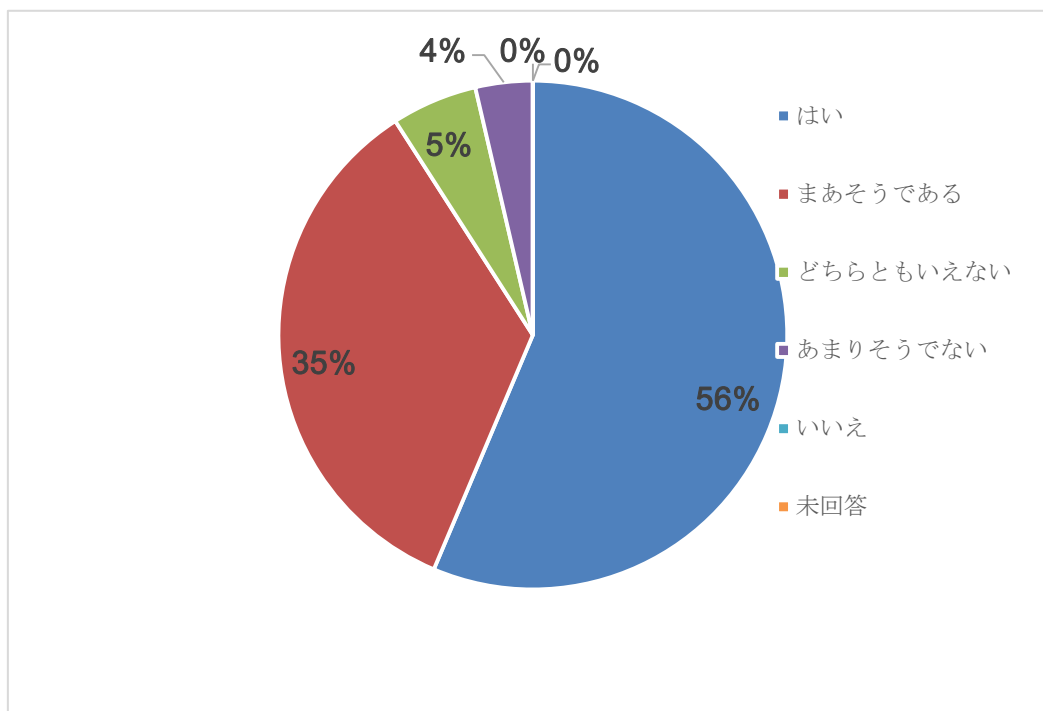
11. 教師のクラスでの学生への説明や指示は明確でしたか？



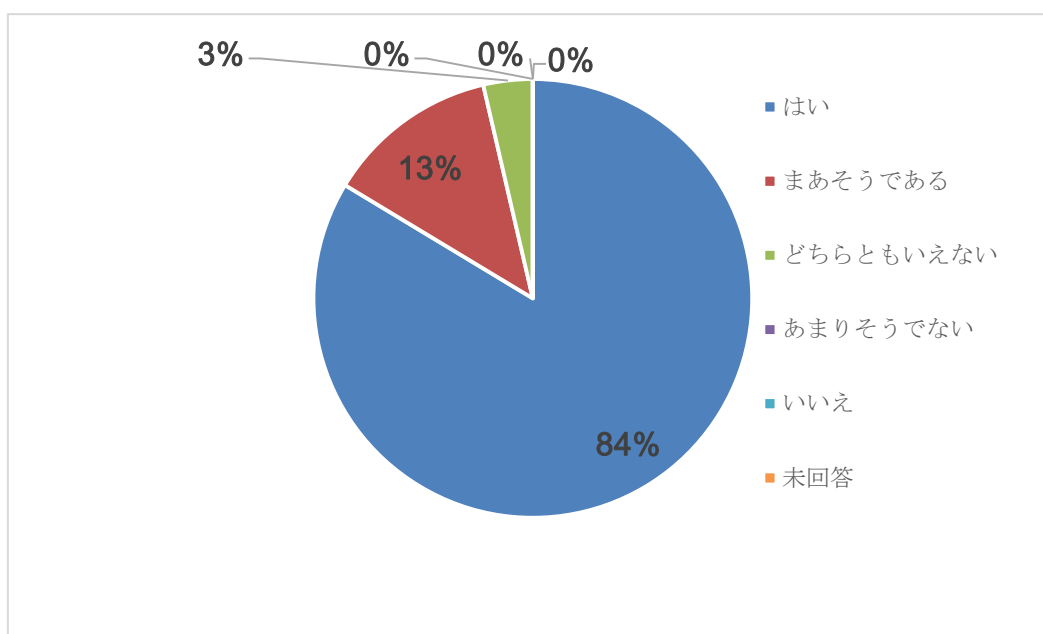
12. 日本語で話す機会が十分にありましたか？



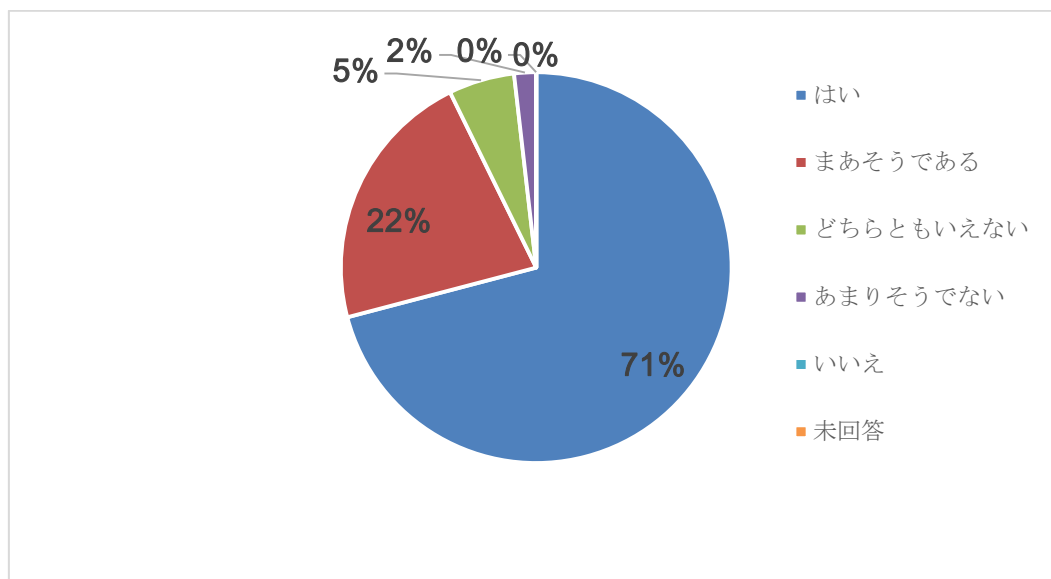
13. 立教の日本語科目数に満足していますか？



14. 1クラスの学生の人数は適当ですか？



15. 立教の日本語プログラムに満足していますか？



【2020 年度秋学期プログラム修了予定学生アンケートの結果】

集計中

（５）2020 年度の学生による授業評価アンケート結果（全カリ言語 B、自由科目）

正規留学生が履修する全学共通カリキュラム言語 B 日本語科目「大学生の日本語 A/B」および自由科目（特別外国人学生用 J 8 科目と同時開講）について、春学期は 7 月 9 日（木）～7 月 15 日（水）に科目履修者全員を対象に授業評価アンケートを実施した。結果は、担当者連絡会で科目担当者が閲覧できるようにした。

秋学期分については、全学共通カリキュラム実施の授業評価を大学教育開発センターに FD も合わせて業務を移管するのに伴い、日本語教育センター分も大学教育開発センターに移管することとした。2021 年度以降、全カリ言語 B、自由科目の授業評価アンケートは実施、FD、結果の公開などのすべてを大学教育開発センターが実施することになる。。

（６）2021 年度の課題と計画

課題 1：短期日本語プログラムの運営についての検討

短期日本語プログラムは 2019 年度より年 3 回実施することになったが、2020 年度からはシドニー大学の団体受け入れがない回が発生するため、参加者を安定的に確保しながら運営することも課題となる。この課題の達成に不可欠となる他部局との連携も念頭に置きながら、年間を通して短期日本語プログラムを円滑かつ安定的に展開できるよう、プログラム設計、運営について検証を行う。

課題 2：日本語科目のさらなる改善と開発

2021 年度 of 日本語教育センター科目は基本的にミックス型授業で展開するので、この授業形態による科目運営について検討を行う。また、2022 年秋学期より開始する RSP 事業用の集中日本語クラス開発についても取り上げる。他の日本語科目についてもさらなる改善と開発を行う。

2020 年度 日本語教育センター運営体制

運営会議

センター長	：丸山 千歌	(異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長	：韓 志昊	(センター長指名による、観光学部教授)
運営委員	：井川 充雄	(全学共通カリキュラム運営センターコア会議から、社会学部教授)
運営委員	：巖 成男	(経済学部教授)
運営委員	：松田 宏一郎	(法学部教授)

実務委員会

センター長	：丸山 千歌	(異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長	：韓 志昊	(観光学部准教授)
センター員	：池田 伸子	(異文化コミュニケーション学部教授)
センター員	：金庭 久美子	(特任准教授)
センター員	：藤田 恵	(特任准教授)
センター員	：数野 恵理	(特任准教授)
センター員	：小林 友美	(教育講師)
センター員	：任 ジェヒ	(教育講師)
センター員	：小松 満帆	(教育講師)
事務局	：吉田 友子	
事務局	：関口 資子 (～2020 年 11 月)	
事務局	：宮本 杏子	

兼任講師

浅野 有里	斉藤 紀子
井上 玲子	佐々木 藍子
神元 愛美子	沢野 美由紀
川端 芳子	高嶋 幸太
小森 由里	武田 聡子

谷 啓子
 富倉 教子
 長島 明子
 長谷川 孝子
 布村 猛
 東平 福美

開 めぐみ
 平山 紫帆
 三浦 綾乃
 山内 薫
 森井 あずさ

2020 年度日本語教育センター会議開催記録

月	日	
4	10	第 1 回実務委員会
	15	第 1 回運営委員会
5	15	第 2 回実務委員会
	20	第 2 回運営委員会
6	19	第 3 回実務委員会
	24	第 3 回運営委員会
7	17	第 4 回実務委員会
	22	第 4 回運営委員会
9	25	第 5 回実務委員会
	30	第 5 回運営委員会
11	6	第 6 回実務委員会
	11	第 6 回運営委員会
12	4	第 7 回実務委員会
	9	第 7 回運営委員会
1	29	第 8 回実務委員会
2	19	第 9 回実務委員会
	24	第 9 回運営委員会

実務委員会：センター長、副センター長、センター員（日本語担当専任教員、日本語担当教育講師、センター長指名教員）、事務局

運営委員会：センター長、副センター長、全学共通カリキュラム運営センターコア会議からの選出委員、国際センター長・副センター長からの選出委員、センター員（センター長指名）日本語担当専任教員（陪席）、事務局（陪席）

2020 年度日本語教育センター活動報告
CJLE Program & Activity Reports (2020)
2021 年 3 月発行

編集兼発行者	日本語教育センター
発行責任者	丸山千歌
発行所	立教大学日本語教育センター 〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1 Tel: 03-3985-4202